
運命の眠り姫

威之市課長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命の眠り姫

【Nコード】

N9549T

【作者名】

威之市課長

【あらすじ】

普通の高校生活を送っていた。しかし日常なんてある日突然一瞬にして碎け散った。さて、これからどうしようか？自由気ままに異世界を駆け巡るきつとそんな少女の物語

この小説は作者が徒然なるままに妄想をぶち込んだ作品です。読了後のクレームは一切受け付けておりません。

誤字、脱字、文法的誤り、感想などは大歓迎です。

1 1何コレ理不尽？

きつと今まで俺は極一般的な高校生だっただろう。

名前は浮影^{ふえい} 俊喜^{としき}、年齢は16、名字だけは格好良いと言われる。彼女いない歴16年の何処にだって居そうな変哲も無い高校生だろう。

それも数分前までの話

今日の前には閃光が走っていた

遡ること数分前

帰宅部である俺は今日も真っ直ぐに家^{オアシス}を目指し歩みを進むていた。するとどうだろうか目の前から美少女ではあるものの真っ黒なゴスロリファッションに身を包んだ、正直知り合いだったら全力で無関係^係を証明したくなるような、少女が向かってきた。

思えばこの時点で運命は決まっていたのだろう…

何事も無く脇を通り過ぎようとした瞬間

今度は時代錯誤としか言いよの無い騎士の鎧を

身に纏った残念イケメンが現れた。

流石にねえよっ!!!

「見つけたぞっ!!この悪魔めっ!!」

頭までしっかり逝っちゃってるご様子でした。

「我が光の神技をうけよっ!!」

だ、駄目だ…余りにも…

見てられんっ…!

その時俺は冗談だとばかり思っていた。

そしてそれが少女に向けられたものではあったが間に居た俺が被害を被るとは思いもしなかった。

「閃・光・斬っ!!」

そして現在

光に包まれ消えて行くのをそして何か満たされていくのを感じた。

「やったかつ!？」

「それはやってないフラグでは無くて？」少女はぼやく。

「馬鹿な!?我が閃光斬が敗れるなど…!」さも有り得無いという様子だ。

「その閃光斬とやらは間にいた少年に当たってたわよ?」

「罪無き少年を盾にするなど悪逆非道の極みっ!!許さん!!」

「とりあえず私は何もしてないわよ?付き合ってらんないわね…」

少女はそう呟くと文字通り飛び立った。その背には形式的過ぎる程の悪魔の翼があった。

「ま、待てっ!!」

そこには少年を殺した挙げ句悪魔も取り逃した残念イケメンがいるのみだった。

1 2何コレ理不尽？

「知らない天井だ…」

意味は無いがそう呟く。

(…あれ？ここまず天井無くね？)

今俺がいるのは何処までも続いていそうな真っ白い空間。この白い空間に

唯一変化のある光景と言ったら…背中に翼があるこれまた美少女。

「おいおい…勘弁してくれよ…」

その美少女は正に天使と形容するのがふさわしかった。

記憶はある…突然現れたとてもイタイイケメンに何かされた。良く分からないが多分殺された。

しかし何故ここにいる？目の前の少女が背で語るあなたは死にました。と

ここは天国なのだろうか？それを知る術は少女のみだ。

「あゝ？ちょっとお尋ねしたいんですが？」

勇気を出して少女に話し掛ける。

「はい、なんでしょうか？浮影俊喜さん？」

「えっ！？何故名前を!？」

「何故と言われましても…。理由になるかは疑問ですが私がある方の方の言うところの天使だからでしょうか？」

「天使ですか…。詰まるところ僕は死んだのでしょうか？」薄々感づいてはいた。しかし…

「一般にはそうなんでしょうけどちょっと不具合がありました…」

「不具合？」

不具合だと？何その不安を煽る言葉…。

「はい、俊喜さんは死因を覚えてますか？」

「えーと…鎧着たイケメンに殺された…？」

「そうなんです…。『あれ』が問題の原因なんです…」

「『あれ』と言うことはあの人が誰なのか知ってるんですか!？」

『あれ』呼ばわりってことは度々問題を引き起こしてるのだろうか？

「はい…『あれ』は…」

「『あれ』は…？」神妙な面持ちで聞き入る

「私の上司なんです…!」

「ちょっと待てっ！！流石に上司を『あれ』呼ばわりはまずいんじゃない!?」

「良いんです…！『あれ』は度々問題を起こしては後始末はいつも私…」

… ちょっと可哀相になってきた。

かれこれ30分は彼女の愚痴が続いた。

それにしてもこれは…

これは『あれ』と呼ばれても仕方ないなと思う…

1 3何コレ理不尽？（前書き）

説明パート的なものです。正直作者自身がコイツ何言ってるの？という感じですよ（笑）

1 3何コレ理不尽？

「さて、本題に戻りましょう。」

まあ、ずらしたのあんただけど…

「何だっけ？『あれ』があんたの上司で…」

「そうそう、そうでしたね。」

愚痴を聞いてると天使と言っても人間らしさはあるんだな、とだいたい打ち解けていた。

「認めたくはないけど天使「あんた」の上司ってことは『あれ』は神か何かなの？」

「その認識で間違ってます。」

何だか急に神を信じるのが馬鹿らしくなってきたな…

「あなたが神（笑）から受けた攻撃は本来ならあなた一人に当たったところで止まらず、身体どころか魂までも消し去って悪魔を消した筈なんです…。」

「つまり『あれ』はそんな危なっかしいものを微塵も確認せず使っているの？」

「はい…本っ当に申し訳ありません！」

「良いよ、あんたが悪い訳じゃないし。」

「話を戻します。しかし現にあなたの魂はここにあり、あの悪魔は健在です。それは何故でしょうか？調べて見るとあなたの魂が『あれ』や私と同様の神力とでも言うべきものを攻撃から吸収していたんです。結果攻撃は無力化され、現在に至ります。」

「じゃあ何？今俺は神の力を得て、新世界の神になる、とでも言った状況？」

「いえ、あなた程度の神力じゃ、世界の管理なんてできませんし、力を使い切った後に元の世界に戻って頂きます。」

「2つ程疑問！神力って使えんの？あと今のタイミングじゃ元の世界に帰れないの？」

「神力はエネルギーなので他のエネルギーに変換することであなたにも使用が可能です。事実『あれ』も光エネルギーに変換して使用していました。」

「ふーん…便利なもんだな…」

「実際のところ熱や電気のエネルギーに変換した方がよっぽど効率が良いと思いますがね…」

「ははっ………」

「あと今はまだあなたは元の世界には帰れません。説明が長くなりますが構いませんか？」

「あーうん…良いよ…？」めんどくさそ…」

「まず神力を持つ者は運命というものがありません。あなた方人間は自らの意思で動いている様に思えて実は予め決められた道を歩いているに過ぎません。その運命を決めるものは世界です。実例はありませんが人間の本質を持つ貴方が今元の世界に戻るとあなたという人間にその世界での運命がある筈なのに今は無い、そんな矛盾が生じます。これは何よりも世界への負担が懸念されます。ここまで良いですか？」

「うん…多分…？」

「やっぱりめんどくさい…」

「…まあ、続けます。そこであなたが元々運命を持っていない世界、つまり異世界に行つてしまえば、無かった物が無い、これには全く問題が生じません。そこで神力を使い切つて頂ければあなたを元の世界に戻しましょう。」

「つまり最終的には戻れるんだな？」

「はい、その点はご安心ください。」

そうして俺の狂った運命を取り戻す人生が始まった。

1 4何コレ理不尽？

その後いくつかの質問をした。どんな世界？魔法とかあんの？だとかそんな内容だ。

返答はこうだ。元の世界でいう中世のような世界で魔法が日常的な物なのだそうだ。正直科学の跋扈する現代日本の申し子にそんなことを言われてもわーすげーファンタジーだね〜と他人事のような感想しか浮かばない。

はあ…見つめ直したら辛くなってきた…俺にだって家族も友達もいるのだ、それが急に殺され、異世界に行け、だ。
中途半端に常識に囚われている俺のような人間には、既に何が何だかだ。

「そろそろ準備は良いですか？」天使からお呼びが掛かる。

「準備ったって精々心の準備くらいじゃねえか…」

「それもそうですね。じゃ、行きますよ。」

「おう、…で、何をすれば？」

「何もせず力を抜いて下さい。」

天使が何かやっているが全く見当もつかない。

そして俺の意識は水に溶かした絵の具の様に広がるように薄れていった。

うまく聞こえないが天使からは良い人生を、そんな風に言われた気がした。

望まぬ新たな人生ではあるが多少やる気が出てきた。さて…

ぼちぼち頑張りますかっ！！

気が付くと今度は真っ暗な空間にいた、先程の天使がいた真っ白な空間と打って変わりとても狭い、音も水を通した様にぼやける様にして聞こえる。しかしあの空間と共通し、何処か安心出来る感じがする。

寝てたのは一瞬だったろうか？数ヶ月だったろうか？目覚めたての頭はそんなことを考えられない。

！！

周囲が動き出した！？

狭かった空間は俺を押し潰さんばかりに圧迫してくる。

ついに真っ暗な空間から抜けだした。同時に口の中に得体の知れない物の入ってくる感覚、慌てて吐き出そうとする。

「おんぎゃあーっ！おんぎゃあーっ！………」

一瞬自分が泣いてるなど思いもよらなかった。

長きにわたる胎内の生活は呼吸の仕方すら忘れさせていた。
(つまり俺は生まれたんだな…)

こうして今ここに浮影俊喜の新たなる人生が始まったのだ。

1 4何コレ理不尽？（後書き）

やっと…やっとのこと主人公誕生…

もっとこつてキパキした展開の方が良いんでしょうか？

番外編 家族の愛（前書き）

馴れないもので何となく不自然さも感じますが…

番外編 家族の愛

廊下では男たちがソワソワとしていた、皆一様に新たなる生命の誕生への期待である。

「兄様、妹かな？弟かな？どっちだと思っ？僕としてはさ……」

「うるさいっ！全く何度目だその質問！？少しは落ち着けっ！」ただでさえ気が気でない状態に弟からの質問責めについ荒立った声をあげてしまう。

「ふふっ、お前こそ落ち着けアレス、お前だつてメルが生まれる時はこんな感じだったぞ？」父親が息子2人をなだめる。

「ほら、お父様だつてこう言ってるよ？」父親を味方につけた弟^{メル}がここぞとばかりに兄に攻勢を仕掛ける。

「だからって調子に乗るなっ！」兄からの叱責につまらなそうにも渋々と身を引く。

「おんぎゃあーっ！おんぎゃあーっ！……」

「生まれた！？」

「男の子！？女の子！？」子供たちが走って行く

何気に真つ先に駆け出して行ったのは長男のアレスだったりした。

何だかんだ言つて結局気になっているのだ。

次に続くは父親のクロノス、そして最後にメルとなっていた。メルだつて全力で走つてはいた。しかし父親と兄とは身体的スペックが

違い過ぎた。父親や兄が獣人という身体的に恵まれた種族なのに対し、彼はエルフという身体的には少しばかり劣る種族だった。

ちなみに彼女の母親もエルフだった。二人の子を産んでも不老長寿という種族的特徴のおかげで美貌は崩れるところを知らない。

三人は分娩室となっている部屋の扉を壊す様な勢いで開けた。

「お坊ちやま！？ご主人様まで！？」驚きの声をあげたのはふくよかな印象を与えるネコ耳の40代程のメイドであった。

「まだ出産は終わってません！申し訳ありませんが廊下でお待ち下さいませ！」

「でも赤ちゃんの声聞いたよ？」

「とつても大きな泣き声だった！」子供たちが反論する。

「はい、お坊ちやま、しかもう一人奥様のお腹には赤ちゃんがいるんですよ。」

「双子なの！？」

「やった！」兄は素直に驚き、弟は二人も自分より下が出来ることを喜んでいた。

また父親も双子なのは初耳らしく

「それは本当か！？」

とかなり驚いていた。

そうして間もなく二人目の産声があがった。

男たちも部屋に入れるようになり、母親と、妻との面会を果たした。

「お疲れ様、ありがとうございますこんな可愛い娘たちを…！」

「はい、流石に疲れました。でも薄々感じていたとは言え、双子だとは驚きです…」流石に産後で疲労の色が濃い。

「ああつ！ありがとうございます…！本っ当にありがとうございます…！この娘たちをきつと大事に育てよう…！」

「ええっ！もちろんです…！」

そんな両親の会話も半ばに子供たちは赤ん坊に夢中だった。

「女の子二人だったね〜」

「この娘たちはきつと俺らの手で守っていこう。」そう決意したのはアレスだった。

「あ、良いね〜。そういうの。お姫様を守る騎士とかカツコイイよね。」メルも同意する。

「ああ！俺達の手で…！」

「ところでさ、何でこっちの獣人の子は耳が白い毛に覆われてるの？」

答えたのは父親だった。

「明確には分からないがきつと何らかの思しめしだろう。なんにせよ家族なんだ、大切にしよう。」

「もちろんだよっ！」

「それに俺とメルでこの娘たちを守るってきめたんだ!!！」

「それは良い心掛けだな。だったらもっと強くならなくてはな!!！」

「こんな家族団欒の日だった。」

番外編 家族の愛（後書き）

ちよつとした家族と種族紹介を兼ねた番外編でした。

こんな駄文でも読んで下さる方々誠にありがとうございます！

2 1 異界の半神半人

さて、どうしたのか？

異世界に来た。これは確かだ。何故なら生まれて三日程だったのに常識の範囲を外れるモノを沢山見た。

とゆーか基本天井と睨めっこし、たまに来る人達にあやされている生活だが元の世界と同じモノを見た記憶が無い。

まず建物、天井にも装飾が施され、きつと豪邸なんだろうなと予想される。俺は一体どんな家に生まれたんだ…。前世にこんな家には行ったことすら無い

次に人物、人型こそしているが獣耳だったり、エルフ耳だったり。ただ最初に見た人がふくよかそうなネコ耳メイド（およそ40代）だったのはショックが強かった。流石にネコ耳を付けて赤ん坊の世話する筈もないだろうから本物だろう。

とりあえず話を戻そう、母親と思しき人物は銀髪のエルフだった。異世界ならありっちゃありだが常識的に自分の母親だとは認識し難かった。

しかし無償の愛とでも表現すべき包み込む様な優しさは高校生の精神にはこそばゆいものとても暖かった。

ただ授乳は勘弁してください…。生きる為とは言え正直道徳的に…。

そして父親は縞模様の耳の毛から虎か何かの獣人かと思われる。見るものの不思議は全て異世界ですからで済む気がしてきた。

父親は年齢は30程だろうか？金髪に細身ながらも筋肉で密度の高

そう身体をしているそんなガツチリとした印象を受ける。正直カッ
コイイ。

あと二人（以上？）の兄もいることが分かった。年齢は恐らく4、
5歳どちらも将来有望そうな顔立ちだ。片方が獣人、もう片方がエ
ルフだった。

この遺伝傾向を見る限り俺が普通の人間（ここでは身体的特徴の話
で）ということは無いだろう。

ま、嫌じゃない。むしろただの人間だと異世界では何となくひ弱な
印象を受ける。

人間なんて一人じゃ何もできない生き物だ。まあ獣人やエルフが違
うとも言い切れ無いが。とゆうか普通の人間はこの世界にいるのだ
ろうか？

問題点がいくつがある。

まず身体を動かせない。首も座つてないから視点変更もまともに出
来ない。早くせめてハイハイくらい出来る様になりたい。時間が有
りすぎるのも困る。既に3日で赤ん坊ライフにはくたくただ。しか
し、歩ける様になるのはきつと何ヶ月も先だ。気が遠くなる…。

また、言葉が分からない。天使も気を効かせて、翻訳機能でも付け
てくれれば…。無いものを憂いても仕方ない。暇なんだし言語を覚
えるとしよう。

しかしこれはつまり言語を覚えるまで誰とも話せないまま1、2年
の赤ん坊ライフを過ごさねば為らないということだ。不安は覚える
が…。まあ、何とかなるだろう。

また睡魔が襲ってきたので寝ることとする。今更ながら夢オチであ

ることをいしも願わずにはいられない。

2 異界の半神半人

新たな人生が始まって既に5年が経ち、今の生活にも多少は慣れた、いや慣れざるを得なかった。

昔は両親共に美形！キタツ！俺の時代k t k r！

俺にもそう思ってた時代もありました…。それには大きな欠点があった。今の俺？可愛いしいドレスを着てお勉強中だよ！バーローツ！！

クソ…何で女なんだよ…男尊女卑するつもりは無いけど男の方が良かったよ…。いやうん、産まれて数ヶ月で股擦り合わせても相棒の感覚無いな…とか感じてたよ？きつと極小なんだな、とか逃避もしたよ？だけど消失を目の当たりにした時はマジ泣いたね…。涙が涸れるまでさ。

家族にはめっちゃ心配されたけど理解される筈もない。

あとはこの世界の言語だろうか？確か『ポトレス語』？とか言う。マヌケな響きだがほとんど世界共通語だとか。これを覚えりゃ言語に不自由しないらしい、全く便利なものだ。最近は一々日本語を経由しなくても話せる様になってきた。そのうち日本語を忘れてしまいそうで怖い。

元の世界に帰ってポトレス語を話したら一気に引かれること間違い無しだ。オカ研とかには惹かれるかもしれないが。

あとは…そういえば双子の妹がいた。エルフ耳の保護欲そそられる可愛い女の子だ。髪は金髪眼は碧眼、まんま外国人としか見れない。

ちなみに俺はというと銀髪に金色の様な眼をしている。比べる対象がないからなんとも言えないが、そこまで珍しくは無いらしい。むしろ特徴的なのは白い耳、獣人たちは基本頭の方に耳があり、獣耳以外は人間と大きくは違わない。また耳は、大まかに何の獣人かを見分ける指標となっている。父も兄も耳は普通の虎の黄色い縞模様、の耳をしている。俺だけが白虎の白い耳、突然変異だろうか？まあカッコイイから気にしないけど。むしろ気に入ってるけど。あとは尻尾もあるが、狐とかみたいにもふもふじゃないのはマイナス評価だ。

今の俺が普通の人間じゃないと再認識すると急に元の世界が恋しくなってきた。

2 異界の半神半人（後書き）

何かしばらく説明回っばくなりそう…

2 3 異界の半神半人

「ルナー…、本飽きたよ…」。「文字の勉強とは言え所詮子供の読み物だ。文字を覚え始めた高校生には些か退屈なのだ。

ちなみにルナとは妹の愛称で本名はルナシア。

あと俺はアティーニヤ、家名は長くて覚えて無い。家族内、しかも幼い子にはフルネームなんてそうそう使わないから1、2回くらいしか聞いた記憶がない。

「お姉様真面目に勉強しなきゃ駄目ですよ？」

「うう…ルナは真面目過ぎるよう…」言葉遣いに関しては習うがままに使っているから恐らく女言葉的になっているんだろぅが知ったところでは無い。

!!!

帰って来た！誰がつて？家庭教師のリアン先生だ。距離はおよそ100即座に勉強しているフリをせよ！と発達した聴覚から緊急指令が入る。

彼女は基本ニコニコしているがちよつとでも不真面目さを見せると本で頭を叩かれる。頭上に耳があるため耳が潰れてそつちが痛い。ゆとり万歳な俺にとって体罰は辛い。しかも一日10回は叩かれている気がする。スパルタなんて流行らない、そう物申したい。

ガチャツ！！

(来た…！)

「アテイちゃん？ルナちゃん？すっかり勉強してたかしら？」

「はい、リアン先生！」

真面目に取り繕え！悟られるな！

だってこの人無駄に鋭いからな……。

「じゃあ、アテイちゃん、ルナちゃん交互に音読して頂戴。」

「はい。勇者はケルベロスとマンティコア、煉獄鳥を仲間にし、魔王の城へ向かいました。」

随分禍々しい勇者だな……。

「しかし魔王はとても強く、苦戦を強いられました。しかし勇者たちは諦めません。」
有りがちな展開だな……。

「勇者は叫びます。『皆の力を俺に分けてくれーっ！』両手を掲げると世界中からの祈りが勇者に集まり、大きな光の球が出来ます。」

……元氣玉？

「『ば、馬鹿な……！？何処にそんな力が！？そ、そうだ！今なら世界の半分をくれてやるう！』」
「魔王！？」

「『いいえ』ドガー！ンツ！！』ぐわああああっ！！』魔王は滅び、平和を取り戻しました。」

音読で効果音付けるって……。

「勇者は魔王の城に眠る財宝をおじいさん、おばあさんの元に持ち帰り平和に暮らしましたとさめでたしめでたし。」「もしかして桃太郎的な物だったのか……？」

「はい！良く出来ました！今日の授業は終わりです。お疲れ様でした。」

「ありがとうございます。」

「あと…アテイちゃん？」

「はい？」

スパンツ！

鋭い音が鳴る。

「自習。しっかりしてなかったでしょ？」なんで分かんのか！？」

「ごめんなさい…！」

「よろしい。以後気をつけなさい。」

クソ…この人はエスパーか！？」

「あんまり厳しいと男も逃げますよ？」

スパンツ！

「何か言ったかしら？」

ホントに耳が痛い…。

2 3 異界の半神半人（後書き）

もう内容が思いつかずカオスな内容になりつつある今日この頃…

どうか見放さないで下さい（泣）

2 4 異界の半神半人

「あ、お兄様だ！」

ルナがそんな声を上げる。

前方より二人の兄が近づいて来る。

「お疲れ〜ルナ、アティ。リアン先生の授業はどうだった〜？
そんな質問をしてるのは次男メルキウスことメル兄様だ。」

「はい楽しかったです！」

「あの人の授業が楽しいとはまた変わってるね〜。アティはどうだった？」

「今日も沢山叩かれて…。嫌になります…。」

「あはは、僕と同じだ！」

「アティ！しっかりしろ！コイツみたいになるぞ？」

そうしてメル兄の頭を叩くのは長男アレストことアレスだ。

「ど〜いう意味〜？」

「そのまんまだ。」

「でもアレス兄様？アティ姉様は勉強は凄いですよ？」

「ふむ、その分これよりマシか。」

ホントに申し訳無いんですがそれは単に前世から受け継いだ(？)記憶の恩恵なんです…。きっと才能は格段に劣ってるんです…。

「そんな頭悪くは無いよ!? 僕だって!」

「とにかく不真面目なのが問題か。」

「不本意だけどそうなのかな…」

「おや、集まってどうしたんだい?」

声を掛けてきたのは、この兄妹の父親、クロノス公爵だ。うん公爵記憶が定かなら公侯伯子男で一番上の位だ。天井と睨めっこしてた時どんな金持ちの家に生まれたかと思えばこんな金持ちだ。公爵、そりゃ金も持つてるだろう。

この家に生まれた時からちょっとした国の重要ポジションに位置していたのである。

まあ政略結婚でもさせられそうな時は家出でもするだろうが。ただとにかく荷が重い…。

「はい、たまたまここで出会って勉強の様子などを話し合っていました。」

たまたま出会うという表現が正しい位にこの家は広いのだ。初見なら迷う自信がある。

「そうか。リアンに先程会ってな。二人共優秀だと言っていたよ。良く頑張ってるようじゃないか。」

やはり褒められる分には悪い気がしない。それはどんな時、場所で

も変わらない。

「「はいつ!!!!」」

「良いな。リアン先生には褒められた事も無いよ。」

「そうか。それはお前が脱走したり、話を聞いていなかったのが悪いんだ。」

流石メル兄…。あの人に臆さずそんな事やるなんて…。

俺はある程度暴力もとい調教(?)に屈したのに、今や21歳を迎える精神より強いかも知れない…。

2 4 異界の半神半人（後書き）

サブタイを前回ミスってた…

2 5 異界の半神半人

時は変わってただ今食事中。

日本人としては辛い米抜き生活。主食はパン等だ。あと元々嫌いでは無かったが虎という身体的特徴からか肉を好んで食べてる気がする。

日本人好みの味付けとはまた違うから独特な風味とでも言うべきものにも最初は苦戦した。

食事は良いものを食わせてくれているようで。野菜も農薬使わずの完全な有機栽培でおいしい。

ただ何の肉を食べているかは知らないし、聞く気も無い。

以前に

「おいしいですね。何のお肉でしょう?」
と聞いたら何食わぬ顔で

「それはヤマガエルの舌だ。なかなか取れない貴重な部位だよ。」
と答えられた。リバーズはしなかったけど食べる気は失せた。

それから知らぬが仏。美味しく食べられるなら良いじゃないかという事で聞かなくなった。

食事中は家族皆での食事だが静かだ。そんな正式な料理店に入った事は無いが余り大きくは違わないようで、記憶に残っている限りのマナーでも子供だからかどうにかなっている。

食事も終わり家族でティータイム。

因みにさっきのは晩御飯だ。日本人の感覚としては精々朝か昼に飲む位だがもうこの世界の習慣と考え、当然の事となっている。良い茶葉使ってるんだらうな…。ホントに美味しい。

「ルナ、アテイ。リアンさんから聞きましたよ？勉強を頑張っているそうですね？」

そういうのは母親のキュベアである。

「はいっ、一人で本も読めますっ！」

元気にルナが答える。マジ可愛ええ…。

「アテイは？どうですか？」

「私も大丈夫です。」

俺はとりあえず何処でボロが出るか分からないので口数は少なめにしている。

「ほう、流石我が娘だ！これは次の舞踏会では自慢しなくてはな！…バカだ。親バカがいる。これはその場にいる者全ての考えだった。

「やめて下さい！お父様…。恥ずかしい…です。」

やばい照れてるルナもめっちゃ可愛い。元の世界にお持ち帰りしたい。ルナたんハアハア…。

とまあシスコンっぷりが暴走し始めたので一旦落ち着こうか。

「アレスも剣術を大分頑張っているそうじゃないか。ディランももう手を抜いてられないと言っていたよ。」

「はい、ありがとうございます。」
「アレス兄は真面目だなあ…。」

「メルは実技魔法は頑張っているそうじゃないか。」

「はい、僕も頑張ってます。」

「ただ座学の態度に問題有りと聞いている、頑張りなさい。」

「はい…。」

メル兄は一を聞いて十を知らずに二十を知るといって何か外れてる天才だそうだ…。

普通に凄い次期公爵家当主アレス兄、偏った天才のメル兄、容姿端麗、眉目秀麗、とにかく可愛い妹ルナ、そして俺こと転生者アティ。そんなアブノーマルな子供たちがこの家には揃っているのだった。

3 1 眠り姫発寝(はっしん)?

その夜はこれまた唐突だった。自分の部屋に一人でいた時だった。

《こんばんは。浮影さん。》

声の主の姿は…無し。聞き覚えはあるが。

「何だ幻聴か…。」

《無視して寝ようとしないうで下さい。》

!!!!

《今更素で驚かないで下さい。》

「それもそうか。で、姿が見えないけど何処にいるんだ？天使さん？」

《以前の天界とでも言うべきところです。神力があれば楽に入ってくるので来て下さい。》

「いや…入って来いって…。何？死ねと？」

《じゃあキーワードを作りましょうか。そうですね…。じゃあ『GOTO HEAVEN』としましょう。》

「やっぱり死ねと言ってるよね!？」

《気にしないで下さい。そしてさっさと来て下さい。》

「へいへい。『G O T O H E A V E N』！」

唱えると同時に意識が揺らぎ浮かぶ様な錯覚…でも無いかも知れない物に襲われる。

とりあえずベッドの上だったから倒れてケガをすることはなさそう
だ。

気が付くと事実5年振りとなるあの白い空間だった。変わる所も皆無なので記憶の通りだ。

「急な呼び出しですいません。」

見覚えのあるあの天使だ。

「いいよ、気にしなくて。それにしても久しぶりだな。」

「そうですか？すみません。永遠にも近い時間を生きる私たちには一秒も五年も大差が無いもので…。」

「あっ、そう…。ところで…」

まずは静かに沸々と怒りを貯める。

「はい…？」

「良くも女にしてくれたなあっ！？」

一気に怒りを爆発させる。コイツが男だったりしたらコレは相棒の分だ…っとか言っつてそいつの相棒を蹴り上げているだろう。俺は紳士なので女に手を挙げる事は無いが。

「大丈夫ですよ。とても可愛らしいですし。そんなの小さな事です。それともミジンコにでもなりたかったのですか？」

「何処をどう間違ったらその返答になる！？悪い事したら謝るっ！コレ常識！！」

「すみませんでした。とりあえず言い訳をさせて下さい。」

「よし、許そう。」

何か事情がありそうだ。

「私が貴方の出生情報を入力してた時です…。」

「うん？」

「貴方が天界を去り、貴方がいくらか有利な状況で生まれる様にしていたのですが…こんな時にまた『あれ』が問題を引き起こしてくれやがりました。」

また『あれ』かっ！？

「ぎりぎり人型の補正は掛かったんですが…。」
性別補正等は掛けられ無かったと…。

「あんたも苦労してんだな…。」
とりあえず労ってやろうか…。

「分かって頂けますか！？私もせめて貴方がミジンコに生まれられない様に尽力致しました！！」

とりあえず今度『あれ』に会ったら犠牲となった相棒のためにも可能な限り殴ろう、そう決意した。

3 2 眠り姫発寝（はっしん）？

今天使から神力講座を受けているんだが…、マジ分かんねえ…。

理解した所だけでも要約すると、

まず以前も述べた通りに神力を持つてしていると運命が無い。これによつて他人の運命に干渉出来るそうさ。

例を挙げるなら、例えば車に轢かれそうな人Aがいる、周りにも人はいるが救えない、これは皆Aを救えないという運命があるからだ。しかしそこに神力持ちがいれば救えるかも知れないし救えないかも知れない。

救う運命も救えない運命も持ち合わせていないからだ。

また逆に干渉される事も無いそうさ。

とまあ理論的にはこうだが天使たちは基本干渉をしないというルールの元動いてるそうさ。

しかし俺が動いて運命を変える分には構わないらしい。

というか俺がいる時点で既に多少なりとも運命は変わっているそうさ。

次に神力の変換だが、天使たちは神力の塊みたいなものらしいからわざわざ使用方法を習うまでも無く、正直教えるのは困難なのだろうさ。

ただ天界では神力伝導率とやらが良いらしいので消費は望めないが練習には丁度良いらしい。

それにしても俺は本当に神力を消費しきれのだろうか？平和な生活が続けるだけならこの五年間に神力など使う要素も無かった。具体的な量も分からないが積極的に使用しなくては無くならなそうさ。

「では、浮影さん次は『生きとし生ける者の大図書館』ライブライブラリーの説明に移ります。」

聞き慣れない単語が急に出て来た。

「ライブライブラリー？」

「はい、そうです。簡単に言えば生物の運命が本となって置いてある所です。ここで私たちは運命を確認し、手直しなどを行っております。」

「手直し？干渉はしないんじゃないか？」

「基本そうですが世界のバランスを崩しそうな存在が誕生した際には、消しに行きます。事実今の貴方の世界にも過去に魔王が誕生し、天界から討伐部隊が派遣されました。」

消すって表現怖いな…

「それって俺はバランスブレイカーじゃないの？」

多少身の危険を感じ聞いてみる。

「それは運命が見通せ無いので何とも…。まあ、今回は私たちに責任があるのである程度は目をつむります。」

よかった…消される事はなさそうだ。

「だいぶ話が逸れたけど何だっけ？ライブライブラリー？って何なの？」

軽く忘れてた。

「あつ、そうでした。ライブライブラリーというのは先程述べた通り運命を確認できる場所です。貴方に関わる事で運命はどんどん変わるのだからなりません。参考までに運命の確認が出来ます。」

「それってほとんど未来予知じゃね？」

「使い方次第ではそうなりますね。」

サラっととんでもない事言っただな…。

「あ、ご安心下さい。あんまり外れた行動をした場合には…。」

「場合には…？」

ゴクリと唾を飲み込む。

「容赦無く消します。ですから頑張つて善行を積んで下さいね？」

寒気が走った、目が笑ってないよ天使さん…。

3 2 眠り姫発寝(はっしん)? (後書き)

明日からテスト勉強を始めねばならない為、十日程更新が止まりま
す。

もしかしたら勉強に飽きて更新するかもしれませんが(笑)

3 3 眠り姫発寝(はっしん)?(前書き)

初予約投稿です。

上手く出来てるかな?そんな三日前の作者でございませう。

3 3 眠り姫発寢（はっしん）？

ずっと続いてるかの様に思えた白い空間。天使によるとこれは俺の空虚（貧相？）な想像によるモノだそうだ。

「手軽に図書館、又は本のたくさんある場所を想像して下さい。」

その言葉通り図書館をイメージしようとしたが、夏に涼みに行った位しか記憶が無い。とりあえず学校の図書室にした。どちらにしようかと数える程しか入った事は無いが。

周りの景色に変化が訪れる。これは正に俺の学校の図書室だ。

「イメージは付きましたか？私から貴方の想像を伺う事は出来ないので大まかな説明をします。まず運命を見る対象を出来る限り絞って下さい。」

誰にしようか？とりあえず…リアン先生辺りにしようか。

「決まりましたか？ではどの本でも良いのでその人をイメージしつつ、本を手に取って下さい。」

棚から一冊の本を取り出す。

『リアン・ベルゼ』

これは確かリアン先生のフルネーム？一番最初の自己紹介で名乗ってた気がする。

「その本に見たい対象の名前が浮かんでいるなら成功です。運命の確認が可能です。」

「これって実際にプライバシーもクソも無くな？」

「それはそうですが、世界の平和の為に多少の犠牲が必要なんです。」

「うわ…何その歪んだ正義っぽい台詞…。」

「それに私達にはその人がどんな人かより世界にどんな影響を与えるかが重要です。そんな事より本を読まないんですか？」
結局俺は本を読むしか無かった。

内容はリアン先生の人生だった、運命を見てるのだから当然かも知れないが。

とても平和な内容だった。加えて数年もすれば結婚するようだ。良かったね！リアン先生！

「あとこの本はその人の人生に置いて、重要性の高い事柄のみを残す『絞り込み』も可能です。また逆も可能ですが、やりすぎるとその人が立った、座った、歩いた。とかの話になるので気をつけて下さい。」

流石天上の者たちが作ったシステムだ。便利な事この上無い。
「もう少し位なら居ても良いですが早めに帰って下さいね？」

「あいよ。」

忠告は受け入れるべきだろう。今は無理でも後でまた来れば良い。
「では、私は『あれ』の後始末があるので。」

「お疲れ様。」

「ありがとうございます。」
そう言って天使はいなくなった。

さて、帰りますか！

天使がいなくなってからようやく気付いた。
……………どうやって帰るの？

3 4 眠り姫発寝(はっしん)?(前書き)

きつと今の私は勉強を頑張っています。
五日前の作者でございます。

…あれ?計算合ってるよね?

3 4 眠り姫発寢（はっしん）？

帰る方法が分からない、こうなった場合の行動は

A、がむしゃらに帰る方法の思索

B、天使が帰ってくるのを待つ

C、誰かに助けを求める

D、その他

Aは論外、検討も付かん。

Bはいつになるか分からない。

Cは他の誰かを見かけた事すらない。

Dはそんな素晴らしい機転があったらとっくに帰っている。

有力はBかな…？本でも読んでよ…。身内の運命を知る位罰も当たらないだろう。

とまああれから体感でおよそ一日が経った。

今だに助け（天使）は来ない…。夢の中の様なモノだから空腹にも眠くもならないが…。

そんなことより様々な情報が手に入った。

何よりも驚かされたのは、ルナが未来の王妃様だと言う事だった。

つまり現王子様と結婚する。うん、流石我が妹。あの美貌なら仕方ない。

他にもメル兄は魔法研究の権威（何でも魔法を制作、実用化を目指す仕事らしい）になったり、

アレス兄はやはり公爵家を継ぎ、国王の右腕として遺憾無くその才能を発揮していたり…。

うん、ばねえ…俺の兄妹マジばねえ…。

あれから更に二日

「また来てたんですか？」

天使が戻ってきた。

「違えよ…！帰り方が分からないからずっと居たんだよ…！」「怒りの声をぶつける。」

「えっ！？ずつとここに！？」

天使は驚きの声を挙げる。

「そつだよっ！丸三日ここに軟禁状態だったんだよっ…！」

「それは非常にマズイですね…」「何か深刻な問題のようだ。」

「何？何か問題があんの？」

「はい…。天界の流れる時間はおよそあの世界に比べ、5倍です。」

「つまり…？」

「三日×5およそ十五日が外の世界では経過しています。」「冷や汗が流れる。」

「それってマズイよな…？」

「だからマズイって言うてるじゃないですか！」

「魂がここにあるけどさ、あっちの体死んでないよな…？」

「それは大丈夫です。前来た時は魂でしたが、今いるのは意識だけなので。」

「良く分かんが死んでないなら良しっ！」

「良く分かんが分かった！次の質問！どうやって帰るの！？」
「急いで帰らないと事態は悪化するばかりだろう。」

「事実帰る方法という方法も無いんですよねえ…。」

「はあ！？じゃあどうすれば！？」

「とりあえず息を整え、意識を集中して下さい。そして向こうの世界を想像して下さい。」
「言われた通りに実行する。」
すると眠りに落ちる様に意識は静かに離れていった。
想像以上に簡単だったな…。

目を覚ますと五年間寝起きしているベッドの上だった。帰って来れた…。

3 5 眠り姫発寢（はっしん）？

目覚めると家族がいた。

起き上がると皆一様に両の目に涙を湛えていた。

「アティツ（ちゃん）！！」

両親からの熱い抱擁を受ける。ちょっと苦しい…。

「急に目覚め無くなって…。原因も分からず…！どうすれば良いのかと…！」

本当に心配してくれていたんだな…。

「ゴメンなさい…。お父様…。お母様…。」
心からの謝罪だ。

「でも本当に…！本当に無事に目覚めてくれて良かった…！」
心配も当然か…。五歳の娘が急に目覚めなくなるんだもん…。

「アティ…！」

「はいっ！」

急な呼びかけに反射的に返事をしてしまう。

呼びかけの主はアレス兄だった。

「俺は、俺は…原因不明で眠っているお前に何もしてやれなかった…！こんな不甲斐無い兄を許してくれっ…！」
振り下ろす様な勢いで頭を下げてくる。

「兄様…。でもきつと私が目を覚ませたのは兄様のおかげです。兄様が呼んでくれたからこそ私は目覚めたのです。」

天界に意識が軟禁状態だったから目覚め無かったのだが、まず信じて貰えないだろうし、こうでも言わないとこの人は自分自身を許さないだろう。

「うう…アティツ！アティツ！」

やばいな…。すごい罪悪感…。

「アティ…。おはよ…。」

少し間延びした様な声で話してくるのはメル兄だ。

「はい、少し眠り過ぎちゃいました。」

そんな事態では無いがちょっと冗談を飛ばしてみる。

「ふふつ、僕じゃあるまいし。」

普段通りの調子だが、頬にはしっかりと赤い涙の跡が残っている。

俺はこんな家族に心配を掛けさせるとは何と愚かなのだろうか。

そして…

「お姉様っ！」

ルナだった。

「お姉様が目を覚まさなくて、それで、それで、もうずっと目を覚まさ無いんじゃないかなんて考えて！それで、それで…！」

「ゴメンね…。ルナ…。心配掛けさせちゃったね…。」

泣き腫らした顔を見ると余計に胸が苦しくなる。こんなかわいらしい顔が涙やらでぐちゃぐちゃだ。俺は男として失格だな…。今は女だとかの屁理屈も出てこない。

「でも…、本当に良かった…！」

パツと花が咲く。

…俺はきつとこの笑顔を守る。心に誓った。この神力ちからもライブライブラリーという能力ちからもこの娘の為に奮あおう、そう誓った。

どうでもいい事だが俺を起こす為に国中から医師や魔法治療師、果てには祈禱士、呪術士まで駆け付け、ことごとく断念し、その末に公爵家の『眠り姫』として噂が広がったのはその後日の話である。

番外編 家族の心配（前書き）

クロノス（父親）目線で書いてみました。

番外編 家族の心配

いつもと変わらない朝だった。静寂を破る様に…

トントントンッ！

少し間隔の早いノックであった。

「どうぞ。」

「失礼しますっ。」

メイド長のミーシャだった。しかしいつに無く焦った様子だ。

「どうした？」

「はいっ！お嬢様が…！アティお嬢様が目を覚まさないんですっ！」
言っている意味が理解できなかった。

「それは…？それはどういう事だ？」

「はい…」

アティの部屋へ向かいつつミーシャから話を聞く。ついでにアティを毎朝起こしているメイドからも話を聞く。

朝アティを起こしに行ったメイドが言うには、いつもの様にアティを起こそうと部屋に入った、しかし呼びかけようと揺り動かそうと起きなかつたので慌ててミーシャを呼び、ミーシャが試しても駄目だったので、私を呼んだのだそうだ。

ふむ、子供たちに接する事が出来るのは私が本当に信頼する者のみ

としている。

となると私の目に狂いが無ければ、外的要因があるとすれば、身内では無い。

アテイの部屋に着いた。確かに眠っている。揺り動かすが結局整った寝息が聞こえるのみだ。

死んではない…。ただ眠っているだけだ。

まず根本的な原因は何だろうか？

病気？毒？呪い？はたまた別の何か？

不安が募る…。

分からない。このような場合は専門家を呼ぶべきなのだろうか？

「あなた？騒がしいけど何かあったの？」

妻のキュベアだった。

「ああ…。」

妻にも事の経緯を説明した。

「アテイちゃんが…。どうしましょう…。」

事の経緯を知り、狼狽する妻。

「原因が分からない、だから考えられる可能性全てを全て潰すしかない。」

「どうしてアテイちゃんがこんな事に…。」

妻の哀れなまでに狼狽する様子と原因不明のこの事態が私を酷く苦しめる。

斯くして国中からアテイを目覚めさせる事の出来そうな者呼び集めた。

しかしあらゆる手を尽くそうと無駄だった。

「お父様：？お姉様：大丈夫ですよね？」

ルナが不安そうに尋ねる。

「ああ…。きつと目を覚ますさ。大丈夫。」

不安なのは私だってそうだ。しかしこの子たちにそれを見せる訳にはいかない。

「メル兄様…。お姉様大丈夫かな？」

「きつと僕みたいに寝過ぎちゃってるだけだよ。」

ルナは本当に心配で仕方ないようだ。会う人、会う人に質問している。

今の私にはどうにも出来ない。そんな歯痒さが残るのみだった。

アテイが眠り始めて二週間。

アテイを起こす為に来訪した者が500人を越した。しかし誰もぴくりと動かす事もできなかった。

お伽話を信じてか既成事実を作ろうとも思っつか接吻を交わそうとする不届き者まで現れる始末だ。勿論ご丁重にお帰り頂いた。

巷では『眠り姫』との噂まで立っているそうだ。

こちらはそんな暢気な状態なんかではないというのに…。

十五日目

何の前触れも無くアティが目を覚ました。

不覚にも涙がこぼれる。

ギュッと抱きしめた。感觸を懐かしむ様に、愛情の深さを伝える様に、この小さな娘がどこかへ行つてしまわぬ様に…。

少し苦しそうだったがきつと私達の気持ちはこの娘に伝わっただろう。

4 1日々邁進

あの眠り姫事件からおよそ一年。

俺は六歳となった。

だからって何かが変わる訳でも無く。リアン先生の授業を受けている。

あの事件の後は大変だった。

時間にして十五日も眠っていた訳だから筋肉も衰え、体がめっちゃ怠かった。

そこに追い撃ちとしてリアン先生が

「寝ていた分です！」

と十五日分の課題を加減も無しに（物理的にも）叩き付けて来たのだから堪ったもんじゃない。その時の顔は泣きながら笑っていて、少し嬉しかった。

あと比較最近習い始めたマナーの勉強とかは本当に面倒だ。ある程度のマナーの良し悪しは日本とあまり変わらないが、流石の貴族社会、作法が細かい。

食事のマナーから始まり、挨拶、歩き方、座り方など様々な内容をそんなの誰が見てるんだよ、というところまでみっちり仕込まれている。

加えてこれらは女性のマナーだ。俺には元の世界で使う機会などほとんど無いだろう。つまりモチベーションが上がらない。

鬱だ…。意味の無い事を次々と教え込まれるのは…。

そして今習っているのはこの国の地理や歴史だ。これは俺にとっては結構重要だ。

政略結婚なんてさせられ様ものなら家出でも何でもしてやる！とい

う意志だ。どうせなら比較安全そうな場所に行きたい。あの父ならそんな事にはならないと思うが。いずれにしようと思つて損は無い。

「そしてこの時に中心となって建国に協力したのが今の公爵達の祖先。つまり貴女達のご先祖様という訳です。」

ここまでを簡潔に纏めるとまず魔王が現れ、魔王は魔物達を使役しここら一帯を襲い、それに対し人々は団結、魔王軍に抵抗した。そしてたら勇者様が登場。魔王を倒し平和を取り戻した。人々は再びこんな事が有つても即座に対応出来る様に国を建国、現在に至る。こんな流れだ。

「先生！では、国王様の祖先は勇者様なんですか？」
ルナは積極的に質問をする。マジ良い子。

「良い質問ですね。国王様の祖先は建国に協力した方々のリーダーなのです。」

「では勇者様はどうしたのですか？」

「そこなんです。勇者様は魔王を打ち破り、その後の行方は不明です。一説には光となって消えたという物までありますが詳しくは分かっていません。」

おそらくだがこの勇者は天界の討伐部隊の人で任務終了で天界に帰つたものと思われる。確かめる意味も無いが。

しかしそうなら確かに光となって消えたというのもあまり不思議ではない。

今度天界に行ったら聞いてみようか？

あの時から俺は自由に天界に出入り出来る様になった。

しかし精神的に疲れるし、心配も掛けたく無いので一週間に一回、

地球の日曜日当たる日に向こうでの一時間半のみ行く事にして
いる。神力の練習を重ねているが未だコツを掴め無い。もっと時間が
あればなあ…。

そんな空想をしていると話聞いていないと思われたのか本が頭の
上に降ってくる。

「ふぎやっ!」

耳が潰れる。

慣れないな…。この痛み…。

4 1日々邁進（後書き）

時間的余裕が出来たのでストックが切れるまではまた毎日更新をしたいと思います。

4 2日々邁進

「…こうしてこの国の交通路は整備されていきました。じゃ、今日はここまで！」

「ありがとうございます！」

授業も終わり、頭の中で今日の内容を整理する。

えーと…？確か？今住んでいるここの地域が獣人が主に住んでいる『ウイルディア』って場所で…？ここの他に様々な種族が暮らす地域が6つ有って？あれ？5つだったかな？

ああっ！もうっ！覚え切れんっ！！

詰め込み学習はむしろ効率が悪いんだぞ！？

「ルナ？今日の内容理解出来た？」

ここは出来の良い妹に助けを求めるとしよう。精神年齢21歳が6歳に助けを求めるとても情けない話だが。

「はい、今日はたくさん覚える事が有って大変でしたが何とか…。スゲー…。コレがエリートと凡人の差だろうか？」

「そう…。私はもう何が何だか…。」

「では確認も兼ねて復習しましょうか？」

「うん、お願い。」

こうしてルナ先生による特別講習が始まった。

歴史から始まり、この国の地理。

少なくとも言える事はこれはおおよそ小一が習う様な量では無いという事か。忘れんなよ！？ルナも俺も6歳でまだ小一位なんだぞ！？ルナ先生の助けを借りても苦戦を強いられる。

しかしリアン先生と違つのは優秀な解答をすると頭を撫でてくれる事だろうか？

「良くできました。」

なんて笑顔で撫でられると悶え死に級だ。我が妹はなでばスキルまで所有しているというのか…！

未恐ろしい娘だ…。

リアン先生だつて褒めてくれるし、叩くのもあくまで気付けの様な物だが、やっぱり可愛い妹に褒めて貰った方が嬉しい。リアン先生も結構美人だけどね？

そしてルナに教えて貰つて理解したのは、まず人々は魔王の脅威は無くなった後に、このソリド王国を建国した。

その際に中心人物の子孫が今もこの国の中心となっている。人々は団結したが各種族での領地問題が発生。されど国がバラバラになればそれ以上に危険という事で国を7つに等分した。事実今でも魔王の手先とされる魔物がいるそうだ。結果そのうちの1つが俺やルナの住むこの土地『ウィルディア』らしい。

獣人の他にも種族は魚人、エルフ等の亜人、鳥人、竜人、リアン先生みみたいな普通の人間、そしていずれにも分類されない者達、魔人がいるそうだ。

ホントにファンタジーな種族達だな…。今は人の事言えないが。そして国の中心には、いずれの種族にもこだわらない王都があるそうだ。

やっと整理が着いた…。無理、これは一人じゃ覚え切れない…。ルナお前普通にスゴイよ…。何でコレを一発で覚えられんの？

疲れ切つてぐてーとなっている俺を見て

「お姉様大丈夫ですか？」

「あーうん、平気平気。」

本当は多少辛いけど

「お疲れ様でした。」

ルナがそう言つて労いとして頭を撫でてくれようとした瞬間。

ドガンッ！！

小規模だろうが到底日常的には聞かないだろう爆発音が聞こえてきた。

4 3日々邁進

「何の音でしょうか…?」

ルナが不安そうに尋ねる。

「中庭の方かな?見に行ってみる?」

何の音だろうか?気になる…。

「ええっ!?危なくないですか?」

「大丈夫だつて!…多分。」

まあ非日常な何かが起こっているのは確かだろうが。何となく犯人の目星も付くんだけどさ…。

「でも…。」

「じゃあ私一人で行っちゃうよ?」

ちよつと意地悪を試してみる。

「あつ、待って下さい!私も行きますよっ!」

慌てるルナもまたかわいいな。

そんな事を考えつつ中庭へと向かう。

所変わり中庭

そこには小さなクレーターが出来ていた。

一体何があったかというのだろうか?とりあえずその答えを知っていいような人物に話し掛ける。

「これは何があったのでしょうか?メル兄様?」

その場にはへたり込んでいるメル兄がいた。

「あ、アティにルナ。いやー…ちょっと魔法に失敗しちゃってさ…。」
「恥ずかしそうに頭を掻くメル兄。
そこに又ツと現れる人影。」

「そうですね。詳しく事情を伺いましょうか？メルキウス君？」
そこにいたのは犬耳に茶髪の優男。まだ俺やルナは習っていないが
確か魔法の…

「あ、どうもアルマ先生。」
「あ、どうもメル兄。」

「どうもじゃありません。私は言いましたよね？一人で魔法を使う
な、と。あ・れ・ほ・ど言いましたよねえっ!？」

「あつれ〜？そうでしたっけ〜？」
あ、この人完全に聞いて聞かぬフリしてるな…。

「どちらにしようとお話を聞かせて頂ければ分かりますね？正・直・
に言えば尋もんもといお話も短くなりますよ？」
力の入った笑顔でメル兄に笑い掛ける。それと同時に

メルキウスはにげだした！

「ふう…『拘束くバインド』」

しかしにげきれない!!

何かが足に絡まった様にメル兄が派手に転ぶ。

「さて、これはクロノス様も交えての三者面談ですかね？」
「嫌だーっ!っ!」

メル兄の悲痛な叫びが夕空にこだまする。

「遅れましたがお嬢様方？お怪我はございませんか？」
「い、いえ！私達は爆発音を聞いて此処に来たので！」

「ならよかった。では行きますよ？メルキウス君？」
笑顔でメル兄を引きずっていく。

そして俺は一つの疑問を覚える。バインド（bind）？完全に英語じゃね？おそらくあれが魔法なのは間違いないだろう。そんな事で魔法という物への興味が膨れ上がっていった。そんな夕刻の頃だった。

「やっぱりメル兄様でしたね…。」

「ルナは感じてたの？」

まあ俺も薄々そう思っていたけど。

「だって私達の近辺で起こる問題の原因の七割はメル兄様じゃありません？」

「フフツ、その点は同意です。」

ルナの妙にリアルな確率に微笑みを漏らす。

悪しからずメル兄。

4 4日々邁進

「お父様。私、魔法を覚えたいです。」

俺がそんな要望をしたのは、メル兄がこつてり絞られぐつたりしている夕食後のティータイムの時だった。

「アティツ！？何だつてこんな日にそんな話を！？」

アレス兄が驚きの声を上げる。

自分でもおかしいと思う。しかし俺の好奇心は常識なんかでは止められない程に高まっていた。

父は一瞬考えを巡らせ、

「まず、お前は今日の夕方向を見た？」

声は否定の色より試しているといった風だ。

「中庭に空いた穴です。」

「それはいかにして出来た物か分かるか？」

「魔法…です…。」

質問の返答をミスれば魔法を習うのをやめさせられるだろうな…。そんなの嫌だ。

「そうだ。あれはメルが作ったオリジナル魔法の失敗の結果だそう
だ。」

「名付けて『圧縮爆弾くプレッシャーボム』だよ。」
ぐつたりしていたメル兄が急に復活した。

「空気を読みなさい。」

母からの鋭い一言。

「はい…。」

結局ぐつたりした…。

「あれで失敗ですか…。」

「そうだ。魔法には十二分に人を殺める可能性がある。今日のだって怪我人こそ出なかつたが、最悪死人が出る可能性すらあつた。それでも習いたいか？」

父からの厳しい発言。

「わ、私は…」

言葉に詰まる。

「私は、そんな強大な力だからこそ操り、制御していきたいと思います。」

苦しいか…？

「本当に制御出来ると思うか？」

返答に困る…。

「出来るかは…分かりません…。しかし…。」

「しかし？」

「やらなければ何も始まりません！何もできません！」

「では習う事を許そう。」

「えっ？」

「ここで自分なら大丈夫みたいな特別意識を持っているようならまだ早いと考えたが。それとも習いたく無いのか？」

「い、いえっ！」

あ、あっさり許可されたな…。

「魔法というのは常に危険が付き纏う。それを忘れない様にな。そして…ルナはどうする？」

「えっ？私ですか？…私もお姉様が習うなら習いたい…です。急に話を振られ戸惑ったがルナも習うたいようだ。」

「よし、じゃあ明日二人でアルマ先生に挨拶に行きなさい。」

「はいつ！」

この時の俺はまるで本当の子供の様に浮かれていた。

アテイ達の去った後

「良いんですか？お父様？」

「何がだ？」

「アテイ達の事ですよ！いくら何でも魔法を習うには早過ぎますっ
！」

アレスは本当にアテイ達が心配なようだ。

「大丈夫だ。きつとな…。それに自ら習いたいというのだ。その意
気買いだと思わないか？」

「お父様がそう…。言うなら…。」
不承不承といった様子の了解だった。

「それに私の信頼するアルマが教えるんだ。万に一つも問題は無い。

「
あの男の魔法への意欲と実力は誰にも負けない。私の安心は何より
そこから来る。」

「そうですね…。」

こいつはこんなシスコンで大丈夫か？

大丈夫じゃない問題だ。

そこにはシスコンを心配する親バカがいた。

4 5日々邁進

その夜は慣習となっている天界へ行く日だった。

『G O T O H E A V E N 』

意識が揺らぎ気付くと天界にいる。もうこの感覚には慣れた。タイマーを想像する。するとタイマーが出る。ここでは想像すれば基本何でも出てくる。ホントに便利で都合な世界だ…。

「90分つと、」

あまり居すぎるとまた問題になる。

もう見慣れた純白の翼を背負った天使が現れる。

「えーと、こんばんは…？ですか？」

「ああ、そうだな」

「今日は何です？修業ですか？それとも『生きとし生ける者の大図
ライブラリー
書館』でも使いますか？」

「いつも通り修業だよ。付き合ってくれる？」

「はい、私も今は大丈夫ですね。」

「おう、ありがとな。」

こうして今日も修業（？）が始まる。

具体的な方法が有るわけでも無く、ただ天使の抽象的なアドバイスの元に神力を使えるようになるうみたいなそんなもんだ。

「ほら、もっとこう…何かを絞り出すように！とにかく頑張っ下

さい！」

「何かって何だよ!？」

語弊があった。この天使説明が抽象的ってより表現が曖昧過ぎて教えるという行為が下手過ぎる。

とりあえず神力という物を何とか出そうとするが…。あんな説明で分かる筈も無い。

「ほらあれです、あれ!どがーんみたいな!」

「指示語と効果音で説明すんな!何一つ分からん!」

師事する相手を間違えたか?いや間違っているんだろう。

ピピピ……!

「やべっ!時間だ!」

「浮影さんもつと頑張らなきゃ駄目ですよ?」

「あーそうだな…」

結局今日も進展無し…。

神力を使い切る為の人生だと言うのに未だにかけらも使えていない…。

「じゃ、今日はここまでだな。また来週頼む。」

「どうして浮影さんは神力を扱えないんでしょうねえ…。」

とりあえず才能とかもあるかも知れないがあんたの指導も原因だろうなと密かに思う。

そして意識を失う様に俺は天界から去った。

そして気付くといつものベッドだった。

トントーン!

「失礼します。」
メイドさんが入ってくる。名前は確かマイカさん。そして作業的に俺の朝の身支度を済ませてくれる。いつもいつもお世話になっております。

そしてドレスに着替え、食堂に向かう。最近女物の服に慣れてきた自分が怖い…。

「おはようございます。」
毎朝通り両親とアレス兄が先に来ている。メル兄は…まあ良いとして、ルナと俺がいつもどっちが先かという所だ。今日は俺の方が先に着いた。

食事が並べられる。モーニングセットの様な物でなく、朝から結構重い…。

毎朝通り何とか食べ切り、ティータイムに入る。

「アテイ？ルナ？」

「はい？」

「お茶が終わつたら一緒にアルマの元に行くぞ。」

一瞬思考が止まる。

「はいっ！」

ルナの元気な返事が聞こえる。

「ん？アテイ？どうした？」

「いえっ！何でもありません！分かりました。」

どうしよう…魔法を習える事に舞い上がって完全に忘れていた…。

こんな事なら昨日の時点でライブライブラリーでアルマ先生の事を調べておくんだっ…。

後悔先に立たず。憂鬱な時間は迫るのみだった。

5 1 魔法学の指針

鬱な時間が迫っていた。何が嫌かって魔法が習えるのはこの上無く嬉しい事なのだが問題はアルマ先生だ。

メル兄はリアン先生の手にも負えなかった。しかしそんなメル兄を片手間に抑え込むのが彼なのだ。

俺にとっちゃリアン先生だって十分脅威なのだ。そしてアルマ先生は彼女を遥かに上回る。

お屋敷で温室栽培の俺が言うのもあれだが、野生の勘が伝える。彼はヤバい。大事な事なので二度言おう。

彼はヤバい。

「お姉様大丈夫ですか？顔色がよろしく無いですよ？」
ルナが心配してくる。

「えっ！？あっ！？大丈夫！！問題ありません！」

口にしてから後悔した。

こんな鬱なら仮病でも使って今を切り抜け、ライブライブラリーで下準備万端にしてくれば良かったのに…。

しかし彼無くして魔法を習う手段は恐らく俺にはない。これは問題の先延ばしでしか無い。受け入れるしか無いのだ。

「おい？アルマー？居るか？」

ある部屋の前で止まる。こっちの棟にはあまり来た事が無い。もちろん彼の部屋にも初めて来る。

あー…どうしよう…。頭痛と腹痛と動悸が同時に来ている気分だ。とゆーか実際に来てんのか？

ガチャッ！

「はい、何でしょうか？クロノス様。」

「うっ…部屋に居たよ…。」

「居なきゃ困るけどさ…。」

「アルマ、娘達にも魔法を覚えてくれないか？」

「ちらつと俺達に視線を向ける。」

「お嬢様方にですか？失礼ですがまだお早いのでは？」

「アレスにも言われたよ。しかし娘達の意気は無駄にたく無いからな。」

「は、はあ…。」

困った様子で考え込むアルマ先生。

俺の中でも習いたい意志と先生への恐れが葛藤している。

「とりあえず立ち話も難ですし、こちらへ。」

アルマ先生が部屋に招き入れる。

ニコニコしているが俺には悪魔のにやけ面にしか見えない。

彼を悪魔と例えるならあの扉は差し詰め地獄の門だろうか？閻魔の審判も無しに俺はただ地獄に招き入れられるのみだった。

先程は地獄と形容したが中は意外と整然としていた。魔法使いの部屋というのは魔導書や大窯なんかがあつて足の踏み場も無いというイメージがあつたのだが。

アルマ先生にソファアに座るよう促される。

「ではまず自己紹介でもしましょうか？何度か見掛けたかも知れないし、昨日も会ったけど僕は、アルマ・ドマティ・ジーナスと申します。どうかよろしく。」

此処は自己紹介して、いくらでも話のきっかけを作ろう…。

「私はアティーニヤ・ラグラン・トピアーズです。」

良かった…嘸まずに名前を言い切れた…。フルネームがホントに長い…。

「その妹のルナシア・ラグラン・トピアーズです。」

「しっかりしてますね。聡明なのは聞いていましたが。」

「当たり前だ。私の娘だからな。」

此処でも親バカは健在だ。こつちとしてはスゴイ恥ずかしい。

「さて、自己紹介も終わりましたし、本題に入りましょうか？」
面と向かって話すのか…。何か気が重い…。

5 1 魔法学の指針（後書き）

初めてアティとルナのフルネームが出せたという…。

作者の中では

名前・地位・家名という風にして名前を付けております。

5 2 魔法学の指針

「まず、どうして魔法を習いたいんでしょうか？」

「うっ…、いきなりストレートな質問…。」

「こういうのが一番困る。」

「昨日の兄を見て強大な力を制御したいと思って。」

「私もお姉様に同じく。」

「ちよっ！？ルナずるくないか！？」

「ふーむ…。魔法という物に恐怖は覚ええないのですか？昨日の事だつて危うく死人が出た可能性すらあります。」

「ごもつともです…。」

「覚え無くは…無いです。しかしそれ以上に魔法を習いたい、使いこなしたいんです。」

自分で言っておきながら何とも我が儘で支離滅裂な理由に思える。

「私もお姉様に同じく。」

ルナ…。お前ホントに考えてるよな？

「そうですね。クロノス様には…。聞くまでもありませんね。」

「当然だ。」

「はあ…。勝手に魔法を使用して万が一があつたらいけませんしね…。良いでしょう。魔法を教えてあげます。」

「「やった！！」」

「よし！これで魔法を習える！」

「た・だ・し！」

「「え…？」」

「ここで何かあるというのか…？」

「万が一があるといけないので必ず僕の目の届く範囲で魔法を使う事！」

「「はいっ！」」

「良かった…。そんな条件か…。」

「メルキウス君はこれを守ってくれないから困ります。」

メル兄を想像し、苦笑いが浮かぶ。

「では娘達を頼むぞ？」

「了解致しました。」

父が部屋から出ていく。

「そうだ。くれぐれも娘達には手を出すなよ？」

「出しませんよ…。武王を敵に回したくありませんしね。」

「武王…。そう言われるのも懐かしいな。とにかく手を出すなよ？絶対に手を出すなよ？」

さりげなく今何かスゴイ二つ名みたいな無かったか？

「クロノス様は手を出して欲しいんですか？出して欲しく無いんですか？」

うん…もつともな感想だ。

「まあ、とにかくお前を信頼してるよ。」

「お褒めにあずかり光栄です。」

ガチャッ！

父が出ていく。

「さて、最初は…メルキウス君の授業でも見学してみますか？」

ここで断る意味も無いだろう。

「はい。」

メル兄の授業か…。面白そうには面白そうだが授業として成り立つのだろうか？

「授業は午後からです。時間になったら中庭に来て下さい。」

「分かりました。」

「失礼しました。」

そう言っただけ俺らはアルマ先生の部屋を後にした。

部屋を後にし、小さくガツポーズ。何とか終わった。とりあえず先生もおとなしくしてれば多分怖くないし、異世界の醍醐味、魔法を存分に味わうとしよう。

俺の中ではあれやこれやと言った期待が膨らんでいった。

5 3 魔法学の指針

昼食も終え中庭に向かう途中、

「あつ、メル兄様！」

いち早く気づいたのはルナだった。

「アテイにルナ？どうしたの？こんなところで？」

「今日は兄様の授業参観です。」

「え？恥ずかしいな。ちょっと本気出しちゃおうかな。」

「期待してますよ？兄様。」

そうこうしている内に中庭に着いた。

「今日は遅刻しませんでしたね？メルキウス君？」

「今日は可愛い妹達も見てますからね。」

アルマ先生は俺達をメル兄の起爆剤としても使うようだ。

「そうですね。では今日はお嬢様方も来てますのでちょっとしたゲームをしましょうか。」

「面白そうですね。」

「ここに5枚の円盤があります。これを『浮遊』^{フロート}で浮かしますので、これを全て魔法で割って下さい。」

ここで確信した。魔法に使う言葉は英語だと。これは俺にとって大きなアドバンテージだ。

言葉自体に意味があればだが、意味も無く必殺技の名前を言う感覚だったら本当に意味が無い。

「分かりましたけど。ハンデはどうします？」

流石にメル兄も厳しいのだろうか？

「いいませんが、私も本気でやりますよ？」

…え？まさかハンデって先生　メル兄じゃなくメル兄　先生？

「分かりました。こちらもカツコイイ兄を見せたいんで本気で行かせてもらいます。」

いつもノホホンとしたメル兄だが凄まじい気迫というのだろうか？
が感じられる。

「『浮遊』^{フロート}。」

円盤が浮かび上がる。

「あつ、ハンデ無くて良いと言いましたがお嬢様方の事も考えて下さいね？」

「当然ですよ。」

ヒュンヒュンと円盤が空中を飛び交う。結構な速度だ。どんな魔法があるか分からないがこんなのに当てられるのだろうか？

「よし、では…始め！」

その言葉と同時にメル兄が魔法を使用した。

「『^{プラスチック}突風弾丸』」

パンツ！

すげっ！？早くもあれの一つに当てた！？

「…参りました。」

苦々しい顔でアルマ先生が降参する。

そしてしたり顔のメル兄。

「……え？」

そして5枚の穴の空いた円盤。全く視認できなかった。

そう。一発に聞こえたがあの時完全に同時に5枚の円盤に当てていたのだ。追記すれば全てど真ん中に当てていた。

「ちよつとつまらなかつたかな？」

これが二十を知って十を知らない天才の実力だった。

「久しく君の本気を見ていませんでしたが…、まさか此処までとは…。」

「どんなもんです？」

「凄いですっ！お兄様！」

興奮した様子でルナが走って行く。

「ありがと。次は何します？アルマ先生？」

「予想以上にあっさり終わってしまったからね…。もう少し時間が掛かって改良点を題材に授業を進めようと思っていたのですが…。」

流石メル兄…。授業を空気を読まずぶち壊しやがった…。授業をする（リアン先生含め）先生方の気苦労が伺える。

そしてメル兄の実力は恐らく既に先生をも超えているのだろう。典型的な見ただけで分かる様な天才だ。

例えばバスケットについてボールをゴールに入れる位しかルールを知らなくてもプロを見て凄いと思える、そんな感覚だ。

そんなこんなでメル兄の予想を超える結果が原因で授業は何かグダグダで終わった。

「アティーニヤさん、ルナシアさん。明日から週3回で僕の部屋に来て下さい。」

「え？中庭じゃないんですか？」

こっちはさつさと魔法を使いたいんだよ…。

「貴女はいきなり魔法を使えるんですか？最初は当然基礎からです。」

英語は分かっているから抜けてたがそういえばそれもそうだよな…。

「はあ…、最近の子供は基礎を軽んじるから困る。」

あの天才兄貴を思い出し苦笑いがこぼれる。

5 4 魔法学の指針

次の日

朝食も終え、ルナとともにアルマ先生の部屋へと向かう。

トントン！

「どつぞ。」

「失礼します。」

「ようこそアティーニヤさん、ルナシアさん。」

「今日はよろしくお願い致します。」

「いえ、こちらこそ。」

今日は初の魔法の授業だ。緊張と興奮に胸が高鳴る。

つつてもまずは座学だからまだ実際に魔法を使える訳でも無い。あまりやる気は上がらないがやはり未知の内容だ。一字一句足りとも聞き逃す事は出来ないだろう。

「まず、魔法とは何だと思えますか？じゃあルナシアさん。」
いきなりの質問だ。

「えーと？不思議な力？」
何とも可愛らしい返答だ。しかし俺もそんなくらいにしか理解していない。

「まあ最初はそんな物でしょう。魔法とは厳密には魔力という物を介し、世界に改変を起こさせる物です。少し難しいでしょうか？」
魔力ね…。結構有りがちな感じかな？ここで一つどんな魔法がある

かを確かめるとしよう。

「先生！世界の改変とは具体的にどのような事があるのでしょうか？」

「良い質問ですね。例えば昨日の様に物を浮かせる魔法、風の弾丸を飛ばす魔法。世界では様々な魔法が今も考えられ続けています。」

…ん？

「考えられている？」

「そうです。魔法とは想像の力、似た魔法を使おうとも十人十色、使い手により少しずつ違うんです。」

ふーん…。

「でもそれなら先生が教える意味が無いのでは？」

ストリートに疑問をぶつけてみる。だって先生の魔法だって俺やルナの魔法と微妙に違う筈なのだから。

「うっ…痛い所を突きますね…。そうです、私が教えられるのは基本だけです。後は今のメルキウス君にやっている様に魔法開発の手伝いをする位です。」

魔法か…。俺の魔法はどんな物なのだろうか？きっと昨日見た様な魔法とも多少なりとも違うんだろうな。有りがちな話で言えば属性なんてのもあるんだろうか？特に昨日のメル兄の魔法なんて風属性っぽい。

「だから私の授業の指針は貴女達の想像力の強化とイメージの固定化のお手伝いです。後は事故を起こさない様に監視ですかね。」

想像力か…。妄想力なら多大にあるから応用出来れば良いのにな。そんな下らない事を考える。

「ま、貴女方はまだ魔法を使える段階にもたどり着いていないのでまずはそこから、いえそこまです。」

「はい！」

まず俺はスタートラインにも立っていない。

前世から勉強という物には苦手意識があるが、こんなワクワクするような内容なら大歓迎だ。

どのくらい努力を積みめばメル兄に届くのだろうか？

それは果てしなく遠い道のりに思えた。しかし目標は大きい程良い。いつか追いついてみせる。そんな決意と共に頑張りたいと思う。

6 1 魔法への過信

遂に…遂にこの日が来た…。
半年、半年待った。そして7歳になった。7年待ったと言っても過言じゃない。

魔法実習キターー(。。(。ー！！！

テンションをつい上げすぎてしまった。しかし仕方も無いというモノだ。

アルマ先生に隠れて魔法を実行しようとした事23回、連行される事23回。

しかーしっ！今回は公認なのだ。行くぜ！天性（転生）チートという物を見せてやるぜ！！

意気込みとしてはそんな感じだ。

昨日はリアルに興奮で寝られなかった。正月は毎年寝正月の俺が、遠足の朝に爆睡して遅刻した俺が、こっちの世界じゃ眠り姫と呼ばれるこの俺が寝られ無かったのだ。この興奮は筆舌に尽くしがたいだろう。

「準備は良いですか？」

アルマ先生お呼びが掛かる。

「っはいつ！！」

やべえ！！ワクワクして仕方ない。

精神的にはもう22歳の立派な大人だがこの新しい物に対する高揚

感という物はいくつになっても良い物だ。

「まずは、復習をいくつかしましょう。」

ピシッと一瞬固まった。殴り掛かりそうにもなった。この人に殴り掛かったらどうなるか知れたもんじゃないからすぐに抑えるが。

魔法に関しては俺は本当に真面目だ。少なくとも今までの魔法の勉強に関しては完璧と言っても差し支えない。

「魔力という物はつまり一種の力であり。この力を世界に変えて貰う事により我々は魔法の使用を可能としています。そこで……」

長い……。飽きた……。先程述べた通り魔法に関しては完璧だけに復習とはとても怠い。

楽しみな事が後に控えているだけにこの時間がより長く感じる。

「……という事で今日は、無色魔法の実習を行いたいと思います。」

やっと終わった。説明時間30分。感覚としてはもっと長かった気もする。

ちなみに無色魔法というのは『浮遊』^{フロート}や『拘束』^{バインド}のような属性を持たない魔法の事だ。

「では杖を持って下さい。」

指揮棒の様な杖を持つ。

この杖は魔力媒体という役目をする物らしく人によって適する物が違うがこの様な杖は平均的な魔法の結果を残せるのだそうだ。

魔力媒体を介する事により、魔力が世界に伝わり易くなり、世界の改変と呼ばれる物がより大きな物となるのだそうだ。

「では僕の後に続いて目の前の箱に『浮遊』^{フロート}の魔法を掛けて見て下さい。」

来た。遂にこの時が。俺の魔法使いライフはきつと此処から始まる。箱が大気圏までぶっ飛ば無いよう気をつけないと。流石にそれは無いと思うが。

「『浮遊！』^{フロート}」

先生が魔法を使う。俺とルナもそれに続く。

「『『浮遊』！』」

体から何かが抜けて行く様な脱力感に近い物を感じる。これが魔力という物なのだろう。

先生の箱は勿論浮かび上がっている。

そして目の前に上がって来た箱は1つのみ。

それはルナのだった。

「…あれ？」

6 2 魔法への過信

端的に言えば魔法に失敗した。

大気圏まで飛ぶかも、そんな事を考えていたそんな事を考えていた自分が恥ずかしい…。

浮いてない。いや、正確には地面より3ミリ程浮かんでいる。いや3ミリって某猫型じゃあるまいし…。

「失敗…ですかね…。」

アルマ先生から眩きが漏れる。

「原因は何でしょうか…?」

理由があつての失敗ならまだ納得できる。その原因を克服すれば魔法を使える可能性がまだ有るからだ。

「そうですね…。考えられるとすれば…。」
顎に手を当てて考えている。

「まず、イメージの欠如。しっかり箱が浮かび上がるイメージをしましたか?」

「はい、多分。」

自信は無いが最低限にはイメージが固まっていたと思う。

「では世界に魔力をしっかりと与えましたか?」

「何かが抜けていく感覚はありましたか…。」

「はい、多分それです。」

与えるというよりは奪われるという気がするが…。まあそこは良いだろう。

「となると魔力媒体の相性が悪いか、申し上げづらいですが総魔力数が少ないか…。」

「そうですね…。」

「魔力媒体の適合は個人差がありますから。相性の良い物を探して行きましょう。」

「そうですね。」

非常にまずい事となった…。前者ならまだ良い。適合する物を探せば良いだけだ。

しかし後者ならどうか？魔法を一生使えない可能性すらあるし、前世は魔法の無い世界から来たという思い当たる節が無い訳でも無い。「今日の実習はこれで終わりです。もしこの後も続けたいなら私の眼下であれば認めます。」

「続けたいですっ！」

勿論即答だ。このまま魔法を使えませんでしたなんて冗談じゃない。これで終わってはとても満足出来ない。

「お姉様がやるなら私もやりたいです。」

ルナも付き合ってくれるようだ。

「これは私はしばらく帰れそうもありませんね…」

半分呆れた様子でアルマ先生が呟く。

「…フロート！フロート！フロートッ！」

もう何十回いや何百回唱えただろうか？しかし何回やっても浮かさない。

「フロートッ！げほっげほっ！」

むせた。声ももうガラガラだ。

「もう無駄です。魔力ももう切れてるでしょう。」

フルフルと無言で首を横に振る。

「無茶をして体を壊したら元も子もありません。今日はやめましよう。」

フルフルと首を横に振る。

「やめなさい。コレは命令です。」

「嫌ですっ！」

心からの叫びだった。

「ドクターストップです。貴女を意地でも止めます。」

先生は本気のようにだ。

俺は走り出した。先生は追って来ない。

涙が溢れる。

これがこの世界で初の挫折だった。

6 3 魔法への過信

ただひたすらに悔しかった。

涙が次から次へと溢れる。

バタンツ！

自分の部屋へ飛び込む。

扉の前で自分でも情けなくなる程に膝を抱え泣く。

此処まで自分の非才を嘆いた事は無い。

だんだん自分が泣いている理由が分からなくなってきた。

魔法が使え無かった事への悔しさ？

自分の才能の無さ？

はたまた魔法が使えたルナへの嫉妬と羨望の様な気さえした。

トントン。

どのくらい呆然としていただろうか？

その音にハツとなる。

「アテイちゃん…居る？」

母だった。

一瞬躊躇い。

「…はい、お母様。」

気付いいなかったがかなり声が掠れる。

「夕食食べないかしら？」

「…いりません。」

とてもそんな気分では無かった。

「ちよつと…昔の話をしましょうか。」

急激な話題転換にじっと黙って聴き入る。

「昔つて言つても三年前位の話なんだけどね、貴女が4歳の時になるわね。」

アレスちゃんも魔法が余り得意じゃなかったの。表には出していなかったけどあの子も焦ってた。」

アレス兄が…。

正直あの人は何でも出来る完璧超人というイメージがある。

「そんな時にメルちゃんが魔法を始めて、神童と呼べる程の実力を見せるからあの子も色んな気持ちがちやごちゃになっていたと思うの。でも私達はあの子の焦りに気付いてあげられなかった。」

そういえば思い出した…。三年前位にアレス兄が寝込んだ事があつたっけ…。あん時は理由とか知らなかったけどそんな事があつたんだ…。

「だけどね、あの子はその後あの子なりに努力したの。魔法はあまり使えないけどその分武術に打ち込んだ…。血の滲む様な努力を重ねた。今では国で十指に入る得る程にね…。」

凄いな…。アレス兄は…。アレス兄だけじゃない。メル兄もルナも皆凄いのには俺だけ…。

「ねえ、アテイちゃん。魔法は…楽しい？」

「……………！」

言葉が出なかった。

「あつ、これは魔法をやめるとかって意味じゃなくてね。」

「…楽しいと思います。」

自分の言葉に自信が持てなかった。

「なら良いのよ。貴女のやりたい事を続けなさい。そしていつか自分にしか出来ない事を見つけなさいな。」

自分にしか…出来ないこと…。

この言葉に自分の意思は固まった。

『GO TO HEAVEN』

「何か言つたかしら？」

自分にしか出来ないこと。俺にとってのそれはきつと神力の操作だ。

ならばそれを極めてやる。そんな強い決意とともに俺は天界へと向かった。

その頃

「アティちゃん？聞いてる？」

ガチャツ！

「フフツ。泣き疲れちゃったのね…。」
ベッドへと運ぶ。

「貴女には貴女しか出来ないことがきつとあるのよ…。だから頑張つてね。」

寝ているアティに微笑み掛け。

「お休み。」

そういつて部屋を後にした。

6 4 魔法への過信

俺は天界に向かいながら決意を固めた。

魔法にはもう頼らない、と。

魔力が無いのでは始まるもんも始まらない。

そして同時に俺の現人生の目標となっている神力を極めようと心に決めた。

きっとこれこそが俺にしか出来ないことだろう。

「浮影さん？今日はいつもと違う時間ですね？」

「…別に良いだろ？タイミング悪かったんなら明日来るけど。」

「いえ構いませんよ。今日は何をしにきたんです？」

「修行だよ。修行。ただ、今日こそ絶対完成させる。」
強い意志とともに放つ言葉。

「違うのは時間だけでは無いようですね。」

天使が何か悟ったのか真剣な口調で言う。

当然だ。今までののが遊びに思える程に今の俺の決意は強い。

「付き合いますしょうか？」

「いや、良いよ。」

正直コイツの曖昧なアドバイスは無い方がわかりやすいんじゃないか、最近そう思ってきた。

「そうですね…。」

何か残念そうにする天使。失礼な事を考えていたのも含め何かゴメン…。

修行に入って早一時間。残された時間は少ない。

今やってるのは瞑想。とにかくイメージの固定に力を注ぐ。
今までに無く集中する、このスツとした何とも言えない感覚。
明鏡止水の心とでも言うのだろうか？
今の状態がとても心地良い。

今なら出来る。そんな確信を持った瞬間。

バチバチッ！

俺の手の平から紫電が流れる。

「や、やった…！」

それはとても小さな物だったが俺にとって大きな一歩だった。

「やりましたね！浮影さん！」

天使が駆け寄って来る。

「ああ…。これが神力の力で間違い無いんだよな？」

これで違うとか言われたら俺の中の何かが壊れる気がする。

「はいっ！おめでとうございます！浮影さん！」

「良かった…。」

集中力も途切れ、ふっと意識が飛びそうになる。

「これで魔法が使えなくても何とかなるな…。」

「そういえば神力は魔力にも変換出来るんですよ？」

この天使は話を聞いていなかったのだろうか？

「だから俺は魔力が少なくて魔法が使えないんだって…。」

「私の見解では浮影さんの魔力の総量はそこまで少くないと思いますよ？」

「は？現に俺は初級魔法すら失敗して…るんだって…。」
意識が飛びそうになる。

というかもう限界…。

「なら…外…因…ると…すよ。」

俺の意識は天使の話を最後まで聞かず天界を去った。

見慣れた天井だ…。

天蓋付きベッドだから正確には天井では無いが。

そういえば俺ドアの前で天界に入ったよな？

きつと母が運んでくれたんだろう。

しかし天使が最後に言った言葉。

俺の原因は魔力ではない…？

だとしたら俺にもまだ魔法を使うチャンスがあるという事だ。

魔法…。もう少し頑張ってみるか…。

それよりも…。

「あーあー。」

昨日無茶し過ぎたな…。

声はかなりガラガラだった。

食堂にて

「お早うございます。」

「お早うアティちゃん。」

「お早うアティ。」

「お早う」

両親とアレス兄から返事が返って来る。

そして考え直し、決意の言葉。

「お父様、お母様。私、もう少し魔法を続けてみたいと思います。」
一瞬の沈黙。そして

「良く言った！！それでこそ我が娘だ！そうだ。一回の失敗位にへこたれるな！」

「私も同じ意見です。貴女がやりたい道を突き通しなさい。」

俺は両親の激励の言葉を胸に魔法へのリベンジを決めた。

6 4 魔法への過信（後書き）

主人公がやつと神力を獲得！

しかし現世で使えるのがいつになるかは作者も決めていなかったり
…。

6 5 魔法への過信

朝食後、俺は脇目も振らずにアルマ先生の部屋に向かった。

トントン！

「どうぞ？」

「失礼します。」

部屋に入る。相変わらず整頓された部屋だ。

「これは、アティーニャさん……。気持ちの整理はつきましたか？」

「はい、お蔭様で、昨日は迷惑をおかけしました。」

ペコリと頭を下げる。

まずは昨日の謝罪。先生からの制止の言葉を聞かずに逃げ出しちゃったし……。

「良いんですよ。気にしなくても。それよりも今後、魔法はどんなさるおつもりですか？」

昨日の事があったんだ、やめても仕方ない。ただ言いづらいたろうから先生からきっかけを作ってくれたんだろう。

しかし俺の意志は固まっている。

「魔法をやめる気はありません！ですので今後ともご指導、ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。」

今日の用件二つ目。魔法を続ける意志を見せる。

「！そうですか。良い心掛けです。では再び頑張りましょう。」

少し驚いた風だったがすぐに認めてくれた。

そして今日の三つ目の用件。

「話は変わりますが、魔力媒体とは杖以外にはどのような物があるのでしょうか？」

天使が言うには原因は少なくとも魔力量では無い。ならば魔力媒体とやらの線から潰すのが早いと考えた。

「魔力媒体ですか…。確かにその可能性も十分に有り得ますしね…。」
「考え込む。」

「まず代表的な物は昨日の様な杖ですね。これも厳密には長さや材質、また魔力的性質など様々な点で差が出るので杖一本を取っても多彩なんです。」

「適した魔力媒体を探すのが簡単かと思っただがこれは想像以上に困難かも知れない…。」

「でも先生も兄様も杖を持っていませんでしたよね？」

「杖以外の魔力媒体を使っているのだとしたら俺にもそれが適合するかも知れない。そんな希望を乗せ尋ねる。」

「はい、僕の魔力媒体は…。」
「服の中からペンダントを取り出す。」

「これに付いてる魔石と呼ばれる物です。」

「魔石…。見た目は宝石か何かの類のようだ。」

「魔石と相性が良かったのならこれを使えば私も魔法を使えるでしょうか？」

「これでは恐らく厳しいですかね…。」

「どうしてでしょうか？」

「僕はこの魔石を学生時代から使っていたものですから多分他人の魔力では動かないかと思われるので…。」

「良く分かんがとりあえず自分用って事か…。」

「基本他人の魔力媒体は使えないらしい。」

「なるほど…。メル兄様は何を魔力媒体としているのでしょうか？」

「メル兄は確か魔石らしき物も所持していませんでした。」

「メルキウス君は特別なんですよ。僕も分からないのですが魔力媒体がいらないのか、それとも常にある様な物を媒体としているのか…。本人も良く分かっているようですよ。」

「魔力媒体いらすか…。途中経過を飛ばして結果を残す辺りがメル兄らしい。」

それにしても魔力媒体が人によってかなり違うようだ…。

自分に合った物を見つけるのは大変そうだな…。

最初はこの世界でなら魔法を使おうと思えば使えると信じていたがまさかここまで困難な物とは想像していなかった。

いつになれば俺は魔法使いのスタートラインに立てるのだろうか？

そんな疑念がよぎる、そんな弱気になる自分を振り払い、また地道に頑張ろうと心に決めた。

7 1 王立中央学院

アルマ先生から魔力媒体についての特別講習を受けた日の夜。

この夜に突然の重大発表が成された。

それはおよそ二週間後にアレス兄が王立中央学院に入学するという物だった。

王立中央学院とは話を聞く所に寄ると、王都にある貴族の子女の多くが通うという名門の総合学校だそうだ。

また、この学院は全寮制で半年に一度の長期休暇しか基本帰って来れないそうだ。

重大なのはそこじゃない。

いや、アレス兄がどうでもいいとかという訳じゃなく。

「…私やルナも行くんですか？」

「そうだ。いずれお前達も通うんだ。見て来て損はないだろう。それに私もアレスに付いていくからな、私が居ない間にお前達に何か有ったらと考えると…。」

前半には納得出来なくも無いが後半はもう駄目だこの人という感想が浮かんだ。

冗談かも知れないがこの人は半分以上本気だろう。

「ルナは行くの？」

「はい、お姉様が行くなら。」

最近ルナは俺にべったりだ。

可愛いから良いんだけどさ。

「では行く事にします。」

「良かった。メルも行くから目を離さないでいてくれ。」

「…はい。」

とりあえず妹に面倒見られる兄ってどうなんだろう…。

それにしても…。この世界来てからこの家の敷地から出るなんて初めてじゃなかるうか？

中庭には実習とかで何度か出ているが外の世界を 肌で感じた事は無い。

故に一般市民の生活レベルも知らない。

俺にとつての狭い世界の中での生活はそれなりに幸せな物だがそれが市民の辛苦の上に成り立つ物だとしたら降り懸かる罪悪感はとても大きい。

まあ王都って言うくらいだから栄えているんだろうし、少なくとも屋敷の窓から見えるウィルディアの風景は平和そのものだ。

アレス兄は優秀だから心配は無いが半年も帰って来れないのか…。俺が今7歳、アレス兄が5つ上の12歳。つまり俺も恐らく5年後には向こうに行かなければならない。

5年か…。この間に何とかして魔法を使用に堪えうる物にしないと…。

この世界は魔法が当然の様な世界ならしいから魔法を使えない。圧倒的不利が成り立つのは明白だろう。まあアレス兄も得意ではないらしいが、それを補う武術があるから問題無いだろう。

後は不自然にならない様なら神力をこっちでも使えるようにしたい。前世で一子相伝の暗殺術の様な物は勿論習っていないし、こっちの世界でも武術は習っていない。

強いて言えば獣人という肉体の兼ね備える優れた身体能力が武器と成りうるかも知れない。が、やはり心許ない。

明日の朝には馬車で王都に向かって出発だそうだ。

ホント急な話である。

とりあえず今日はゆっくり休むとしようか。

7 2 王立中央学院

旅は始まる前がもつとも楽しいと誰が言っただろうか？

およそ6時間程になる。

馬車に揺られ揺られ段々お尻が痛くなってきた。馬車の旅を楽しみにしていた俺は何だったのだろうか……。

これでも高級馬車らしいが現代の車にはやはり遠く及ばない。

とりあえず馬車に乗ってるのは俺、ルナ、れんくもとい同行しぐつたりしたメル兄、入学を前に緊張した面持ちのアレス兄、父、護衛のおじさん一人。母は留守番らしい。

馬車は意外と広く、まだ二人は入りそうだ。

ぎゅぎゅより良いんだが。

そしてメル兄はともかくまだ馬車での移動が二、三日あるらしいのにアレス兄はこんな緊張してて大丈夫なのだろうか？

更に2時間

急に馬車が止まる。何事かと思っていると護衛のおじさんが剣を携え馬車を降りる。

そつと馬車の昇降口から外を覗くと

スライムAがあらわれた。

そんなテロップの流れそうないかにもファンタジーな存在がいた。

馬車の前に立ちただかるゲル状の不定形生物(?)。

魔物

以前リアン先生に習った話だと昔魔王が現れたのと同時に姿を現した謎の生物。人に危害を加え、魔王と共に人の領域を侵した存在。魔王亡き今もちよくちよく現れるのだそうだ。

どうして今も現れるかは分かっていない。一説には魔王がまだ生存

しているだとか、生態系の一部として組み込まれてしまったとか
様々な物がある。

群集ならまだしも一体だと…。

そんな解説をしている間におじさんが剣で叩き伏せる。

ゲル状の肉体（？）は残っているがぴくりとも動かないので恐らく
死んだのだろう。

一体では圧倒的に弱い。まあスライムがあまり強くても困るけどさ。
逆に一匹で小国程度なら滅ぼせるようなものもいるとか。

おじさんが乗り込み、馬車が再出発する。

「あの？」

「ん？なんでございましょうか？お嬢さん。」

微妙に慣れていない感じの敬語だった。

「あれは何だったのでしょうか？」

一瞬考え、あーあれかといった感じで答える。

「お嬢さん魔物を見るのは初めてかい？」

「話には聞いた事があるのですが…。」

「そうか、あれはスライムという魔物でね、まあもつともポピュラ
ーな魔物だよ。」

名前そのまんまだな…

竜のクエスト的な雫型じゃない分版權に問題は無いか…。

「大丈夫。あれ程度何匹来ても俺と後ろの馬車の奴らがいる限り心
配はいらないさ。」

後ろにも護衛の馬車が付いて来ており、結構な警戒体制だ。

国の重役でもある父を考えるとむしろ少ないかもしれないが。

とまあ何度かの魔物の襲撃と一度山賊も襲って来たが護衛がとにかく
強かったので全て事なきを得た。

そして目の前に広がる風景。

「うわぁ…！」

正に中世を絵に描いた様な町並み。

つい感嘆の声を挙げてしまう。

ウィルディアもそこそこ栄えていた、しかし王都は違った。現代日本にはなかなか無い様な暖かみのある活気。

そして一目で分かる自分とは違う人々。

鳞みたいなのが付いてる人もいれば翼の生えてる人、身長120センチ程のオツサン（恐らく小人かな？）。

ホント多種多様な人々だ。

出来る事なら自分の足で見て回りたい。

もっともそれも叶わず後ろに流れていく町並み。

少し残念になる。

こんな事なら一般人に生まれたかった…。

7 2 王立中央学院（後書き）

タイトルは学校なのにやっと王都に着いたとこという…。

7 3 王立中央学院

…何コレホグーツ？

遠くから見ている、

ああ、きつとこれが王城何だろうな。そう思っていた建物。

何とそれが王立中央学院だった。

後ほど話を聞くと昔は本当に王城だったが一部がたが来ており、新築するに当たって旧王城を学校として改築したのだそうだ。

でかいな…。

「お父様。これが王立中央学院なんですな。」

立ちほだかる巨大な門を見上げながら呟く様に言う。

「ああ、これが私とキュベア、リアンやアルマ、アティは面識無いだろうがディランもこの卒業生だ。」

昔を懐かしむ様に父が答える。

「さて、入ろうか。」

父が紙の様な物を取り出す。

「チエック
認証」

「クロノス・マスグラン・トピアーズ様。ヨウコソイラツシャイマシタ。オハイリクダサイ。」

目の前の門が独りでに開く。

きつと魔法なのだろう。時代背景は中世なのに随分現代的なセキユリティシステムだ。

入るとそこには一人の人がいた。

見た目若いし生徒だろうか？

「良く来てくれました。クロノス君。」

見た目父よりいくらか若いが同級生なのだろう。

「お久しぶりです。モーガン先生。今は校長をやってなさるそうで。」

「…聞き間違いだらうか？」

「…先生？」

「ああ、そうだ私の恩師、モーガン先生だ。」

「モーガン・ドレイト・トゥーリスと申します。以後お見知りおきを可愛いお嬢さん。」

「とりあえず自己紹介か。」

「…か校長若いな!？」

「アティーニヤ・ラグラン・トピアーゼです。以後お見知りおきをミスター。」

リアン先生に仕込まれた通りに優雅に礼をする。淑女としては完璧だ。男だけだ…。

「そちらもクロノス君のお子さんですか。」

「ルナシア・ラグラン・トピアーゼです。」

「メルキウス・ドグラン・トピアーゼです。」

「アレスト・ドグラン・トピアーゼです。」

皆一様に礼儀正しく自己紹介をする。こつこつ作法は完璧だ。

「君がアレスト君か。うん、たくましく聡明そうな子だね。」

「ありがとうございます。」

アレス兄はホント真面目だ。

そんな時突如

「先生はおいくつなんですか？」

そんな質問をしたのはメル兄だ。

「メルツ！いきなり何を!?!? すいません!先生!」

父が厳しく諭す。

「ハハッ、良いんですよ。良く聞かれますし。」

正直ストレートに聞く気にはならないが気になっていたので俺としてはメル兄はフラインプレーだと思う。初対面としては完全にアウトだが。

「私は今年で352歳…でしたかね？になります。」

とんでもない年齢だが異世界ならまあありかなと思う。

俺の感覚も大分狂って来た様に思える。

「先生は確か魔族の不死種でしたっけ？」

「そうです。まあ不死といっても他よりいっくらか生命力が強く、老いで死なないだけですけど。」

とりあえずそれを一般的に不死身と言うのではないかと思うが。

「では私とモーガン先生はお話があるからアレス達は学校の見学でもしてなさい。」

そう言い渡され、学校の見学をする事とした。

とりあえず見学して遭難なんて事にならない様に気をつけないと…。

この学校ならそんな話も実在しそうだ。

7 4 王立中央学院

まず向かったのは魔法科だった。今日は運よくか、計らってか実習らしい。

魔法科に向かうのはメル兄の強い要望である。

この人はホントに魔法にだけは人一倍熱心だ。

魔法の苦手なアレス兄は少し苦々しい顔をしている。

今日俺達が来る事は事前に行き届いていたらしい。魔法科の生徒はいくらか緊張していたが、平常を装っている。

見た感想は凄い。ただ凄いのだが、半年程前に見たアルマ先生とメル兄の実習には及ばない感じだ。

横をふと見るとメル兄が些か残念そうな顔をしていた。

「メル、今日は見学だから飛び入りなんかするなよ?」

アレス兄からメル兄に釘が刺される。

「そんな事しないよ」。この程度の相手つまらないし。」

自信満々というか退屈そうなメル兄。

メル兄の暴走を止めるとは言われたが正直この人が本気になったら全く止められないからおとなしくしてくれてる限りはそうして欲しい。

「良いよ。つまんないし次行こ?」

そういう事で次に向かう事とした。

話が聞こえていたのか魔法科の生徒は不満そうだった。

次に向かったのは武術科。

アレス兄は恐らくここに属するのだろう。

今の季節は地球での冬から春に掛けて。寒いと涼しいの合間位なのだが武術科だけは平均気温が2、3度高いと思う。

気合いが入ってるというか暑苦しい。

勿論爽やかな感じの生徒もいるのだが熱気を発する生徒の割合が高い。

後俺とルナに対する視線がうざい。

野郎達の集団で女を求める気持ちは分かるがその視線を俺達に向け
るな。このロリコン共。

まあそんな事を口には出さないがそういう視線を向ける奴には蔑み
の目を向けるとしよう。

続いて向かうは政治学科。メル兄が全力で逃げようとしたがそこは
アレス兄がしっかり捕獲。

文字通り引きずって向かった。

俺も正直乗り気じゃないけど…。

とりあえず見るだけ見てみよう。

見た感想としては凄い真面目で息の詰まる感じだった。

王立中央学院は平民も通う事が出来る。ここはあくまで将来有望な
国に有益人材を掘り出す原石の採掘場なのである。

様々な学科の中でも政治学科は貴族がほとんどを占めるエリート集
団なのだ。

ルナとかはここに通うのかな？そうして王子様と出会って結婚とい
う何ともベタな恋愛を見せてくれるのだろうか？

実際此処の学科は将来お偉いさんが多い為玉の輿を狙う女性達にも
人気が高いとか。

正直俺は興味が無い。

次に向かおうと思った時に、

「アレスト・ドグラン・トピアーズ様。校長室までおいで下さい。」

「お父様がお呼びのようだ。アティ達は適当に回っててくれ。くれ
ぐれもメルから目を離すなよ。」

「そんな事しないよ!？」

「任せて下さい。」

「アテイまで!?!?ひどいよ…。」

しっかし…。校内放送まで完備か…。

完全に科学の代わりに魔法で補っているって感じだな…。

この世界でも物は上から下に落ちるし光があれば影も出来る。きつ

とこの世界でも少なくとも物理学は通用するだろう。

どちらかと言えば科学という要素を魔法に頼り過ぎて見つけていな

いだけなのかも知れない。

そんな事を心の中でごちていた。

7 5 王立中央学院

アレス兄が校長室に向かい、俺達はどこに行こうか悩んでいた。メル兄は魔法科に興味があったがつまらなかつたらしいし。

俺は正直興味のある学科が無い。

ルナは俺が行く所に行く。

と言った感じに目的地を決めあぐねていた。

その内教室から生徒が出てくる。

時間的に昼休みなのだろうか？腹減ったな…。

生徒の一人が俺達に近付き、

「あの？公爵家の方々ですね？実は案内するように頼まれている所があります…。」

今更案内？明らかに遅いだろ…。

そんな愚痴を心の中でこぼしつつ、行く当ても無いのでついていく。

「さてと、ここら辺かな？」

そこは人気の無い建物の裏だった。

途中からおかしいなとは思ってはいたが、これは本格的におかしい。するとどこに隠れていたか10人程そろそろと出てくる。

「どういっつおつもりでしょうか？」

ルナが結構冷めた口調で言う。迫力あるな…。

「どうもこうもその奴の言葉に俺らの心はズタボロにされちまっ

たからなく？そんな口二度と利けない様にしてやろうと言う先輩からのありがたーい教育さ。」

メル兄を指しながらそんな事を言うモブキャラA。
うん、確か魔法科にこんな生徒が居た気がする。

そしてメル兄…。このハプニングはまたあんたが原因か…。

貴族というのは無駄にプライドが高くて困る。

こんな事ですぐに怒り出す。俺も貴族だけど…。

とりあえず問題を起こしては面倒なので、

「公爵家に逆らう事がどんな事か分かっているのですか？」

権力を振り回すのは好きじゃないがこの場合安全な解決策だと思う。

「あー分かてるさ、だが俺達だって馬鹿じゃない。」

こんな事してる時点で十二分に馬鹿だと思う。

「だから俺達はあんたに決闘を申し込む！」

「達つて貴方は複数で決闘を申し込むんですか？」

それはもう決闘とは言えないだろう。

「いや、アテイ。決闘に人数の制限は無いし、奴隷だって王子に決闘を申し込める。互いの了承の下に行われる闘いは全て決闘なんだ。」

「その通り。物分かりが良いじゃないか、公爵家の坊ちゃん。それに、了承しないとは言わせないぜ？あんた言ったよな？俺ら程度つまらない相手だって？」

たくつ、それなりに離れて話ししてたのに良く聞こえてるもんだ…。

「ふ〜…。受けるしか無いかな〜？その決闘。」

ちよ、何を言ってるんだ！？この人は！？

「ちよっ！？兄様！？」

「良く言った。まあ逃げてても公爵家の奴は決闘を申し込まれて逃げる様な腰抜けだって言い触らすだけだがな？」

コイツ最悪だ…。

あー…もう止める手段無いな…。

拝啓父様、アレス兄様。

メル兄様は私如きでは微塵も止められませんでした。無力な私をお許し下さい。

これが報告なのか遺言なのか俺にも判断がつかない。そんなこんなで決闘は始まった。

7 5 王立中央学院（後書き）

バトルシーン？

そんなの文才無いから書く気はありませんよ？

7 6 王立中央学院

「決闘のルールの確認ね？」

こんな時でも呑気そうなメル兄。

ルールはこの通りだ。

メル兄提案の下、

まず殺傷魔法の使用禁止。これは当然だ。死者は当然、怪我人が出てもまずい。

次に勝敗は行動不能になること。何の魔法を使っても良いが此処は

『拘束^{バインド}』ら辺が安定だろう。

「で、最後に負けた方が土下座ね？」

こつちの世界に土下座の習慣があつたのも驚きだったが、問題はさりげなくあくどいメル兄。

見事自分に有利なルールに仕立て上げている。

非殺傷魔法という事から勝負は単純な早撃ちになるだろう。

メル兄は魔力媒体が無い分細かい動作が要らない。それはこのルール上大きなアドバンテージだ。

相手も悪いから別に良いけど。

「じゃ、このコインが地面に落ちたらね？」

結果はほぼ目に見えている。

コインが空に舞う。

チャリンッ！

結果は予想通りだった。

目の前には圧巻のズラツと頭を地に付けている男達。
流石のメル兄だ。

簡単なダイジェストとしてはコイン落ちると同時にメル兄が『拘束』
を使用。もちろん速度で負ける筈もなく反撃を許さず、瞬殺。
雑魚といつては魚が可哀相なザコだった。

とは言つてもこれはメル兄からしての話である。ルナはまだしも俺なんて勝負にならないだろう。まず魔法使えないし…。

土下座している男達を尻目に俺達は校内に戻った。
するとタイミング良く呼び出しの放送が鳴り響いた。

「お前達はどこに行つてたんだ？」

入室と共に父からの問い掛け。これはどういった事だ…？

「え、えつと…？そ、それはどういう？」

メル兄動揺し過ぎ！この人嘘つくのは下手だな…。

「何度校内放送をかけたと思っっているんだ？」

あ…なるほど…。

ここですかさずメル兄。

「広くて迷つたんだよ。ねっ？アテイ、ルナ？」

ほぼ間違はなくメル兄が嘘を貫き通すのは無理だろう。ここは…。

「いえ、メル兄様が決闘を申し込まれ、それを受けた為校内におらず放送が聞こえませんでした。」

洗いざらい話そう。

犠牲はメル兄一人が良い。

「はい、魔法科を見学した際にメル兄様が挑発と取れる行動をとつたのが原因かと思われます。」

ルナも意図を察したか、全力でメル兄を売る態勢に入る。

「現場は見ていませんが俺もメルの挑発と思われる言動は聞きました。」

ここで更にアレス兄の追撃。

「ほお、メル。全てを話して貰おうか？」

やべっ！父様迫力ある〜。

「えっ？あの〜？弁明の余地は…？」

「「「無い。」」」

「デスヨネ〜。」

この日校長室から発せられた何者かの悲痛な叫びは、一部の者の手により学校七十七不思議に登録されたとかされていないとか。

7 6 王立中央学院（後書き）

前回でも書きましたがバトルシーンなんて作者には書けませぬ） - .

- : ;)

ご了承いただきたい…。

8 1 王城訪問と意気消沈

王都二日目

昨日からメル兄はみっちり絞られ、ぐったりとしている。

「今日は王城に行くぞ。」

王城という名のとおり王様がいるあそこだろうか？

俺は現代日本人なんだ。王様〓凄い偉い。その程度のイメージしかない。

無礼を働いてもいきなり打ち首とかは無いだろうと思うが可能な限り気をつけたいものだ。

今日はアレス兄は入寮手続きだとかで別行動だ。

メル兄は昨日の事で謹慎というかそれ以前に行動不能だ。

そして王城でも再びあの紙。

「チェック確認」

やはり勝手に門が開いていく。

ホント凄い。ファンタジーのくせに現代並のテクノロジーだ。

「お父様、その紙ってなんですか？」

やっぱりこの紙が何かあるんだろう。

「これか？これはギルドカードと呼ばれる物だよ。これ一枚で私が私である証明になる。」

ギルド…。そんな物までこの世界は完備なのか…。

というかギルドカードすげえ…。

魔法って実は科学より便利なんじゃなかるうか？

そんなこんなで今王城内。

とりあえず構造上仕方ないんだろうが王の間までの道のりが複雑で長い。

というか俺はついて来たは良いが何をすれば良いんだろうか？

「お父様…。」

「何だい？アティ。」

「私たちは何をすれば良いんでしょうか？」

「何もしなくても良いさ。今日は陛下への挨拶だから礼儀正しくしていれば大丈夫だ。」

…王様に会うのか。

ボクを出さない様にしないと…。俺だけならまだしも公爵家の恥に成り兼ねん…。

最近はずっと公爵家の令嬢という意識が付いてきた、世話になつてるのもそうだがそれ以上に家族だから。

最初はこの世界を神力を使い切る場所、その位にしか考えていなかった。しかし違った。

ここには感情のある人がいる。もしかしたら元の世界より余程人情味のある人達が。

そして元の世界の浮影俊喜も俺だが、この世界のアティーニヤも俺なんだ。

俺はここに存在している。だから俺は生き続けるんだと思う。

そして何でかこんな隙間時間に俺という意義を語ってしまったが俺はそんな隙間に収まる程薄っぺらい人間じゃない。…多分。

そうしている間に王の間。腹を括れ俺。大丈夫、今日は挨拶なんだ緊張する必要なんて無い。

はあ…、腹を括るところか痛くなってきた…。

「入れ。」

重く響く声。

「失礼します。」

多分俺の前で初めて見せるであろう仕事モードの父。

これから会う相手はそうという人だという事だ。

重く開く両開きの扉。

息を飲む様な空間がそこには広がっていた。

壁やあちこちに施された精密な彫刻。

両サイドに構える国の重役と思われる大臣方。

玉座に向かって伸びる赤絨毯。

失礼だが見た目は普通の人間（じゃないかも知れないが）のおじさんなのに明らかに纏う空気の違う玉座に君臨する王。

俺が居て良い場所じゃないと本能的には悟るが、ここで帰る訳にはいかないんだよな。

はあ…。

何とかなると良いけど…。

8 2 王城訪問と意気消沈

えっと…、とりあえず今どっかの部屋に通され休んでいます。別に王の間での挨拶は成功したよ？

むしろめっちゃ緊張している中あの長つたらしい名前を嚙まずに言えた事を褒めて欲しい。

しかしあんな大衆の前で元男が淑女の礼とかどんなプレイだ…。とにかく俺のSAN値がガンガン削られるひと時だったのは間違いない。

はあ…、早く帰りたい。結局まだ王城内だし、此処の独特の空気というのだろうか？何とも言えない格式的な重い雰囲気。これには慣れる事が出来ない。

ガチャ！

突如として部屋のドアが開く。

誰だろうかと振り向く。

そこに居たのは先程も見た顔だった。

「陛下!?」

俺とルナの驚きの声が重なる。

何で？挨拶は終わったはずなのに…。

「こうして対談を交わすのも久しぶりだな。クロノス。」

陛下の入室第一声。

「そうでございますね。陛下。」

「堅苦しいな。何だ？子供達の前だからか？子供達も緊張しているようだし普通に話そうじゃないか。」

何だ？父と陛下はかなり親しいのか？俺は二転三転する状況についていけずにいた。

「そうだな。久しぶりだな？アルベルト。」

親しい間柄なのは分かったが俺の混乱は解けない。とゆーか口調変わり過ぎ。

「あのお父様と陛下の関係って…?」

疑問を投げ掛けるルナ。

いち早く混乱から回復したようだ。そしてナイス質問!

「主従。」

「腐れ縁。」

上が父、下が陛下。

あの…、食い違ってるんですが?

「おいクロノス、子供の前なんだから息の合った所を見せる。」

「よし、もう一回やるぞ。しかし腐れ縁は無いだる腐れ縁は。」

腐れ縁とは確かにどういいう関係か気になる所だな。

「行くぞ? せーの…!」

陛下の合図で再挑戦。

「悪友。」

「親友。」

またも食い違う。まあさつきよりは近いのかな?

上が父、下が陛下。

「悪友とは何だ? こっちは親友とまで言ったというのに…。」

「お前が腐れ縁なんて言うからそういう方向性で歩みよったんだろ

うが。」

まあ仲が良いのは確かなのかな…?

その後何度か食い違いを見せ、八度目の挑戦。

「「好敵手^{ライバル}!!」」

やっとシンクロした。

したがしかしこれは…。

「やっと合ったな。すつきりした。」

「ああ、これでこの子達にも関係が伝わっただろう。」

まあ、本人達が満足なら良いか…。

この国大丈夫かな…?

この国の行く末に一抹の不安を抱くのであった。

8 3 王城訪問と意気消沈

「最近はお前が子供が待っているとか言っていてさっさと帰ってしまっ
てたからな。ホント寂しかったよ。」

そんな事を言うのは陛下。今は王の間で見せた威圧感などかけらも
見せず、ただ父の一人の友人であった。

「お前なんかより娘が大事に決まっているだろう。しかも二人、愛
情も2倍だ。」

ここでも子煩悩っぷりは顕在だ。死ねば良いのに。

「お前だから良しとするがそれは少なくとも一介の国王の俺に言う
言葉じゃないぞ?」

もつともだ。しかし今のこの人のフレンドリーな空気に当てられて
いるとそれを忘れそうになる。

「ならばお前はこの娘達以上に価値のある存在があると言うのか!
? 宝石の様な瞳、金や白金のごとき流れる髪、大輪の花とも言うべ
きこの笑顔。これに勝る物がこの世に存在すると言うのか!?」

父がだんだんヒートアップしてきた。褒められてるのに恥ずかしさ
で死にそうになる。

「ふむ、確かになかなか可愛らしいではないか。お前に似ず。」
…仲良いんですね?お二方。

「お前んとこの生意気にも同年代の王子はどうなんだ?ん?」
とりあえずこの国で一番偉いはずの人に向かっての口ではないと思
う…。

「なるほど、うちのアランに丁度良いかもな。」

「ほお?うちの娘を貰うからにはそれ相応の覚悟があるんだろうな
?」

いや覚悟ってなんだよ…。

「なんだ?いつそ二人とも貰ってやろうか?」

俺の方は勘弁願いたい。

「お前の息子は一人だろう。側室にでもするつもりなら本気で殴るぞ？」

だから国王に向かって殴るだの止めようぜ？

「いや、俺が貰おうkゲフツ」

…遂に殴りやがった。

「言つて良い事と悪い事がある。」

あんたもやつて良いことと悪い事を区別しようよ…。

「冗談だ、冗談。しかしあまりに過保護じゃないか？」

うんうん、同意。

「何馬鹿を言っているんだ？まだ足りないくらいだろ？」

…何馬鹿言つてんだろ、この人は。

「まあお前がそうならそれで良いんだがな…。そうだアティーニヤちゃん、ルナシアちゃん。」

唐突に話し掛けられビクツとなる。

「ちゃん付けで話し掛けるな。穢れる。」

本当に相手は国王だよな？

「ちよつとお前黙ってる。さてアティーニヤちゃん、ルナシアちゃん。うちのアランと結婚しないかい？」

ここでまさかの！？

いや！ここで即座のフォロー！

「ルナ（お姉様）が適任だと思います！！」「」

ルナも押し付けてきただと！？

どちらかと言えば謙遜かもしれないが。

しかし残念だったな。ルナ、結局お前が結婚するんだ。運命がそう物語っている。そして俺は結婚などしない！

「ははっ、随分仲が良いな。やはり二人とも貰おグハツ」

父の一撃。

「スマン。これ以上は手加減出来そうに無い。」

父の目が座っている。本当にこれ以上は危ないかもしれない。

早く逃げて！王様！

8 3 王城訪問と意気消沈（後書き）

最近暴走気味の作者でございます。

たまに暴走するのでその度に嘲笑と生暖かい目で見守って下さい。

8 4 王城訪問と意気消沈

「今日は久しぶりに話せて楽しかった。アレスト君に入学おめでとうと伝えてくれ。」

王様と言ってもプライベートだと割と普通のおじさんだった。

とは言っても直前に威厳ある姿を見ていた訳だから目の前にすると緊張したけど。

「ああ、伝えておくよ。じゃ、またな。」

「なあ、ホントどつちかで良いから嫁にくれよ。」

「まだ言つのか。何よりもこの娘達が望まないなら嫁にはやらん！マジお父様かけえ！！」

良かった…。国王を相手にしても断れるならもう安心して良いだろう。

「これはアランをお前に認められる男に育てないとな。」

「私は厳しいぞ？」

「ああ、お義父さまと呼ばれるためにもアランには頑張ってもらおうさ。」

やっぱりこの国もう駄目かな…。

そんな会話が15分前。

今の状況？

一人で王城内を歩いてるよ？

5分くらい前に父とルナを見失った。

はい、迷子です。本当にありが（ry。

やべえよ…。どうしよう。

精神的には二十代も半ばだったのに迷子って…。

こうゆうのって迷った場所から動かない方が良いんだっけ？

まったく…。こんな広い城なら迷子センターでも用意すべきなんじゃないか？

10分程経過

怖いくらいに人がいない。

ただ一人誰もいない場所で待つというのがここまで辛い物だとは…。二年程前には3日間軟禁があったがここまで辛い物ではなかった。しかし今はどうか？

不安で不安で仕方ない。

精神は体に引つ張られると言うしそれが原因だろうか？

更に10分経過

グスンツ…。泣きたい。というかもはや半ベソ。

ありえないがもう迎えが来ないんじゃないか？そんな錯覚に襲われる。

泣き出すとますます気弱になる。

どうしたら良いのか自分でも分からない。

やっぱり自分から探そうか？

いや、やっぱり待つべきだろうか？

そんな葛藤が沸き起こる。

更に更に10分経過

やっぱり幸せは歩いて見つけるもんだよね！！

状況は恐らく悪化したけどな！

もう最初にいた場所も分からない。この城はホントどんだけ広いんだよ…。子供の足には尚更広く感じる。

今だ人にも会わないし…。

ん、いや！目の前に人影！

しかしどうしよう…。今度は迷子で泣いていたという自分の今の状況が恥ずかしくて情けない。

いまだに涙は微量ながら流れている。

しかしここで話し掛けないと…。

人影はこちらに向かって来る。

どうしよう、自分の中であたふたしている間に

「お前こんな所でどうした？」

向こうから話し掛けてきた。

こうなったら恥も何もあるか！

「あのっ…、迷子になってしまっ…。」

そこで改めてその人影を見ると

「…貴方も迷子？」

そう思ってしまう程の年齢だった（と言っても今の俺と同じ年くらい）。

後どうでもいいけどイケメン。流石ファンタジー。

「そんな筈あるかつ！俺は…！」

「言わなくても良いよ。私も迷子だって告げるの恥ずかしかったから。」

同じ経験をした者としてこの少年の面子が保てるよう尽力しよう。

何よりも俺の方が前世含めたら年上なのだから。

こうして奇妙な迷子少女と迷子（？）少年の城探検がスタートした。

8 5 王城訪問と意気消沈

「お前は どうして あんな 場所に いたんだ？」

先程 出会った 少年 からの 質問。

「言った でしょ？ 迷子 なの。 お父様 と 妹 と 逸れた の。 貴方も 似た ような モノ でしょ？」

平然 と 答える。

しかし 孤独 じゃない と ころも 違う もんな だ。 今は もう 泣き たく なる 様な 事 も 無い。

「だー から！ 俺は 違う！ 俺は ない。」

少年 の 肩 に 手 を 当て

「大丈夫、そこから先は言わなくても察してるから。」

この 先 を 言っ て し まっ て は 少年 に も 面子 と い う 物 が 無い だろ う。

「… 本当 に お前 は 理解 し て いる の か？」

「貴方 の 面子 を 壊 す つ もり は 無い から 安心 し て。」

「まっ たく…。 何 を 安心 す れば 良い んだ？」

少年 は 半分 独り 言 の 様 に 呟 い て いた。

そ う い え ば さ つ き から 歩 き 回 っ て いる も の の 迷子 二 人 が 歩 き 回 っ た ところ で 状況 の 好 転 は 望 め ない の で は な か ろ う か？

「これは 何処 に 向か っ て 歩い て る の ですか？」

当ても 無く 歩 く の は 流石 に ます い。

「とりあえず 王城 から 出 る べき か と 思っ て な。」

なる ほど…。

っ て、 うん！？

「道 が 分 かる ん ですか！？ 迷子 なの に！」

「俺 は 何 回 迷子 を 否定 す れば 分 かって 貰 える んだ？」

否定 し て た っ け？

「アテイ！」

背後からの呼びかけに対し、振り返るとそこには見つかった事に対する安堵と見つからなかった事に対する焦りの入り混じった父がいた。

「お父様！」

とりあえず呼びかけに応える。

そして再び向き直り。

「ありがとうございます。おかげで父も見つかりました。」

とりあえず笑顔。淑女の嗜みとしてだが、今回は割と自然に出た気がする。

そして少年がいくらか間を置いて。

「あ、ああっ！良かったな。」

何故か動揺する少年。

「これはアラン王子！お久しぶりです。」

…今なんだった？

「お久しぶりです。トピアーズ公爵。」

父と普通のように話すこの少年は…。

「アラン…王子…？」

「ああ、知らなかったのか？」

…やばい。まさか王子なんかだと知らず知らずに無礼な態度をしていた気がする。というかしていた。

まず此処は素直に

「数々のご無礼お許し下さい！」

全力で頭を下げる。無いと思うけど暴君王子だったりしたら打ち首確定かな…。

浮影俊喜の次回の人生にご期待下さい。なんてゴメンだ。

「顔を上げる。」

いきなり態度が変わった…。死んだかな？これは…。怖ず怖ずと顔を上げる。

「ならば俺と結婚しよう。」

一瞬言葉の意味が分からなかった。

は…？何がどうしてこうなった…？

というか何が起こった？

告白された？

そしてこの国はこんなのはっかなのか？

余りに急な展開に頭がついていけなかった。

8 5 王城訪問と意気消沈（後書き）

どうでもいいですけど地デジ化しましたね。
皆様の家のテレビは大丈夫ですか？

8 6 王城訪問と意気消沈

状況整理という名の前回までのあらすじ！

迷子になった 少年と出会う 何とその少年は王子だった 王子からの求婚 現在。

少年が王子だったのは、まだ良いとしても次の段階が何度考えてもどう考えてもおかしい。

ひとまず現実に戻るとしよう。

「えっと、それは…どういう…？」

状況を整理したからといって困惑が解ける訳ではない。

「簡単に言えば俺と夫婦の契りを結ぼうという事だ。ん？余計難しかったか？」

とりあえず彼と俺に言葉の相違が無い事は分かったがそんなの全然嬉しく無い。

むしろ違ってた方が良かった。

「私たちがまだ10歳にもなっていませんよ？」

俺の笑顔はもはや引き攣っているだろう。

「愛の前には関係無い！どうか結婚をお許し下さい！お義父様！」

あつちからしたら何の事やらだろうが俺は男と愛を育める程守備範囲は広く無い。

第一俺がこの人と結婚したらルナはどうなる？

これは大きく運命を変え兼ねん。この求婚は何としても断る必要がある。

「アティはどうなんだ？」

「わ、私何かよりルナの方が良いと思います。」

ルナには運命めいの見えない不確定な未来より今見えてる幸せな運命を歩んで欲しい。

「お、俺の求婚を断るのか!？」

あ、でもやばい地雷踏んだかも。

「私は生涯結婚する気はありませんので。」

ここまで言つときゃ大丈夫かな？

「アテイ、それは本当なのか？初めて聞いたぞ？」

あー…、意思としては固まっていたけど誰にも言つてなかったしな…。

「はい、これが私の本心です。駄目ですか？」

正直に伝えよう。

「いや、アテイがそういうならそれで良いんだ。」

流石お父様、話が分かる。後はこの王子だが…。

「結婚したく無いというのなら俺がいつかその気持ちを変えさせて見せよう!」

黙っていた王子からの何故かの宣戦布告(?)

…何でフラれてからその切り返しになる。前向き過ぎるだろ…。アラン王子。

「嫌ですっ!」

「絶対に変えてみせるっ!」

このままでは平行線だ。

「ハハッ！若くて良い事だ！アラン王子、気に入ったぞ。アテイの気持ちを変える事が出来たのなら結婚を認めようじゃないか!」

何だとー！っ!？

「本当ですか!？」

「ああ！本当だとも！ただし、強引な手段に出るようならこの話は無かった物とさせてもらう。アテイの気持ちが最優先だからな。」

まあ、確固たる意思がある分俺有利だが、問題はそこからどうやってルナに意識を向けさせるかだな…。

…というかお父様…、信じてたのに…。

こうして俺の悩みの種を増加させ、この日の王城訪問は終わった。はあ…。見た目子供なのに最近ため息ばかり吐いてる気がする…。

8 6 王城訪問と意気消沈（後書き）

最近ストックが少なくなってきた…。

一話が短くても毎日更新が売りだったのに…。

まあ、やれるとここまで毎日更新しますけどね。

番外編 非運命的出会い（前書き）

結局大した量では無いですがいつもよりは長め。

番外編 非運命的出会い

俺は既に人生という物にいくらかの絶望を覚えていた。何ひとつ昨日と変わらぬ今日、変わる物は勉強の内容くらい。

この前弟も生まれ、代用もいる存在。

そんな変わらぬ日々今日ひとつ変わった事があった。

廊下に一人佇み泣いている同じ年程の少女。

別に見捨てても良かった。

しかしこの少女は自分の何かを変えてくれる。そんな有り得もしない淡い希望と共に話し掛けた。

「お前こんな所でどうした？」

「あのっ…、迷子になってしまっ…。」

迷子か…。初めて見る顔だ。白い虎の耳から獣人と思われる、そういえば今日トピアーズ公爵が来るとか言われた気がした。その娘だろうか？

「…貴方も迷子？」

想像以上に失礼な奴だった。

「そんな筈あるかっ！俺は…！」

ここで言葉を遮られる。

「言わなくても良いよ。私も迷子だって告げるの恥ずかしかったから。」

私もって完全に俺も含まれてるな…。

反論する気も失せる。

本当はここで見なかった事にだってできる。

しかし俺にはできなかった。公爵家の娘という可能性もさることながら、興味とはまた違うがそれに近い様な感情より少女から目を離せ無かった。

「お前は どうして あんな 場所に いたんだ？」

少女も 泣き止み、 落ち着いたのを見計らい 尋ねる。

「言ったでしょ？ 迷子だって。 お父様と妹と逸れたの。 貴方も似たようなモノでしょ？」

「いっそ開き直っている感すらある。」

そして俺の迷子認識は変わらないのか？

「だーからー！俺は違う！俺はな…。」

またしても遮られる。

肩に手が置かれ、少しドキツとする。

自分何をこうドキドキしているのだろう？

「大丈夫、そこから先は言わなくても察してるから。」

この少女は何を言っているんだ？

「…本当にお前は理解しているのか？」

甚だ疑問だ。

しかし、こうした礼儀や体面を無しとした会話等いつ以来だろうか？
自分の立場もあり、仕方ないかもしれないが話し掛けてくるのは上
辺だけのおべっか使いのみ。

後に思えばこういう所に惹かれたのかもしれない。

とりあえずこの少女の父親を探すのも兼ねて出口に向かっていった。

「これは何処に向かって歩いてるのですか？」

少女が尋ねる。

迷子だから当然とは言え、何も知らずついてきたのか…。

「とりあえず王城から出るべきかと思つてな。」

一瞬納得したようだったがすぐに

「道が分かるんですか！？迷子なのに！」

もう反論する気も失せた。

「俺は何回迷子を否定すれば分かって貰えるんだ？」

俺はもう呆れていた。

どうもこの少女と話しているとペースを崩される。

背後から

「アテイ！」

誰かを呼ぶ声が聞こえる。

少女が振り返る。

「お父様！」

今更になって互いに名前も知らなかった事に気づく。

なるほどアテイと言うのか、この少女は。

少女がこちらに向き直る。

「ありがとうございます。おかげで父も見つかりました。」

少女が微笑む。

不覚にも見とれてしまった。

「あ、ああっ！良かったな。」

そして同時に自分のこの少女に対する気持ちに気付いた。

俺はこの少女が好きなのだ。見捨てられなかったのではない。自ら惹かれていたのだ、この少女に。

この少女は直感通りに俺を変えてくれた。

自分の気持ちに気付き、世界の価値観が変わった。

この世界に絶望していたのが嘘みだった。

そして決めた、この国をこの少女、全ての国民にとって素晴らしい国にしよう。

俺の視界は大きく変わった。

9 1 入学式と一つの決心

王都滞在も早一週間と少し。

王城行ったり、そこで何故か告白受けたり、王都にあるトピアーズ家所有の屋敷でゆっくりしていたりとそんな一週間だった。

そして今日はアレス兄の入学式である。

そして明日からアレス兄はいない。今まで居るのが当然の様に思っていただけに実感が何となく湧かない。

とりあえずメル兄の事を考えると気苦労が増える事が予想される。

そして今は入学式の執り行われる講堂に来ている。もちろん来賓としてだ。

父は何か保護者代表挨拶の様な物の為どこか行ってしまった。

アレス兄はもちろん入学生だから此処にはいない。

そしてメル兄は寝ている。正直寝ていれば問題も引き起こさないの
で寝ていてくれた方が良く。ただ入学式の始まる前から既に寝ているのは想像以上の早さだった。

ルナはいつも通りな感じだ。

しかし、

「何故この様な場所にいるのでしょうか？殿下。」

そう、約一週間前に告白してきた王子が隣にいるのだ。

「何だ？我が妃の隣に居ては駄目なのか？」

「隣に居て悪いとは言いませんが、私は結婚する気はありません。

どうしても言うならこちらのルナをどうぞ？」

「私も殿下とは結婚したくありません。お姉様の方が適しているかと。」

姉妹揃って王子を押し付け合っている。

自分含めこの家族に尊びの心は無いのか？

多分母とアレス兄は常識人だと思うけど。

「何でも良いが俺、王子だよな？」

はい、ごもつともですがそれ以前に俺が男なのでございます。だから結婚する気など更々無いんです。

とそんな事をダイレクトに言えないので

「私より殿下にお似合いの方がきつといますよ。」

そしてルナの方をチラチラと見るが王子は気づかず、ルナも真意は分からないが知らぬ顔。

「そうです。私たちがたまたま殿下の事を嫌なだけで殿下を好いてくれる人だつてきつといますよ。」

俺の言うお似合いはお前なんだよ！ルナ！そしてお前のはフォローになつて無い！

最近ルナが俺にどういふ訳か敵対や嫌がるような人物に対しての風当たりがやたら強い様に思える。

うーん…、何かルナの期待を裏切る様な事でもすればいつか背後から刺されそうだな…。お姉ちゃん(?)心配。

そんなこんなでもうすぐ式が始まるという時間になり、

「殿下、そろそろ式が始まりますがこんな所に居て良いんですか？」

そろそろ王子が鬱陶しくなってきた。

「逆に何故居てはいけないのだ？」

「王子としての責務やいなければならぬ場所は無いのですか？」

「父上からこちらに居るように言われてな。」

くっ…、最大の黒幕は王様かよ…。

ある意味強大な敵の存在を認知した。

9 2入学式と一つの決心

「…新入生一同このソリド王国の未来を担う者としての自覚を持ち、勉学に励みたいと思います。新入生代表、アレスト・ドグラン・トピアーズ。」

パチパチパチパチ。

会場が拍手に包まれる。

流石根っからの優等生タイプ、代表挨拶が様になる。

「続きまして。保護者祝辞、クロノス・マスグラン・トピアーズ様
お願いします。」

さつきから身内の話ばっかだな…。

「皆様こんにちは、先程の息子のスピーチご静聴ありがとうございます。」

さて、私からは学生生活に置ける三つの柱について…」

うわ、テンプレ…。

こういうのは眠くなって…く…る…。zzz…。

そして夢の中へフォルダウンしていった。

夢うつつ、起きているのか寝ているのかは自分でも分からない。

目の前に広がるは昨日の様な七年前の最期。

きつと夢だな…。

見慣れた通学路、見慣れない二人、完全にとばっちりの俺…。

もし、俺があの時コンビニにでも寄ってたたら？

補習でも食らってたら？

この世界には来なかったのだろうか？

いや無駄か…。運命を変えたんじゃない。変えられただけなのだ。

それに別にこの世界に来た事を後悔はしていない。

前向きに考えるんだ。ある意味得しているじゃないか。最終的に元の世界にも戻れるらしいし。

運命を変えた『あれ』と悪魔には身勝手さに苛立ちを覚えなくてもない。しかし俺は今この世界を楽しめているからまだ良いものだが。

つたく…、あいつら人の迷惑を考えろつての…。

ここでふと疑問が湧いた。

俺はもしかしたらルナや王子に対しあいつらと同じ立場にいるのではないか？

意図せず、いやあいつらも意図はしていなかっただろう、とにかく俺は運命の輪の外から他人の運命をあらぬ方向に変えようとしている。

自分でこの事に気付くと自分が堪らなく恐ろしく身勝手に醜い迷惑な存在に思えた。

何一つ今の俺にはあいつらを否定する権利は無い。

こんな自責の念から一つの決心が固まった。

いつか家を出よう。

今更俺がいなくなったからと言って何も変わらないかもしれない。

でも俺は居ても変わらない存在ではなく、居てはいけない存在でもなく、ただ元からいない存在なのだ。

きっと俺が元のいない存在になればあの子達は元の運命に自然と戻ってくれるだろう。

いや、例え違うとしてもこれ以上あの子達の運命を歪める訳にはいかないのだ。だから俺は家を出る。

とは言え七歳児の家出など高が知れているでもう少しはお世話になると思うが。

別れは辛い。しかしいつまでも此処に居ては予期せぬ迷惑を掛ける

かもしれない。俺はそんな事になったら自分を許せないだろう。
だから…、俺は家を出るのだ。

9 2 入学式と一つの決心（後書き）

書いていて思った。

入学式関係無いじゃん！

まあ、気にしないで下さい。

9 3 入学式と一つの決心

「お…え…、お…え様！、お姉様！」
ハツと目を覚ます。

目の前には覗き込む様に王子の顔。

「キャッ！」

我ながら可愛らしい悲鳴だ。

というか王子、女性の寝顔を覗き込むとは如何なるものでしょう？

「起きたか？式はもう終わってしまったぞ？」

あ…、完全にやつちまった…。

駄目だ。昔からこういう行事＝睡眠時間の等式を覆せない。

「アテイ、起きた？」

ケラケラ笑うメル兄。

メル兄も寝てたクセに…。

「ところでアテイ、この人誰？」

そういえばメル兄はアラン王子と初対面か？

「初めまして、お義兄さん。アーランド・ドトノック・ディアマン

トです。アテイの婚約者です。」

おい、待てコラ。言葉では分からないが字も恐らくおかしい。

「結婚する気はありません！」

「つたく、コイツは油断も隙も無い…。」

「ふん…。」

「いや…、ふんって…。」

「あ…？お兄様？仮にも王子殿下ですよ？」

「お前もお前で仮にもとは何だ？」

うん、気にしない。何かもつ心のどこかでコイツを王子と認めたくない。

「いや、王子ってのはさ、名前聞けば分かるよ？」

「ならどうしてですか？」

分かってて？ますます分からない。とりあえず頼むから面倒な事に
発展させないでくれ…。

「ん…。だつて僕、その人嫌い。」

…は？

何を言っているんだ！？この人は！？

「ちょ、ちよつと待って下さい！？メル兄様！？嫌いってそんな何
ですか！？」

子供同士とは言え、この発言は流石に問題に成り兼ねない。

「流石に面と向かつて嫌いと言われたのは初めてだな。」

微妙に威圧感が増してる気がする。つーか多分普通に怒っている。

「殿下も落ち着いて下さい！」

あーっ！もうつ！何でメル兄はこうも次々問題を引き起こすんだ！？

「じゃあ、アテイ？聞くけどさ、アテイは殿下の事好き？」

一瞬思考が止まった。

「えつと、それは…その…。」

でも正直、少なくとも好きではないと思う。

会ってまだ一週間。一目惚れを否定しないが国のトップがそんなの

では困る。あと何度も言うが俺は男だし。

「言葉に詰まるって事は、好きではないんだよね？僕は嘘を付くの

は苦手だから。正直に言っただけさ。」

的を射ている様な気のあるメル兄の発言が突き刺さる。

「そうか…。お前は俺を今は好きじゃないんだな…。」

「殿下…。」

悪い事したな…。

ん…？『今は…？』

「だが、俺はお前を諦めない！いつかお前の気持ちが変わるまで何
度でも立ち直る！」

ちよつとでも可哀相とか思った俺が馬鹿だった…。

もう呆れを通り越し、感心の域に入る気がする。

頼みますから惚れるならルナにしてください。俺よりよっぽど良い

から。

口に出そうが出さまいが 意味がなさそうだから言わないけどな。…。
どなたかこの暴走王子を止めて下さい。

9 4入学式と一つの決心

入学式はほとんど終わっていた。

ホントに大半を寝過ごしてしまった。まあ、今更なのでどうしようも無いが。

アレス兄がいなくなる。

この事はだいぶ辛い。真面目で固い人だが良い兄だった。こんな言い方だと永遠の別れの様だが夏と冬には帰ってくるらしいし、夏の帰省は3ヶ月後、そんな遠くない。

不安があるとすればメル兄の抑え役が一人減るのが何とも手痛い。

そして校門の前にてアレス兄との別れの時。

周囲でも同じく別れや激励の言葉が飛び交う。

「頑張れよ。」

父の単純にして力の籠った激励の言葉。

「はい！公爵家の名に恥じぬ振る舞いをしたいと思います！」

アレス兄の力強い返事。

「あまり気張り過ぎるなよ？」

アレス兄はホントに真面目だがそこがたまに心配になる。

「うう…、兄様…。帰ってきて下さいね？」

泣き出すルナ。うん、泣いてても華がある。

「大丈夫だよ。夏には帰ってくる。ほら、アティも泣くな。」

言われて初めて自分が泣いていた事に気付く。

はあ、最近涙腺が緩いな…。

「お元気で。」

素っ気ない感じだがこれ以上言つと声を出して泣いてしまいそうだった。

「アティもな。あとメル、これからはお前がアティとルナを守るん

だぞ？」

「りよ〜かい。」

… ホントに大丈夫なのだろうか？

これを期に兄としての自覚を持って貰いたいものだ。

「ではお父様、行ってまいります。」

兄からの別れの言葉。

「ああ、行ってこい。」

父にとってそれ以上の言葉は必要無かった。

今更の言葉は無粋と言うものだ。

兄の姿はすぐに人混みの中へと消えていった。

涙を拭う。周囲の人たちもちらほら帰り始めていた。

「私達も帰ろうか。」

「…はい。」

いつでも近くにいてくれた人が今日一人離れていった。俺という人間は二十数年生きていてもここまで脆く、特殊な境遇の中でまだ人間味を持ち合わせている事の実感を得た。

「ほら、アテイ、ルナ、泣かないで？」

メル兄からの宥める言葉に無言に頷く。

気を強く持て。

自分に言い聞かせる。

こんな事ではいつまでもこの家族に依存してしまいそうなそんな不安に駆られる。

帰りの馬車は行きよりも余計に広がった。

気持ちは落ち着いたが沈んだままである。

… 天界にでも行くか。

もしかしたらルナの運命が変わってしまっているかもしれないし、
ウィルディアまでは少なくとも二日と半日。時間にして60時間。
天界換算で12時間。

よし、寝よう。

「おじさん。」

護衛のおじさんにだけでも断っておこう。

「ん、何かな？お嬢さん？」

「ちよつと二、三日眠ります。」

この時は喪失感で気付かなかったがどう考えてもこの台詞はおかしい。

「ああ、了解した。」

おじさんもすぐには気付かなかったのか了承した。

「『GO TO HEAVEN』」

「ん…？おい、ちよつと待てっ！？今何て言った!？」

静止の声も聞こえ無かった。

俺の意識は天界へと向かっていた。

9 5入学式と一つの決心

「浮影さん？どうしたんですか？」

天界でお馴染みの天使のお出迎え。

「時間が有るし、気になる事があってさ。」

無論ルナの事だ。

「気になる事ですか…。」

「なあ…。前言ってたよな？神力が有る者は他人の運命に干渉出来るって？」

その言葉から察したのか

「なるほど、誰かの運命を変えてしまったかも、と？」

凶星だった。

「凶星ですか。」

何か知らないが悔しい。

「それは仕方ない事ですよ。あなたがあの世界に生きている限り呼吸と同じ様にあなたの周囲の運命は変化し続けるんですから。」

「だけど、どうにか出来ないのか？」

「無理です。」

ばつさりだった。

「そんな都合の良い事が出来れば貴方をあの世界に送ってなんかいませんよ。」

世の中そんな都合良くないか…。

「人の運命を変えたく無ければ山籠もりでもして下さい。」

山籠もりか…。現代人から箱入り娘でさらに魔法も使えずだから一週間ももたないだろう。

そんな事を考えながらも『ライブライブラリー生きとし生ける者の大図書館』を使用し、ルナの運命を見ていた。

運命はおおよそ俺の予想していた最悪の方向へと向かっていた。ルナの結婚の運命が消えていた。

正確にはその部分が塗り潰された様に黒くなり読めない。

「何なんだよ……。」

ギリツと食いしばる。

「どうしたんですか？浮影さん？」

本を天使に見せる。

「これだよ。黒くなってんじゃん。」

「その本は貴方の想像ですから私は見れませんが、つまり運命が見れないと？」

ふーむと考え込む天使。

「私はその様になった事がありませんから分かりませんが、恐らくは運命の不確定から起こっているのではないかと思われれます。」

つまりは……、

「どんな運命になるか分からない、と？」

「はい、その時間に2つ以上の同時に起こり得ない事象が重なり、運命が不安定になってるのでは無いかと思われれます。」

俺は考えた、いやもう答えは決まっていた。

「なあ、それは1つの事象が消えれば元に戻るのか？」

「重なっているのが2つなら、そうなりますね。」

この返答で決心がついた。

「そうか、ありがとう。」

「何をする気かは分かりませんがくれぐれも無茶はしないで下さいよ？極論貴方は世界を壊す運命すら持ち合わせるんですから。」
流星にそれはしない。

「大丈夫、そんな大それた事はしないから。」

ただ、俺が今の立場からいなくなるだけだ。

そうすればきつとあの惚れっばい王子もルナに気が向くだろう。

「付き合ってくれてありがとうな。」

んーっ！と背を伸ばし、

「さて！感覚を忘れないうちに神力をマスターしようっ！」
振り払う様にそう言った。
そんな俺を寂しそうに見つめる天使の視線に俺は気付かなかった。

9 6入学式と一つの決心

神力は一度使う感覚を手に入れば後は簡単だった。自転車とかと同じだ。

後何故か電気に変換させるのが最もやりやすい。これは天使曰く、「電気という物への認識が他よりいくらか確立されているからではないでしょうか？」

との意見だった。

納得出来そうでも出来ない曖昧な意見だ。

ま、そんな事はどうでもいい。

とにかくこの力は少なくとも現状魔法の使えない俺の命綱となる物なのだから他人事ではいられない。

そして自分の決心を実行するために先立つ力となるのだから。

「いや、浮影さん！一度コツを掴んだら、めきめきと伸びますね！」

「ああ、確かに一度コツを掴めばだいぶやりやすくなったな。」

実質的に神力を物にしてから一週間とちょっと。

自分でもこの伸びには驚いている。

「やっぱり私の指導の賜物ですかね。」

自信有り気に言う天使。

とりあえずそれはない。

無言で哀れみの視線を向けてやると天使はキョトンとした様子だった。知らぬが仏というが…。彼女の場合もう少し自覚すべきでは無いだろうか？

「それにしても今更かも知れませんが、こんなに長く天界てんがいに居ても良いんですか？」

今だいたい9時間くらいか…。

「大丈夫、護衛の人にはしつかり寝る事を伝えていたから。」
断つときゃ心配も少ないだろう。

「いや、それにしても向こうでは2日程経ちますよ？断っていたとは言え、流石に…。」

うーん…。あん時の俺は何を考えていたのだろうか？

「やっぱり2日も寝るのはおかしいか…？」

コクンと頷く天使。

内心冷や汗ダラダラだ。

「教えてくれてありがとう。」

とりあえず天使にお礼を言っておく、

「どういたしまして？」

俺は返事も聞かず天界を飛び出した。

目を覚ますと馬車の中だった。

セーフ…？

「あ、おはようございます。お嬢さん？」

まず目に入ったのは護衛のおじさん。

「おはようございます。」

「いやー、まさか本当に2日通して寝るなんてね。」

護衛のおじさんに笑われる。案じていた程問題にはなっていないようだ。

「お父様達は何処へ？」

馬車は止まっており、中は俺とおじさん以外誰もいなかった。

「ああ、宿屋だよ。お嬢ちゃんが全く起きないもんだから動かすのも可哀相という事で俺が見張りをしていた。」

迷惑掛けたな…。

ついでにおじさんがロリコンと呼ばれる人種じゃなくてよかった。

「迷惑をお掛けしました。」

「気にしないでくれ、こういう仕事だから。」
おじさんマジ良い人。

「ところでその宿屋というのは…?」

「ああ、ついて来てくれ。」

おじさんについて行く。

いつかはこの家族の元を離れなければならない。

「おはよう、アティ。」

それは近い日かもしれないし、遠い日かもしれない。

「寝過ぎだよ?アティ。」

だけどその日はいつか来る。だからその日まで、

「おはようございます。お姉様?」

この暖かい家族と精一杯の思い出を作ろう。

「おはようございます。皆さん。」

それが別れる決心がつくまでの俺の決心だ。

10 1リアン先生の婚姻

アレス兄が入学してからもうすぐ一年。
俺とルナは8歳となった。

今は隣で俺達と共にメル兄が必死にリアン先生の授業を受けている。
何でも中央学院の試験が近いのだそうだ。

ちなみにアレス兄はこの時期焦った様子は無かった。
そこら辺から察して欲しい。

メル兄は案の定魔法科を目指すそうだ。

もちろん魔法実技に至っては百点を越えられるなら千点にしたって
良いくらいの実力だが、そこはどう足掻いても百点。

逆にその他の教科が結構絶望的。

魔法にしても筆記に関して言えばメル兄にとって魔法発動のプロセ
スなどあつて無い様な物だからそこまで良い訳ではない。

総じて何を言わんかと言えば、結構危ない。

中央学院は平民も当然の様に受け入れるが、逆に実力が満たなけれ
ば貴族だつて追い出す。そんな厳しい学校なのだ。

裏口なんてのも無くはない、しかしここは天下の公爵家。エリート
中のエリート。そんな事が発覚すれば信用もがた落ちだろう。

それに最初から父がそんな事を許さないだろう。

そしてこんな無駄な事を考えていればいつも通りリアン先生からの
愛の教本が飛んで………来ない？

リアン先生は何やらニコニコとして上の空。

逆に怖い。とゆーかキモい。

これはどういった現象だ？

俺は決してMではないがいつも叩かれているだけに物足りなさすら
感じる。決してMではないからな！！

ちなみに今やってんのは算数。これは年齢相応の内容。逆に言えば

俺にはとても退屈な内容だ。

「これで今日の授業を終わります。ありがとうございました。」

「……ありがとうございます!」「」

「ん〜っ!終わった〜。」

グツと背を伸ばすメル兄。

「……おかしいですね。」

呟く。

「何がですか?お姉様。」

不思議そうにするルナ。

「だって私はともかくメル兄様まで今日は叩かれて無いじゃないですか?」

「……確かに。」

納得するルナ。不満そうなメル兄。

「そこ納得するんだ……。」

メル兄が不平を言うが、とりあえず日頃の行いを省みて欲しい。

「でも確かにそうだね〜。」

「何かあったんでしょうか?」

ふむ、確かに何かあったのかもしれない。

でも一体何が……?

「病気とか?」

「縁起でも無い事言わないで下さい。それにあんなに笑顔だったんですよ?」

俺も病気では無いと思う。

「じゃあ男の人とか?」

「リアン先生に限って……。」

自分で言っただけ固まった。

そうだ、初めて天界に入った日。見たではないか彼女の運命を。

「いや、きつとそうです!」

「お姉様?どうしてそう言えるんですか?」

…言う訳にはいかないよな。

「勘…かな？」

不思議そうな顔をされたが知らぬ顔。

言えないし、言っても電波扱いだろう。

10 1リアン先生の婚姻（後書き）

タイトルがまんまですね…。
もう少し違うのが良かったかも…。

10 2リアン先生の婚姻

「よし、尾行しよう。」

そんな事を言い出したのはメル兄だった。

「尾行って…リアン先生をですか？」

恐る恐る聞くルナ。

「当たり前じゃ〜ん。本当に彼氏だったらおもしろいじゃないか、その男の人が気になるし？」

「どっちにしようとか兄様の好奇心を満たす為なんですか…。」

呆れ半分で言う。言い直す必要は有ったのだろうか？

「そうと決まれば早速リアン先生を追いかけよう！やる気上げるメル兄。」

しかし、

「リアン先生はもう見えませんよ？」

うん、確かにもういない。

「分かってるよ…。ちよつとは乗ってよ〜？」

拗ねるメル兄。

「もういいや…。明日の作戦でも考えようか…。」

「考えるって…私達もですか…？」

何言ってるの？そんな目で俺とルナを見る。

「当たり前じゃん。だってアテイもルナもリアン先生の事が気になるでしょ？」

「ま、まあ気になりますけど…。」

そんな曖昧な言葉に付け込み

「でっしょ〜？じゃあとゆーことで作戦を考えよう！」

「で、ですけど…。」

「けども何も無いよ〜？悩んでるくらいなら考えて〜。」

くっ…、話の流れを持ってかれたな…。仕方ない…。作戦練るくらいなら付き合うか…。

次の日

相も変わらずリアン先生はニコニコというかニヤニヤというかそんな笑顔を浮かべている。

本当に彼氏の事を考えているならよくもまあ毎日四六時中考えていられる物だ。

彼女いない歴計23年にも上る俺には与り知らぬ話だ。

そんな表情観察をしても気づかない所を見ると大分お熱な様だ。隣でメル兄が必死で頑張っているがこれは演技でも何でも無い様だ。何故今まで頑張ろうとしなかったのか…。一応前世で高校受験をくぐり抜けてきたから気持ちは分らないでも無いが…。

こうして今日も俺は疎か、メル兄も怒られずに授業は終了となった。

「……ありがとうございます！」

先生は舞い上がりそうな調子で部屋を出ていく。

うん、とりあえず何か有るのは間違いないだろう。

それと同時にメル兄から作戦開始の合図が出る。

とは言っても実の所作戦という程の作戦は無い。

ただ俺が单身リアン先生の尾行を行うという物だ。

理由としては、まず複数で動くのは目立つ為誰か一人が行くだけにしようという事になった。

だったらそこは言い出したメル兄だろうという意見を出したが、獣人の方が身体能力や感覚が優れるだろうと言われ、反論はしたが結局言いこまれるめられた。

そんな感じで今俺がリアン先生の後を追っている。気になるのは事実だし、やれる限りやってやろう。

10 2リアン先生の婚姻（後書き）

お祭りに行つてて更新がいくらか遅れました。
後この話、昨日一回消してしまつて焦りました。

10 3リアン先生の婚姻

こちらアテイ、どうぞー

と何となく無線を使う真似を試みる。本当に尾行とかで使うのは知らないが。

スキップでもする様に浮かれている為尾行は割と簡単だ。

と置いていたら突然後ろを振り向かれ焦った。

危ねえ！？

…冷静に考えれば三人一緒ならともかく自分一人で歩いているのが見つかったってどうという事は無いんじゃないだろうか？
尾行していて結構楽しいから良いんだけどさ。

この家で八年間のほとんどを過ごしてきた訳だから構造は完璧に把握している、隠れる場所などに関してはお手の物だ。

加えて少なくとも普通の人間より発達した五感、そして野生の勘とも言うべき第六感により気付かれる様な事はほとんど無かった。しかしそんな尾行に問題が発生した。

それはリアン先生の進行ルート。

恐らくこのままだと外に直接向かう気だろう。

リアン先生やアルマ先生そして面識は無いがディラン先生は住み込みで働いてる訳で一度部屋に戻ってそこで何らかの情報が手に入れば良いなと思っていた。

しかし外に直接向かうのであればそれ以上の追跡が不可となる。

まず、屋敷を中心とした半径30メートル程の外庭、隠れる場所も少なく、普通に遊ぶなら良い環境だが尾行には不向きな場所だ。

次に門番と塀、庭をぐるりと囲む様に高さ2.5メートル程の塀がある。外から中への侵入を拒む、俺からすれば中から外への脱出を遮る厄介な壁だ。

今の俺の身体能力を持つてすれば乗り越える事は不可能ではない。ただ確実に見張りに連れ戻される。それに対し、正攻法（？）のリアン先生をこれ以上追うのは俺には不可能だった。

「…という訳でした。」

俺はそこで追跡を断念し、帰還してルナとメル兄に報告を行った。

「そうでしたか…。残念ですね。」

「うーん、部屋には戻ら無かったか…。」

「何かあるって事は分かったんですけどね…。」

そんなのとづくに分かっているのだ。問題はその相手が誰かだって言うのに…。

こんな箱入りな身分の自分が悔しい。

もう少し自由に行動出来たらなあ…。

でも見なくても予想される。きっと相手というのは本当に良い接し方をしてくれてるのだろう。

楽しそうなりアン先生を見れば分かる。

表面上だけでも良い。リアン先生を幸せにしてくれるなら。

出来る事なら自分の見える範囲の人には全てに全て幸せになって欲しい。

見える範囲だけというのは何とも独りよがりな考え方だろう。

ただど全てを救える程の力は俺には無く、見える範囲を救うだけの能力は有るのだから。せめて精一杯の事をしよう。それが俺のこの世界で出来る事なのだから。

だからこそリアン先生にも幸せになって欲しいのだ。

10 4リアン先生の婚姻（前書き）

お気に入り200件突破！

ここまで応援してくれた皆様に感謝を！！

10 4 リアン先生の婚姻

今日はリアン先生じゃなく、アルマ先生の授業だ。

もちろん相変わらず魔法は使えない。

「…つまり、エンシェントワード古代語を介する事により、世界により明確なイメージを伝え、魔法発動の補助となるのです。」

俺が英語だと思っていた物は先生曰く、『古代語』なる物だそうだ。古代って…、まさかこの世界が実は何らかで人類滅亡後の地球なんて事は無いよな…？

「この事からエンシェントワード古代語も一種の魔力媒体と取れますね。」
んにしても俺は何故魔法を使えないのだろうか…。
やっぱり魔法を自在に使える事には憧れて止まない。

「今日の授業はここらへんにしましょう。ありがとうございました。」

「ありがとうございます！」

さてと、これからどうしようかな…。

ずっと気になっているしこころは…

「ねえ、ルナ。」

「何ですか？お姉様。」

「いつそ、リアン先生に直接聞いちゃおうか？」

「ええっ！？リアン先生の彼氏さんの事ですか！？大丈夫…何ですか？」

驚くルナ。

「だってさ、外に出られたらそれ以上調べられないでしょ？」

「そ、それはそうですね…。」

口ごもるルナ…。

「けど？」

「直接聞きにくかったから尾行したんじゃないんですか？お姉様の

尾行の意味って…。」

うっ…、痛い所を突かれた。

「それは言わないでよ…。」

「ごめんなさい…。」

ルナは別に悪い事してないけど謝られた。

斯くしてリアン先生突撃インタビュー作戦が実行される事となった。

当のリアン先生はといえばギリギリ授業が終わっていないからまだ家にいた。

「またも軽い足取りでさっさと出ていこうとするリアン先生を何とか食い止めた。」

「何かしら？アティちゃん？ルナちゃん？」

「いえ、あの最近ずっとニコニコして楽しそうだなって思いまして。」

多少遠回しに質問をする。

「やっぱり分かっちゃうかしら？」

大分聞かれて嬉しそうだ。というかここまであからさまで気付かない人間の方がレアではないか？

「実はね、まだ決まってるじゃないけどね、もしかしたら先生、結婚するかも知れないの！」

「本当ですか!？」

素直に驚くルナとやっぱりかと言った感じの俺。

「あら、アティちゃんはあまり驚かないのね？」

「いえ、そんな事はありませんよ？」

だって、結婚するって事は一応知ってたしな…。まともじゃない方法で。

「そういえばお相手はどんな方何ですか？」

俺が気になるのはむしろこっちだ。

「彼はとっても素敵なお人よ。優しくてかっこよくて…それで…。」
駄目だ。止まらなくなった…。恋は盲目とは良く言った物だ。

全く周りが見えていない。

でも逆に盲目になれる程の魅力的な相手で良かった。

「もう今度連れて来ようかしら？」

何だと!?

いや、これは相手を見定める良い機会かもしれないな。

さて、どんな人が来るか。

鬼が出るか蛇が出るか…。多分そんな恐ろしい物は出ないけど。

10 5リアン先生の婚姻

先生が彼氏を連れて来ると言ってから3日。
遂に今日連れて来るそうだ。

彼氏を連れて来ると言われた父親の気分に近い物かも知れない。

いや、前世を含めてもリアン先生の方が年上だからせいぜい弟かな？
とにかく何でか俺が緊張している。

今日は特に授業も無い為家族と共に食堂で待っている。

トントン。

食堂のドアがノックされる。

「失礼します。」

リアン先生がまず食堂に入り、その後ろから

「失礼します。」

入って来たのは割と高身長の狼：？の獣人の青年だった。

「お初にお目にかかります。リアンさんとお付き合ひさせて頂いて
いる。トリーク・オーフェンと申します。」

名前を聞く限り平民の様だ。

俺のアティニャ・“ラグラン”・トピアーズの様に名前と家名の
間に身分を表す名前が無い事から予想される。ちなみにラグランは
公爵家の女性という意味だ。

「まさかこのような卑しい身分の者が公爵家の領地に足を踏み入れ
るとは誠に恐縮です。至らぬ所は多々ございますが、そこは広いお
心で許して頂きたく存じ上げます。」

そこから話を聞いていくとトリークさんは雑貨屋を営んでいて、た
またリアン先生が訪れた際に話が弾み、想像以上にうまく行って
現在にと至るらしい。

予め運命が決まっている物と知っている俺が言うのもおかしい話だが、まさに運命の出会いという物だそう。

その後は1時間ほど話をした後、トリークさんは帰った。

「何だ？リアン、良い人を見つけたじゃないか？」

「はい、ありがとうございます。」

両親とリアン先生やアルマ先生、ディラン先生らは学院来の友人らしいからな。

俺には友人の結婚を祝うという事は良く分かんがきつと喜ばしい事なのだろう。

それにしてもリアン先生の結婚相手が普通に良い人で良かった。

あの人と話しているリアン先生はとても楽しそうだった。

どうかこのまま恩師の幸せな結婚生活を祈るのみである。

あれ？このままリアン先生結婚したら寿退社の要領でこの家からいなくなってしまうのだろうか？

それは結構辛いかも…。

程よい厳しさを兼ね備えたとしても良い先生だったのに…。

まあ、俺には止める事は出来ないから仕方がないのだが。

結婚か…。俺はする気は無いがどうやってルナにあの王子の気に向かせようか。

半年程前に一度この家にまで乗り込んできた事もあった。

普通なら王子様が迎えに来たとか喜ぶものなのかも知れないが、俺やルナと来たらしっしっと言った感じで遠ざけるんだからある意味すごい。

とりあえずリアン先生はきつと幸せな結婚生活を送っていつてくれる事だろう。

めでたしめでたし。

10 5リアン先生の婚姻（後書き）

なんてつまらない平穩で終わらせる気はございませんからご安心下さい。

11 1 運命の刷新

リアン先生の結婚の話から三週間。

メル兄は試験の為に王都に行ってしまった。

とりあえず現在庭園を散歩中、色取り取りの花があり、なかなか綺麗だ。

前世は特に散歩や花が好きだった訳ではない。単純に元の世界に比べ娯楽が少な過ぎるのだ。

しかし最近はこんな時間も楽しめる様になってきた。

たまに性格を矯正されてんじゃないかと怖くなるけど。

前方5メートル程に俯いた大柄な体が見える。

近づいて声を掛ける。

「どうしたんですか？デイラン先生？」

デイラン先生は主に武術の先生で熊の獣人だ。大きなお腹に抱き着きたくなるが、行動に移す程俺は短絡的ではない。ああ…、すごいふかふかしてそう…。

「ああ…、アテイお嬢様…。」

アレス兄が学校に行ってしまったからあまり元気は無かったがリアン先生の結婚の話を聞いてから更に元気が無い。

「リアン先生の事ですか？」

「ちちち、違いますよ！！」

面白いくらいに動揺しているな。

だいぶ昔、それこそ学生時代程からリアン先生の事を気にしていたそうだが、結局どうする事も出来ずにリアン先生の結婚という話が出てしまったそうだ。

可哀相っちゃ可哀相だが、それは昔から決まっていた運命。無理に変えるつもりは無いし、変える訳にはいかない。

「あら、そうでしたか。」

「そうですね！何言ってるんですか！」

ちよつとからかい過ぎたかな？

「でも、理由は何であれ最近元気が無いですよ？」

「…自分でも分かってはいるんですよ。ですけど…。」
ウジウジしてるなあ…。

元男として何と言うかもつとシャキツとして欲しい。

「そんなだからリアン先生を取られてしまつんですよ！」

言ってからちよつと言い過ぎたなと思った。しかし一度吐いた言葉は飲む事は出来ない。

「お嬢様…。すみません…。みつともない所を見せちゃいましたね…。ありがとうございます。元気が出ました。よし！もう一度自分を見直したいと思います！」

言い過ぎたかもしれないけど良い方向に転んでくれた様だ。

「ご迷惑をおかけしました！」

リアン先生のことはいくらか踏ん切りが付いた様だ。

「もう少し落ち着いたら私にも武術を教えてくださいませんか？」

この際だから頼んでみる。いつかの日に備え武術を心得るのも悪く無いだろう。

「お嬢様に…ですか…？」

不思議そうに聞いてくる。

「はい。いけませんか？」

まあ確かに貴族の娘が進んで習う物でも無いかも知れないが。

「いえ、武術を志す事は良いことだと思いますよ？ただ…。」

「ただ…？」

「ケガの恐れなどもありますので、お嬢様が習うのは如何な物かと…。」

「あら？これでも武王の血を引いているのですよ？」

武王。十数年程前、町一つを滅ぼす程の竜に立ち向かい、一人で竜を討ち取ったという俺の父親。

最初は冗談だと思っていたが何と本当だとか。

「ふふっ、なら武王様に意見を仰がないと。」
悪くない感触…かな？
血は引いても才能何て無いかもしれないが。

1 1 1 運命の刷新（後書き）

やっと名前だけだったディラン先生を出せた…。

11 2 運命の刷新

俺は今日すごい機嫌が良い。何故なら去年の王都訪問以来の外出が出来るのだ。

というかまず、この歳で2回しか外に出たこと無いって…。

とりあえずそんな事はどうでもいい。今日の外出というのはリアン先生への結婚祝いを買いに行こうという物だ。

結婚はほぼ確定。というか俺が何かしなければ運命はそのまま流れるから当たり前だが。

そして遂に俺は外へと足を踏み出した。

今まではずっと町を屋敷の中から見ていただけだった。

活気溢れる町は、近くて遠く、憧れて止まない場所だった。

「アテイちゃん？行くわよ？」

「はい、お母様。」

呼ばれて少し歩みを速める。

今日は母とルナと俺の比較的目立たない服装でのお出かけだ。お忍びという程では無いが、現代日本と比べれば流石に劣る治安の事を考えれば妥当な判断だろう。

今更ではあるが時代背景は中世なんだなと改めて思う。

石造りの建物なんて日本じゃほとんど見ない。商業用の馬車が脇を通っていく。前世を知らなければ何とも思わない事かも知れない、しかし俺には視界に映る全てが新鮮に感じる。

住民は獣人の領地だけあって何らかの獣耳が付いている者が多い。犬や猫といったオーソドックスな者、猿耳なんてのもいたが人間として元から猿なのではと疑問に思ったりする。とにかく普通の人間には見られない程にバリエーションに富んでいる。

そんな調子で周りを見るのに忙しくなっていた。

気が付くと周りには母やルナの姿は無かった。

…またか？

迷子だった。

ふうっ…、落ち着け俺。

いつぞやの王城の様に周りに人がいない訳ではない。しかし話し掛けるのが少し怖い。

…そつだ。トリークさんのお店の場所の紹介を受けていたじゃないか。

恐らくそこにトリークさんが居る事は間違いないだろう。知り合いのの方が都合が良いだろう。

ここは…ティグ通りか。確かトリークさんのお店もこの通りだった気がする。

店を一軒一軒見てそれらしき店を探す。

…あつた。

ここがトリークさんのお店か…。決して大きい訳ではない。しかし慎ましい感じの良なお店だ。

恐る恐る中に入れてみる。

レジに当たる所には誰も居なかった。

店の奥から声が聞こえてくる。人間には聞こえないくらいの小さな声だが、獣人の五感は優れているのだ。どうやら最近になって開発された通信玉と呼ばれる電話に近い物での会話らしい。

「…大丈夫です。あの女は気づいてません。へま？そんなのしませんよ。したつてあの女のせいにして切っちゃえば良いんですから。」

…何の話をしているんだろうか？

何となくこれ以上聞いてはまずい気がして店の商品を見る事とした。雑貨屋だけあつて様々な物がある。中には髪飾り等といったアクセサリーまであつた。

あ、これ可愛いな…。ルナがこの前失くしたつて言つてた奴にそっくりだ。

幸い手持ちもいくらか貰った為、これ以上の買い物も無理そうだし、お土産…というのには少し語弊がありそうだが買って行く事とした。あ、トリークさんが奥から出て来た。

11 3 運命の刷新

「ふう…。」

トリークさんが店の奥から出て来る。

「ん？」

トリークさんと目が合う。

「これはお嬢様！このようなみすばらしいお店に如何なるご用事で？」

「お恥ずかしながら道に迷ってしまいました…。」

本当にこの歳で恥ずかしい…。

「良くこの店に来れましたね？」

「以前お話に聞いていた物で。」

それでも良く覚えていた物だ。

「こんな下賤な男の話覚えていて下さるとは…。誠に恐縮でございます。」

すごい遜ってるな…。

「あの…、お屋敷までの道って分かりますか？」

「はい、勿論でございます！ご案内致しますよう！」

助かった…。

「それではお願いいたします。」

「お任せ下さい！」

「あ、それと…、こちらの商品はいくらでしょうか？」

あのアクセサリーを手取る。

「そ、そちらは…。」

言い淀むトリークさん。

「そちらは50サウンなります。」

日本円に換算して五万円。

高いな…。

しかし手持ちは何とその二倍、100サウン有るのだ。

「分かりました。」
50 サウンを払う。

この前ルナが失くした髪飾りはお気に入りだったらしく。一日中無いと探し回っていた。

似ている奴でいくらか気が紛れると良いが。

「…ありがとうございます。」

半分呆然とした様子でお金を受け取り、商品を渡してくれた。

「では、行きましょうか？」

「…はい。」

何故かトリークさんは元気を無くしていた。

家に着いても誰も居なかった。メイドさんから誰もいや、一人居た。

「お、お嬢様!!」

「何故誰も居ないのでしょうか？」

その後事情を聞くと単純に俺が居なくなった事に起因するらしい。

その結果屋敷中で大パニックになったそうである。

母からは自分の立場を理解しなさいだとかで叱られた。

今後はいくらか配慮するようにしよう。

「お姉様も人騒がせですね？」

「うー…、反省してます…。」

「ふふっ、よろしい！」

全く…どっちが姉か分からん。双子だから大して変わらないけど精神的には俺の方が三倍近いからな…。

「あっ、そうだ。はい、お土産。」

トリークさんのお店で買った物を渡す。

「何ですか？あっ、私の髪留め！」

「そっくりなのだけどね…。」

「いえ！これは私のです。ほら、ここに私のイニシャルが…。」

本当だ…。

「ありがとうございます！どこにありましたか？」

俺の中でトリークさんへの疑念が高まっていった。

「あ、うん！えーと、その茂みに引っ掛かってたよ！」

まだ証拠が足りない。ルナや他の人にはまだ伏せておく事にした。

「ありがとうございます！」

トリークさんは…何者なんだ…？

トリークさんの事を調べる為に俺は天界へと行く事とした。
こういう証拠確保に『生きとし生ける者の大図書館』ライブライブラリーはこの上無く
便利だ。

ただある場合を除いて…。

俺は愕然とした。

名前が…無い…？

そう、トリーク・オーフェンという名前は何度探したって見つから
無かった。

「そんな…。」

「どうしたんですか？浮影さん？」

「名前が無いんだ！何でだよ！？」

「落ち着いて下さい。名前が無い、ですか…。この様な場合は二つ
の原因が考えられます。まず、浮影さんの様に運命が無いパターン。

」

つまりそれは神力かそれに近い物を持っているという事になる。

多分それは無いだろう。

「次に偽名を使っているか…。」

それだ。嫌になる程しつくり来る。

そしてこれで決まった。理由は何であれ、トリークさんは…敵だ。

信じていたかった。しかし運命は現実を少しも曲げずに、ただ淡々と
事実のみを述べる。

店先で聞いたあの会話。あの女とはリアン先生の事だろうか？信じ
たくは無いが恐らくそうだろう。現実には…非情だ。

「…ありがとう。」

今俺はどんな顔をしているのだろうか？泣いているのか、怒っている
のか、それともいっそ全てに呆れて笑ってるかもしれない。

「何か大変そうですが無茶はしないで下さいね？あくまで体は普通

の人と変わらないんですから。」

「分かってるさ。んじゃまたな。」

こうして俺は天界を後とした。

そして一つ決めた。

自分の手で運命を一つ変える事を。

意図せぬ所で変化した運命。

自らの意思で変化させる運命。

後者には責任が付き纏う。だけど全てを背負い込んででも今回の運命は変えたい。

見て見ぬふりはしたくない。目に入る全ての人が笑っていられる様に。

後悔はしたくない。だから俺は運命を変える。

誰かが泣いている姿は…嫌だ。

次の日、俺は起きて考えた。

どうすれば運命を変えられるか。まず、俺が行動をしなければ始まらないのだ。運命を変えられるのは俺しかない。

まず、証拠だろう。あの髪留めでも十分な証拠だが何よりも現場を抑えたい。

言い逃れはさせない。確実にトリークさん…いや、トリークを止める。

残念ながら今すぐには行動に移せない。しかし、昨日の会話を聞く限りにはきつと近い内に再び行動に出るだろう。

その時を狙う。

良いぜ…。リアン先生がこんな悲しい運命しか選べないなら、

俺がその運命をぶち殺す！！

前世で読んだとある小説の決め台詞を心の中で叫ぶ。その直後恥ずかしさで鳥肌が立った。

1 1 4 運命の刷新（後書き）

ごめんなさい…。

最後までよつと調子乗りました…。

メル兄が試験が終わり戻ってきた。

結果はまだらしい。疲れのせいなのか試験の出来のせいなのかだいがぶぐつたりとしていた。

そして部屋に戻るとあれが無いこれが無いとか騒いでいた。トリークの作業かもしれないが、まあこれはしよっちゅうの事だ。

メル兄の部屋、いや物置から入学までに必要な物だけを選別して向こうの寮に送らなければいけないのだがこれは一苦勞な作業になりそうだ。

そんな事より今現在トリークが来ている。

普通に会話しているが、トリークの一挙一動に細心の注意を払う。

「では…、私はこちら辺で。こんな者の為に、貴重なお時間ありがとうございました。」

！

動き出した！

食堂を出ていくトリーク。

「お父様、少しお手洗いに。」

トリークの追跡を開始する。前回のリアン先生を尾行した時のとは訳が違う。見つければ「バッドエンドだ。殺される様な事は多分無いだろうが、そのまま大人しくされればリアン先生との結婚は成立してしまうだろう。」

そんな事はさせない。

変化した後の運命がどんな物かは分からないけど…、だけどリアン先生を利用するだけのあんな奴にはリアン先生を渡さない。

幸い地の利はこちらにある。後は獣人としての能力をフルに發揮し、気付かれない様にするのみだ。

あいつは、やはり出口とは違う方向に向かっている。そしてキヨロキヨロと度々周りを見るので気が抜けない。そしてあいつは俺の部屋に入った。よし、これで言い逃れは出来ない筈だ。

というか俺のも盗まれてたんだな…。アクセサリー類に興味が無かったとは言え、全く気付か無かった…。そつと中の様子を伺う。

見事に部屋の中を物色していた。今の俺にはその様子が生ゴミにたかる野良犬の様に映った。

本当の…最後の希望が打ち砕かれた。

こんな奴にリアン先生を幸せに出来るとは思えない。

物品を盗って出て来た時点で全てを終わらせる。

…今か今かと待ち構える。

…来る！

「何をなさっていたのでしょうか？」

「…これはお嬢様。帰り道に迷ってしまいました。」

事情が分かっていると明白な嘘だった。

「もう無駄な嘘は止して下さい。」

迫力に欠けるが威圧的態度で臨む。

「参ったな〜こりゃ。一応周りに誰も居ない事を確認しといたつもりなんだけどな〜？」

雰囲気が変わった。

「ま、こんな所で立ち話もあれだ。外に出ようじゃないか？お嬢様。」

手には金属的な光を放つ刃物。ちょっと迂闊だったかな…？何で凶器を持ち合わせている可能性を考慮しなかった俺…。

「…分かりました。」

俺は要求を飲むしか無かった。

「物分かりが良いじゃないか。勿論他言無用だ。」
単独で動いた事が今更悔やまれる。

さて、どうした物か？

11 5 運命の刷新（後書き）

アテイちゃんピンチ!?

作者がハッピーエンドの方が好きなんで大丈夫なんですよけど。

半分脅される形で外に出た。

「じゃ、お兄さんから少し質問だ。正直に答えてくれたら。綺麗な顔のまま帰してあげるよ?」

猫なで声で話し掛けてくる。正直気持ち悪い。

「じゃ、一つ目の質問だ。どこから見ている?」

ここは正直に答えるしかないだろう。

「最初からです。食堂から出ていった時からずっと。」

チツと舌打ちが聞こえる。

「つまり最初っから疑って掛かっていたと?じゃあ次だ。何時から気付いていた?」

「迷子になって貴方の店に入った時に奥から話し声が聞こえました。加えてあの髪飾りを妹に与えて確信に変わりました。」

ハアと溜め息がちに息をつく。

「まさか聞かれたかと思ってたらやっぱりか…。髪飾りも駄目だったか。つたく、あんな値段でも買っちゃまうんだから貴族の娘つてのは堪ったもんじゃないぜ。」

確かに普通なら5万の髪飾りなんて買わないわな…。

「んで、この話は誰かにしたのか?」

ここで誰かに話したとか言えば牽制になるかもしれないが、逆上して襲ってくるかもしれない。

「…いいえ。してません。」

この発言にニヤツとしたように。

「いい子だ。じゃあ、お兄さんと約束だ。この事は誰にも言つな。勿論お父さんにだつてだ。」

「…言つたら?」

「お嬢様の綺麗な顔に華が咲くかもな?」
脅しか…。

「私からも質問です。」

「ああっ？まあ良いだろう。」

「貴方の名前。偽名ですよね？」

「瞬驚いたように。」

「良く気付いたな？ただのお偉いさんの箱入りかと思ってたら行動力と良いとんだ逸材だな。」

「貴方は最初から…、最初からリアン先生を騙す気だったんですか！？」

「違えよ…。」

！

「瞬だけ望みが見えた気がした。」

「騙すも何もあんなのただの踏み台たる？」

「へらへらと笑って語る。」

「そして望みは完全に枯れた。」

「コイツだけは許せない。」

「俺が痛みを被ったって構わない。そんなのリアン先生の受ける心の傷に比べたらどうって事はない。」

「許さない…。」

「自分の口に行っている言語が変わっている事に自分でも気づいていなかった。」

「あ？何か言ったか？」

「リアン先生はなあ…、リアン先生はテメエみたいな奴と一緒にだっ
て幸せを感じてたんだぞ！？それなのに…、それなのに人の幸せを
へらへら笑って踏みにじってんじゃねえっ！！」

「勢い余って日本語で叫ぶ。」

「ちっ！！魔法か！？」

「聞き慣れない言葉に魔法と勘違いしたらしい。」

「そして目の前に振り下ろされる刃。」

「ギョツと目をつむる。」

「走馬灯が流れた気すらする。」

しかしいつまで経っても痛みはやって来ない。

恐る恐る目を開ける。

「…ディラン…先生？」

「全く…、クロナス様にお嬢様を見守れと言われてついて来てみればこれだ…。」

ディラン先生が寸での所でトリークを吹っ飛ばしたようだ。

「ちっ、邪魔が入ったか。良いぜ…？他言無用…！死人に口無しだ
！！」

トリークが襲い掛かってくるのが見えた。

11 7 運命の刷新

ナイフを振り上げ、飛び掛かってくる。

「お嬢様は下がって下さい！」

「は、はいっ！」

さつきはあんな強気な事言ってたが流石に怖い。

うん、ここは素直に任せよう。

トリークはナイフを持っているが、対してディラン先生は素手だ。

大丈夫だろうか？

「お前、何故こんな事をした？」

「あの女が…、良いカモだったからだよ！」

ナイフがディラン先生目掛け振り下ろされる。

「それは…リアン、さんのことが…？」

寸での所で刃を受け止める。

「決まってるんだろ？公爵家つっても中に入っちゃまえば警備はザルだったしな？本当にあの女は便利だったぜ？」

気持ちの問題なのか、刃がいくらかディラン先生に近づく。

「…けんな。」

「あ？」

「ふざけんな!!!」

凄い気迫だった。

「で？」

しかし体勢が悪い。トリークは全体重をナイフに込めれば良いのに対し、ディラン先生は押されている体勢だ。

「死ねよ？」

ナイフがディラン先生に迫る。

叫び声を上げそうになる。

しかしそのナイフが刺さる事は無かった。

デイラン先生が巴投げの形でトリークを投げ飛ばしたのだ。

「ちっ、足掻きやがって…！」

「お前なんかにな…！お前なんかにはリアンさんに近づく資格はねえっ…！」

一気にデイラン先生が距離を詰める。

そして袖と襟を掴む。

「俺は…、俺はリアンさんが好きなんだっ…！！！」

「うおおっ！？」

見事な一本背負いだった。

というかこの世界に柔道あんのか！？

トリークは気絶していた。まともに受け身も取ってなかったしな…。

「ご無事ですか！？お嬢様！？」

「は、はい。私は大丈夫です。ただ…。」

「ど、どうかされたのですか！？」

リアン先生の方へと顔を向ける。

そう、途中からではあるが見ていたのだ。

「リリリ、リアンさん！？」

「私、何も見えて無かったみたいですね…。」

「そ、そんな事ありません！悪いのはこの男で…！」

「…ごめんなさいっ！」

リアン先生は走り去ってしまった。

「リアン…さん…。」

誰も笑顔になれていない現在の未来。俺は本当に運命を変えて良かったのだろうか？

横に寝ているトリーク。

その手に握られたナイフ。

きつと良かったんだ…。そう信じないとやってられなかった。

後日

「今までお世話になりました。」

父の前に出された辞表。

「ああ、今までご苦労だった。」

原因はほぼ間違い無くトリークの件だろう。

「では、失礼します。」

「あー、ちよつと待て。」

「はい…?」

「お前の次の仕事場は決まっている。」

「そんな！お構い無く！」

「いや、せめて返事だけでも出せ。」

「…はい。」

「あの騒動の最後を見ていたな？」

「…はい。」

「アテイから聞いたぞ？デイランから盛大な告白を受けたそうじゃないか？」

「…はい？」

「男が全力で告白したんだ。せめて返事だけでもしてやれ。」

「…はい！」

「デイランと良い家庭作れよ？」

「はいっ！」

こうして一つ運命が変わった。しかしそれは誰にも知られる事は無く、正しい物であったかは誰にも分からない。

だけど…、その時のリアン先生の笑顔が一番の物だった。

11 7 運命の刷新(後書き)

リアン先生編(?) 終了!!

お盆期間で少し更新止まるかもです。
質より量の小説なのに…。

番外編 因縁の再会？（前書き）

メルキウス君視点です。

番外編 因縁の再会？

中央学院の入学式が一週間後に迫っている。

今日にだってこの家を旅立たなければいけない。しかし二つの事が未だに僕を悩ませていた。

一つは僕の部屋。お世辞にも綺麗とは言えない部屋だ。この雑多とした部屋の中から持って行く物を選別しなければならぬ。

出来れば全て持って行きたい所なんだけど寮の部屋は今より狭く相部屋らしい。

全く…狭く苦しいのは嫌だな…。

しかし、二つ目の問題が部屋の物を全て投げ捨てたって良いくらいに僕を悩ませていた。

向こうに行ったら、向こうに行ったら…。

アティヤルナに毎日会えないじゃないか！！

無人島に一つ何かを持って行くとしたら？という質問をされたならば、

妹一択。

即答だろう。

中途半端な物を持って行くより妹を愛でて死にたい。

しかし別れとは常に当然で突然な物だ。

仕方ないので妹達との向こうでの感動的な別れをいつまでも胸に取っておくしか無いだろう。

どうしても割り切れない気持ちで渦巻き、僕を留まらせていた。

「もうすぐさ、入学式なんだ。アティとルナも来るよね？」

「え？嫌ですよ。」

「お姉様が行かないなら私もそんな気が乗りませんね…。」

あつさりと否定された。

そして頬を伝う雫。

「えっ！？ちょー！？メル兄様！？泣かないで下さいー！！」

「何で見送りに来てくれないの〜！？」

「え、いやその…。王都に行くにあの王子が煩そうですし…。」

沸々と怒りが沸き起こる。…許すまじ、アラン王子。

妹に近づくのみならず感動の別れまで奪うとは…。

いつか決着を付けてやる…。

王都

泣いた効果も有ってかアティとルナも見送りに来てくれた。

そんな僕達の素晴らしきひと時を邪魔する存在。

「王都に入るや否や会いに来るとは随分な事ですね〜？アラン王子？」

「ん？お前は誰だったかな？そんな事よりアティ…」

「話を無理矢理止めないで下さい。そして王子と言えどアティなんて気軽に呼ばないで下さいね〜？」

何と言う失礼な奴だろうか？

「何だ？未来の妃と親しげに話して何が悪い？後良い加減お前は誰だ？アティのお付きの者か？」

笑顔は保っているがいつ決壊するか分からない。

「じゃあそういう事にしましょうか？」

「だったら俺とアティの関係に口をだすな。」

ブチッと何か切れる気がした。

「実は僕、害虫駆除を頼まれてたんですよ〜。という事で王子、消えて下さいませ。」

我慢の限界だった。

想像以上に早く決戦の時は来たようだ。

「『突風ノ槍』」

プラスチック

僕の手に空気で形成された槍が握られる。

「ほう、魔法か。面白い！俺もいくらかの自信はあるぞ！？」

「ヒートブレード熱刀」

憎き敵の手に炎の剣が現れる。

うう…火の魔法か…。とことんこの王子とは相性が悪いようだ。

しかし…この勝負負けられないっ！！

「いざ、勝負っ！！」

風の槍と火の刃が交わろうとした瞬間

「ストロープッ！！」

アティに止められた。

「どうして戦うんですか!？」

「俺（僕）とアティの関係に仇なす者を始末しよう」と。

言葉が被った。ムツと王子を睨む。向こうからも睨んできた。

「争わないで下さい！二人とも、その…好きなんですから！」

その瞬間鼻を覆った。何かイロイロ危なかった…。

「よし、ならば結婚だ！」

王子からのとんでも発言。

「ちよつと待て！アティに何言ってるの!？」

「メル兄様は年下にムキになりすぎです！あとそういつ好きじゃあ

りませんから!!」

「…ごめんなさい。」

また被ったし…。

アティから距離を取るように言われ互いに威嚇をしながら離れていた。

やはりこの王子とはいずれ決着をつける必要があるそうだ。

番外編 因縁の再会？（後書き）

とりあえずメルキウス君のシスコンっぷりと王子との関係を明確に
したかったです。

番外編 尻尾の問題（前書き）

以前ケモノっ娘要素が少ないと言われ、書いてみました。満足いくかは別として。

番外編 尻尾の問題

「お姉様って結構分かりやすいですよ。」

そんな事をルナより言われたのは、夏の帰省でアレス兄、メル兄が帰ってきて、兄妹4人で久しぶりにお茶を楽しんでいた時だった。

「あつ、分かるかも。アテイ程じゃないけど兄様もね？」

メル兄からも言われる。一体何の事だ？

「どういう事だ？」

アレス兄も意味が分からない様で問い掛ける。

「感情が出やすいって事ですよ。」

俺ってそんな感情的だったか…？

「そうそう、特に尻尾とか見てれば一目瞭然だよね？」

尻尾？訳が分からなかった。

「尻尾…か？」

俺やアレス兄といった獣人達から生えている耳などと共に動物的特徴を示す尻尾。

アレス兄も自覚は無い様で不思議そうにしている。

「はい、尻尾を見てると目や口以上に物を語ってますよ？」

意識した事は無かったが…。

「例えばどんな風にですか？」

「例えば嬉しそうな時はブンブンと横に振られてたり、悲しいと尻尾もシュンとしていたり…。」

「うわ…。まんま犬や猫じゃん…。」

「ちなみに今はどんな感じでしょうか…？」

何か怖い。

「うーん、そうだね。尻尾がくねくね動いてて、今まで気にしていなかった事を気にし始めた感じかな？」

ほぼ的中だ…。何か怖い…。

部屋に戻り、少しばかり悩んでいた。
勿論、今日指摘された尻尾の事だ。

感情が駄々漏れな付属品を忌ま忌ましげに睨む。

何か困るという訳では無いが相手に筒抜けというのは良い気分がしない物だ。

一応身体の一部という事もあり、意識すれば動きを制御出来なくは無
無い。

しかし四六時中意識を傾けるのは気が滅入るという物なのだ。例え
るなら一日中意識して呼吸をする人間がいないといった所か？

便利な面も多分無くは無
無い。

例えば猫とかがそうなように、バランスを取る。同じ猫科の虎にも
出来る筈だ。憶測なのは、はしたないとか言われて、わざわざそん
な狭い場所を通らないからだ。

というか多分今更尻尾が無くなれば重心が変わってしまっただろう。

尻尾にだって感覚はあり、正に切っても切り離せない物だ。

総じて悩んでも解決しない問題なのだ。

尻尾の話から二週間が経とうとしていた。

アレス兄達がもう学院に戻らなければいけないのだそうだ。

「じゃ、今度は冬だな。」

「うゝん、またアテイとルナと離れ離れか…。」

「はあ…。早かったな…。」

短い物だ…。

「ほゝら、アテイ。そんな悲しまないの。」

「べ、別に悲しんでいません！」

「そゝ？じゃあそのうなだれた尻尾は何ゝ？」

ハツと尻尾を見ると自分の気持ちを代弁する様に元気の無い付属品

「悲しんでくれないならもうしばらく帰って来ないかな？」

更に下がって行く尻尾。

「メル兄様の馬鹿っ！」

「ゴメンゴメン、嘘だよ。大丈夫、冬になったら真っ先に帰ってくるよ。」

尻尾が上がって行くのが分かる。

「メルはそれで一日早く間違えたもんな？」

「ちょ、兄様！それ言わないでっ！」

「ふふふっ！」

「アテイもルナも笑わないでよっ？」

「お、アテイも少しは元気になったみたいだな。」

気がつくとその時の尻尾は元気良く横に振られていた。

こうして俺は自分の素直な気持ち伝えてくれるこの尻尾が少し好きになった。

番外編 尻尾の問題（後書き）

作者的にオチが微妙かな…？

12 1 止まらない好奇心

メル兄も学院に行つてしまつてから更に一年が経つた。

今家には両親と教師と俺とルナと使用人達だけしかない。

使用人が三十人程もいるのにたった二人がいなくなつただけで大きく欠けた感じがする。

しかし―先ずその話は置いておきましょう。その話がどうでもいい訳では無い。

なぜなら、今この瞬間に半年程積み上げてきた物が実るかどうかが懸かっているのだ。

それは脱走。別に屋敷での生活が不満な訳じゃない。しかし外の世界をもつところ、じっくりと見てみたい。

この時間の堀の向こう側の警備が穴である事はこの半年間を持つて検証済みだ。

後はこの最後の壁を越えるのみ。

優れた跳躍力を活かし、堀の縁に捕まる。

後はよじ登るのみ!!

「…何してるんですか?」

突如背後から声を掛けられる。

「えっ!?!あつ!キヤーーッ!?!」

動揺し、見事にずり落ちる。

「ゴメンなさいっ!!別に何もしようとしてた訳じゃなくて!…あれ?ルナ?」

声の主はルナだった。

「焦りすぎですよ?どうしたのですか?」

ルナになら明かしても大丈夫かな?

「実はさ…」

全てを話した。

町へ行くこうとしていた事、今の時間の堀の向こうの警備が薄い事。

「お父様に許可は？」

「取ってる筈無いじゃない。」

ハア…。とルナから呆れ気味に溜め息が漏れる。

「…でも面白そうですね？お姉様が行くなら私も行って良いですか？」

「…大丈夫なの？」

正直いろいろ心配だ。

「お姉様が一人町に行く方がよっぽど危ないと思いますけどね。」

「どーという意味？」

「町のあちらこちらで騒ぎを起こしそつという意味です。」

俺ってそんな風に見られてたの…？

確かに現在の脱走もだいぶ騒ぎになりそつだけどさ。

しかし退かぬ、媚びぬ、省みぬ。我を通すのみだ。

「ま、良いです。行きますようか？」

「はい！お姉様！」

ルナ、ホントに楽しそうだな。

俺が先によじ登り、上からルナを引き上げる。

よし、予定通り！

周りには誰もいない。

「お姉様？」

「ん、何？」

「今日は何か目的があるんですか？」

…目的か。

行動の先に目的があるんじゃない、行動自体が目的なのだ。

はい、つまるところ考えていませんでした。本当にありゃ。

「…無い。」

ハア…とルナから溜め息が漏れる。

「本当にメル兄様といい騒動の申し子なんですか？単純に騒ぎを起

「こしたいただけなんですか？」

「ごめんなさい……。」

「とりあえず町に行きましようか？最終的な目標はそこからです。人目を避ける為に屋敷と町の一直線の道は避ける。真っ昼間とは言え、貴族の娘が護衛も付けずとか危なっかしいのも良いところだと思っけど。」

とりあえず無事連れ戻される事も無く町の入口へと着いた。

よし！今日は楽しむぞー！！！！

12 止まらない好奇心

王都の時は素通りだった。

一年前は迷子になってトリークの店に迷い込んだ。

とにかく何を言いたいのかというと

もっとじっくり町を見て回りたい！！

後今更どうでも良いがトリークとはある盗賊団の一味だったらしく盗品やら何やらをあのお店で売り捌いていたらしい。

ただ足も付きやすい為、すぐに切られるような下っ端だったらしいが。

今回も例の如くすぐに切られ、一斉検拳とはいかなかったらしい。

「とりあえずどこから見て回りましょうか？」

うーむ…。予定は未定。何も考えてなかったからな…。

「何か良い場所無いですか？」

「質問を質問で返さないで下さい。」

「ゴメンなさい…。ですけど本当に何も考えていなかったんですから…。」

ルナとしてはもう呆れを通り越し、良くそんな事で実行に移したな、みたいな目をしていた。

「そうですね…。最初は服屋なんてどうでしょう？」

今の自分が言うのもアレなのだが女ってホントに服とか選ぶの好きだな…。

「とりあえずこんな服装じゃ目立って町もまともに歩けないでしょうし。」

今の俺らの服装といえば 普段着っちゃあ普段着なのだがお姫様の様なドレス。少なくともお忍びで見回すには不向きな格好だった。今も割と目立っている様で気にしだすと周囲の視線が結構イタい。

「…そうですね。」

ルナのもつともな意見に諭され、服屋へと向かう事とした。

「はい！らっしやい！！」

威勢の良い猫耳をしたおばさんが出迎える。

家のメイド長のおかげでそんなショッキングな事態にはならずにするんだ。

初見なら結構きつかったかも…。

「これはまた可愛らしい娘さん達が来たもんだ！さーて、お嬢さん方に似合うようなのが家にあつたかね？」

「あ、あの余り目立たないのをお願いしたいのですが…。」
控え目にルナが注文をする。

「目立たないの？勿体ないねー！せつかく可愛らしいのに！」
ガサゴソと店の品を見繕うおばさん。

「こんなのどうだい！？」

広げて見せたのは、本当に地味な染めてませんよといった感じの茶色っぽい外套。

うん…、まあ…、目立たない事ならこの上無いかな…？

「おいくらでしょうか？」

値段次第だな。

「そういえばお姉様。持ち合わせはあるんですか？」

ルナが半分不安そうに囁いてくる。

「大丈夫、大丈夫。ほら、」

それは一年前に持たされたお小遣の残り50サウン。

この残されたお金が脱走を企てた一因であった。

「これかい？これはそうだね…。二着で10サウンでどうだい？」

うげ…、大したデザインも無しに一着5000円かよ…。

少なくとも現代日本じゃ売れない価格だろう。

しかしこの世界の布の価値という物が分からない。自分の価値観も

あくまで一部の商品から算出した物であり、本当に合っている自信は無い。
適正かどうかの判断が付かず、店先で逡巡していた。

1 2 3 止まらない好奇心

この価格で良いのだろうか…？

物価が分からないのは大きなネックだった。

しかしいつまでも悩んでいる訳にも行かない。

「…わかりました。10 サウンですね。」

「はい、毎度…!!」

「おーい、ちよい待ちおばさん。」

そんな声が突如後ろから飛んでくる。

振り返るとそこにいたのは黒髪犬耳二十歳くらいのイケメソ。

「何だい？あんた？」

「俺が誰だつて良いじゃないか。そんな事よりこんな無垢で無知そんな少女捕まえて暴利吹っ掛けるつてのはどうなんだい？」

そう言つて俺の頭を鷲掴みにするイケメソさん。

やはり頭を掴まれると耳が潰れるので少しイラッとするが敵ではない様だ。

「じゃあどうしろつてんだい？」

些か不機嫌になる女店主。

「適正な価格で売つてやれつてんだよ。」

やっぱりぼつたくりだったのか…。もう少し物価を調べなきゃな…。

「こんな布つ切れ一つ1 サウンで十分だろ。二着で2 サウン。それが精々だろつよ。」

うわー…、通常の五倍とか…。それで買おうとしたとか良い力モだな…。

結局イケメソさんのおかげで2 サウンで外套を買えた。

おばさんが不機嫌になっていたが暴利を吹っ掛ける様な店だ。二度と行かない。

お礼を言おうとしたらいつの間にかいなくなっていた。

彼は何者だったんだろうか？

追いかけても無いので元来の目的である町を見て回る事とした。
偶然会うかもしれないし。

外套を羽織れば視線は少なくなった。これで存分に見て歩ける。

町は見ているだけで飽きなかった。

雑貨屋には前世でも見た事の無い様な品々が。

八百屋を始めとした食品店には見た事の無い食材が（知らず知らず
に口に入っている物はあるかもしれないが）数多くあった。

店先をぶらぶらと見て回るだけでも十分楽しめる。

ウインドウショッピングって言うんだっけ？

勿論以前の外出の時だってほとんど同じ景色だったのだろう。しか
しあの時は母に連れられ、加えて結果迷子で落ち着いて見られる状
況では無かった。

こうして今町を見て回るといっのはだいぶ新鮮な感覚なのだ。

それにしても前世と比べて俺の感性というのも結構変わってきたな
…。

昔は思いつ切りインドア派で休日全く外出しない日だって少なくな
かったのに…。

「お姉様、そっちは危ないですよ？」

ルナから唐突に注意が掛かる。

「そっちはスラム街ですし。流石にそちらに行くのは…。」

そちらに目をやると目に映るのはやせ細った路上生活者と呼ばれる
人々。

スラム街…か…。

俺がここに生まれてた可能性だってあったんだろっな…。

そう考えると少しゾツとする。

現代日本で現在も貴族の令嬢としてぬくぬくと暮らす俺にはきつと

きつい生活だろう。

しかし可哀相と思ったって俺にはどうする事も出来ない。

俺にもつと力があつたら分らないけど、少なくとも現状はどうしようも無い。

これは綺麗事なんだろうけど全ての人が笑顔になれる様な世界を作りたいものだ。

12 4 止まらない好奇心

その後もルナと共に安全な範囲で町を見て回った。

昼食としてパンに野菜と肉を挟んだケバブの様な物を食べた。こういう食い歩きをしていると高校生活を思い出す。

元の世界が少し懐かしく感じられる。あっちの両親はどうしてんだろ…。そういえば俺って行方不明扱いなのかな…。もっとも確かめる手段が無いからどうしようもないけど。

「次は何処行きましょうか？」

「お姉様は行きたい所は無いですか？」

「うーん…。」

逆に俺は何のためにここまで来たんだろうか…？

単純に楽しそうだからとくらいにしか考えてなかったしな…。

「オイ！ガキツ！待てやつ！」

何処よりか喧騒が聞こえる。俺やルナに向けられた物では無いようだが…。

「離して下さい！」

…あそこか。

お怒りのご様子のオッサンとそれに捕まっているみすばらしい身なりの少女。

割と日常茶飯事なのか周囲は見て見ぬふり、止める者はいない。

「お前、スラム街の奴だろ！？ぶつかってきやがって！！盗った物を返しやがれ！！」

「私、何も盗ってません！離して下さい！」

スリを疑ってんのかな？

どっちが本当かはイマイチ判断がつかない。

「喧嘩か…。危ないしあまり近付かないでおこう？」

「…せない。」

「え…?」

「許せません!! 行きましょう! お姉様!？」

「えっ!? ちょっとルナ!？」

ルナってこんなキャラだったっけ!？」

オッサンと少女に近付き、

「ちょっと! 貴方! そんな少女捕まえてどうしようと言っんです!？」

少女と言っても俺やルナと変わらないか少し幼いくらいなのだが。

「何だ? テメエ?」

「その少女は盗っていないと言っているんです! 離れたらどうですか!？」

何か知らないけどルナがやたら強い!？」

ただホントに危なく無いかな…?」

「テメエ、まさかコイツの仲間か? だったらテメエも捕まえて警備に突き出してやる!」

オッサンは聞く耳を持たない。

そしてオッサンからルナに手が伸びる。

「ルナッ!!」

見てらん無かった。

ガスンツ!

「キャッ!」

何とか間に割り込んだがオッサンに押される形となった。

「大丈夫ですか!？ お姉様!!」

「まだ仲間がいたのか。オラ! こっち来い!」

オッサンが俺も含め捕まえようとしている。

少女を助けようとして完全に巻き込まれたな…。

どうにかしたいけど、どうしたら良いだろうか…?」

そんな事を考えていると間に影が割り込んで来た。

「そこまでだぜ？オッサン？」

「貴方は…！」

それは先程の黒髪のイケメソさんだった。

12 4止まらない好奇心(後書き)

うう、どうしましょう…。ストックが減少気味…。

しかし課題などにも追われて…。

可能な限り頑張りますが、更新止まったらすみません…。

12 5 止まらない好奇心

「この娘たちを警備に突き出すんなら、その前にオッサンを警備に突き出さずせ？」

「次から次に、何で俺が捕まんなきゃなんねーんだよ!？」

尚更イケメソさんが何者か分からなくなった。

…まさか、俺達の正体を知っている？

「んじゃー、これが目に入らぬか、ってか？」

黄門様よろしく取り出した物は

「こ、公爵家の家紋!？」

な…?これには俺とルナも目を見張る。

とりあえずオッサンは慌てて逃げて行った。当然だ、公爵家が一般市民を叩き潰すとも思えないが、正面から立ち向かう様な相手ではない。

「助けていただきありがとうございます。ろくなお礼もございませんが…。」

「良いんですよ、お礼なんて。それよりこれからは気をつけて下さいね?」

ルナが遠慮がちに言う。

俺に至っては見て見ぬふりを決めようとしたしな…。改めて考えると自分が恥ずかしい。

そうして少女も去って行く。

んで、問題はコイツだ。

「…そして貴方は何者なんですか？」

イケメソさんを睨む。

公爵家の家紋という事は関係者だし、ただ者では無い。そして俺はコイツを見たことが無い。

「何者か、ですか…。ふう…、言って良いものか…。」
「答えて下さい。」

「はいはい、分かりました。せつかく可愛らしいんですからそんな顔で睨まないで下さい。」

微妙に照れる。しかし出来る限り顔には出さずに一応まだ睨んでおく。しかし尻尾は少しソワソワした様子だったらしいけど。

「えーっと、私はクロノス様より言われてお嬢様方の監視を頼まれている、ゴスパ・トルーシャと申します。」

監視係か…。いそくだとは思ってたけど…。

「監視ですか…。何時から見ていたんです?」

「何時からというより四六時中見ています。」

「変態。」

「ストーカー。」

俺やルナから侮蔑の言葉が発せられる。

「いやいや!ちよつと待って下さい。出来る限り入浴中とお手洗いの際は避けてますから。」

出来る限りって何だよ…。

「じゃあ、ストーキングしてて何故屋敷から出るタイミングで止めなかつたんです?」

「クロノス様よりお嬢様方の行動を無理に止めるなと申し付けられてましてね。危険を感じたらすぐに止めますけど。あとストーキングじゃありません。立派なお仕事です。」

ふうん…。

「では、私の素性も分かったところで帰りましょう?怖い思いをして少しは懲りたでしょう?」

懲りては無いけど良い頃合いかな?

「はい、分かりました。」

こうしてストーカーもとい、ゴスパさんと屋敷に戻った。

「…ふうん。公爵家のお嬢様ね…。フフツ、面白いかもしれないわね。」
その視線に俺達は全く気づかないのであった。

13 1 六色の魔法と新担任

俺は10歳となった。去年の脱走の後、ゴスパさんがいる事を良い事に俺とルナはたまに町に出かけるようになった。

ゴスパさんが最近疲れ気味な気もするがそれはきつと気のせいだと思う。

断じて俺達のせいじゃない。

そういえばリアン先生が産休に入った。相手は勿論ディラン先生だ。トリークの件の後も結局リアン先生が教えてくれていたのだが、今回ばかりは仕方ない。元気な赤ちゃんが生まれる事を祈るのみだ。そしてリアン先生に変わって新しい先生が来た。またも父の同級生で学年次席だったという実力者だ。

名前は確か…、
トレイト・ドマティ・エンヴァイ…だった筈。やはり長つたらしい名前で一文字、二文字間違えてたって不思議じゃない。通称トレイ先生。

子爵家の次男坊で魚人と呼ばれる種族だ。とは言え良く想像する半魚人とかというよりは、耳の近くにヒレっぽいのが付いてるくらいの普通の人間だ。エラがあるかは知らないけど水中での活動も可能だそうだ。

「…であるからしてこの計算はこうなります。」
今やっているのは数学、いや算数って言った方が適切かな？一番好きな教科だ。理由は一番楽だから。前世でもほぼ同じ物を習っていたし、高校でも一番数学が得意だった。とは言え基本が良くないから精々中の下が関の山だったが。

この先生の何よりの特徴は常にスマイルな事だ。
何が面白い？つてくらい常に笑ってる。顔が固定されてんじゃない

か？つてくらいのスマイルっぷりだ。

「アテイさん？聞いてますか？」

「あっ！はいっ！」

やべっ、余裕こき過ぎた。

しかしこの先生は、ニコニコするだけで特に怒らない。なんと
か拍子抜けだ。締まらない。リアン先生ならここらで喝を入れてく
るところなのだが…。

「では今日はここら辺にしましょう。」

この先生になってからのいつも通り、特に怒られる事も無く授業は
終わった。

「ふう、終わりましたね。」

「ん〜、そうですね〜。」

グーッと伸びる。

「最近お姉様も怒られませんか。」

「だってあの先生優し過ぎますし。」

「そんなものですか…。でも良い先生だと思いますよ？」

元からあまり怒られない優等生ルナには分からないだろうが、これ
はこれで微妙なんだよな…。

「ん…、でも気が引き締まらないというんですか…。」

「そんなものですかね…。」

そんなものなのだ。

「でも怒りっぽい先生よりは良いですね。」

「まあ、そうかもしれませんね。」

そんな感じでルナと先生についての談義を交わした午後だった。

13 - 2 六色の魔法と新担任

「ふあゝ…。」

つい欠伸が出てしまう。

「ちよつと、お姉様。授業中ですよ？」

ルナが小声で注意をしてくる。

しかしトレイ先生の授業は退屈で仕方ないのだ。

昨日は天界に行つて、あまり休めて無いし…。

良くも悪くもこれといった変化は無かった。

今現在は周囲の人々の運命もそこそ良好。後はあの馬鹿王子をどうにかするばかりかと言つたところだろうか。

トリークの件以来少しでも近い存在の人は『生きとし生ける者の
ライブライブラリー
大図書館』での確認を欠かしていない。

そうしないと安心した信頼関係を作れない自分が少し悲しくなる。
しかしながらトレイ先生はなかなか信頼に足る人物のようで安心
した。

あと最近、こつちでも神力を使えるように修行を始めた。
しかしこれがなかなか難しい。

もっぱら裏庭での修行なのだが思いの他、人が来るし、修行の成果
という成果も今のところ無い。

というか何をすれば良いのかやはり分からない。

学院に通つとしたらあと二年しか無いというのに…。

「「ありがとうございます！」「」

さて、今日も授業は終わった〜！

これからどうしようかな〜？

授業さえ終われば割と自由時間はある。

しかし娯楽が少ないが為に持て余すのだ。

仕方ないここは有意義に神力の修行をするとしよう。

修行と言っても出来るかも分からない物をひたすらに実現させようとする物である。例えるなら現実で舞空術とかを本気で練習している様なところである。うん、とても痛々しいね！

しかし俺はそんな自分は何をしているんだろう、みたいな目はとっくの昔に潰した。だって死活問題なんだもん…。

さて、裏庭だ。

現段階では俺以外には誰もいない。良い環境だ。色んな意味で見られるとまずい。

「さーて、頑張りましょう！」

といってもいつもここで何をやるべきか分からずに止まるんだけどさ。

今日は原点回帰といこうか、まずは瞑想からのイメージトレーニングとしよう。

天使曰く、神力の使用には明確なイメージの形が必要ならしい。

魔法にも似通う所はあるし、この過程で魔法が使える様にでもなれば儲け物だ。

という事で今は座禅を組んでみたりする。効果があるかは知らないけど何か一番それっぽい。

ドレスがいくらか汚れるけど気にする程俺は繊細じゃない。

しかしドレスで座禅とか奇妙極まりない光景だな。

というかこんな事を考えている時点で雑念だらけで効果ないんじゃないか…。

そんな事が頭の中でグルグルと回り近づく者に気付かなかった。

「あの…、お嬢様？そんな所に座って何を…？」

「ぴゃうっ！？」

変な叫び声と共に尻尾がぴーんと伸びる。

変な方向に意識を向けていたせいで不意に声を掛けられ飛び上がる。

バツと背後を振り返る。

「…トレイ先生？」

そこに居たのはトレイ先生だった。

13 - 2 六色の魔法と新担任（後書き）

一ヶ月振りの投稿となります。

待たせた割に相変わらずの薄い内容…。

皆様本ツ当に申し訳ありません！！

13・3 六色の魔法と新担任

声を掛けて来たのはトレイ先生だった。

「変な声上げないでくださいよ。こちらがびっくりしてしまつじやないですか。」

とは言うものものあんまり驚いた様子も無く、いつものニコニコとした表情だ。

それとも些細な違いがあるのだろうか？

何とも表情が読み取りづらい。

「あ、えーっと…、花を見ていたんです！」

と言つてみたが周囲には觀賞に価するような立派な花は無い。

「花：ですか：？それにしてもそのはしたない座り方は…。」
座禅を組んでいる現在の姿勢。

勿論この世界に禅宗は疎か座禅なんて文化は無いためトレイ先生にはさぞかし珍妙な座り方に見える事だろう。

普通に考えれば淑女としてはこんな股を大きく開く様な座り方は完全にアウトだ。

とは言え別に恥じらいが無い訳じゃないが俺からしたら知ったこつちや無い。

「それに…。」

しかしこれ以上お小言も深く尋ねられるのも嫌だったので割り込む様に、

「そついえば先生の学院時代つてどのようだったのでしょうか？」
咄嗟に思いついた適当な話題を振る。

「え？学院時代つて、私のですか？」

「はい、私も2年後には学院に入学せねばなりません。是非とも参考にさせていただきたいのです！」

咄嗟に思いついたにしては割とマシな言い訳だと思う。尋ねるタイミングがとつともなく不自然だけど。

「うーん、そうですね…。」
よし！食いついてきた！

「クロノス様を始めとして、キュベア様、アルマ君、リアンさん、
デイルン君達が同級生だったのは知っていますか？」

「はい、学院時代から仲が良かったそうで。」「
咄嗟に思いついた話題だったか思ったより興味が湧いてきた。

「皆学科は違っていましたでしたが不思議と引かれ合っていましたね。その中
心となっていたのはあの頃からクロノス様でした。皆あの人の身分
を笠に着ない気さくな態度と圧倒的なまでの才覚に惹かれていたの
だと思います。」「

なるほど、父のカリスマ性は生れつきか…。

「前人未踏、いえ、今でもいないんじゃないですかね、あの人に勝
る様なお方は。」「

そこまで言わせるのか。

「トレイ先生とお父様はどのようにして知り合ったのでしょうか？」

「出会いですか…。私は政治学科に属していましたがね。常に次
席でした。この結果だって決して悪い物では無いのですがちよつと
悔しくなりましてね。首席がどんな人が恥ずかしながらも嫉妬にも
似た感情で会いに行きました。その人こそが貴女のお父上、クロノ
ス様です。」「

ここで一つの疑問が湧く。

「あの…、お父様って武王とかって呼ばれるくらいですし、武術学
科じゃなかったんですか？」

「あの人は可能な限りの学科を受けて、そしてそのほとんどで首席
を取っていたお方です。」「

うわー…、パネエ…。

前人未踏とか言わせるだけはあるな。

そんな父の嘘みたいな本当の武勇伝を聞いた夕方だった。
そして後から気付いた。

結局神力の修行何一つ出来てない…。

13 - 4 六色の魔法と新担任

今日は魔法の授業なのだがいつものそれとは少し訳が違う。
今日の授業は属性判定。

何をするのかというと自分が使える魔法の属性を知るのだ。
まだ一応魔法を使う事を諦めていない俺としては結構重要なイベントだ。

魔法には基本として六つの分類がある。

無、火、水、雷、地、風に分けられる属性だ。まあRPGなどではお約束である。

因みに無とは『浮遊』^{フロート}や『拘束』^{バインド}の様な属性を持たない魔法。その他の属性はだいたい名前の通りだ。

基本的には一人辺り無と残り五つのうちの一つを持ち合わせていて、持っていない属性の魔法は使えない。

メル兄は風、アルマ先生は地だとか。

個人的希望としては雷以外かな？確定では無いが神力を使える様になったら雷で被るし、色んなのが使えた方が便利だろう。

いっそ異世界に転生しちゃった人間だし、全属性使用可能とかのチート性能来ないかなー…。

「はい、じゃあこの水晶に手を当てて下さい。」

目の前に有るのは注意しなければそこに存在する事すら気付かない程に透明な水晶。

通称、判定玉。

何のひねりも無いがその分かりやすい。

触れると光り、その色によって触れた者の持つ属性が分かる。

緊張の瞬間だ。そっと手を乗せる。

ほわつと水晶が輝き出す。淡い青だった。

「これは水…ですか…？」

アルマ先生に問い掛ける。

「いいえ、おめでとうございます。これは恐らく氷ですよ。」

「氷…。やった…。やったーっ！」

尻尾をちぎれんばかりに振り、飛び跳ね、少々はしたなく喜んでしまった。

ルナの咳ばらいにハツとなり、少し落ち着きを取り戻す。

しかし俺がここまで喜ぶのには意味がある。

先程も述べた様に基本的には持ちうる属性は無+火、水、雷、地、風のいずれか一つ。

では氷とは何なのか？

物事には何らかの例外がある。これがその例外だ。

これは複合属性と呼ばれる二つ以上の属性が混じり合った際に生じる属性である。

氷は水と風からなる属性で、複合属性を持つ者はその元となっている属性も使用できる。

つまり俺は一気に氷、風、水の三つの属性が使える事となったのだ。そして複合属性の適合確率はだいたい五十人に一人。およそ2%。転生という物に関係あつてか見事その確率を俺は引き当てた。

え？どうせ魔法が使えないなら宝の持ち腐れじゃないかって？あーあーそんなの聞こえない。

でもそう考えると俺なんかよりルナが持つべき属性だったのでないかと少し思ってしまった。

…その次の瞬間までは。

次の瞬間目を灼くような閃光と水晶の割れる音を聞いた。

13 - 5 六色の魔法と新担任

「ルナ！？大丈夫！？」

全くもって油断していた。慌ててルナに近付く。

「はい、お姉様。いきなり水晶が割れて、驚かされましたが大丈夫です。」

とりあえずホツとした。破片でどこか切った様子も無い。

「えーと…、一体これは何ですか…？」

アルマ先生に現状説明を求める。

原因究明は簡単だ。

ルナが水晶に触れたから。

ただそれだけの筈なのだ。

「…私も実物は初めて見ました。ルナシアさんは希少属性の使い手かもしれません。」

希少属性…？これは初めて聞く単語だ。

「希少属性？何ですかそれは？」

ルナも初めて聞くようだ。

「はい、発現者はおよそ万人に一人と言われる程の、基本の五属性とは全く異なる位置付けの属性です。」

物事には例外がある。俺の複合属性しかり、そしてルナの希少属性は更なる例外的な特性を秘めているようだ。

「しかも判定玉が割れる程です。余程強い属性かもしれません。扱いは気をつけた方が良いでしょう。」

あ…、何て言うか自信無くしてきた…。

くじ引きで二等当てて喜んでる目の前で特賞を当てられた気分だ。

とは言えこんな可愛い女の子に本気で嫉妬を抱く程子供じゃないし、俺の大事な妹なのだ。前世を含めるとどちらかと言えば姪とかそんな感覚ではあるけど。

しかしこれが公爵家クオリティーというものなのだろうか？
兄妹揃って何らかの才能が飛び抜けている。

何かそう考えていると神力を抜きとして五十人に一人程度の自分が
とてもしよぼい様に思えてきた。十分凄いやつなのに…。

部屋に戻り手の平を見つめ考えに耽る。

氷…か…。

出来そうな事をあれやこれやと考えてみる。

想像は膨らむがそれ以前に基本となる無の魔法すら使えないという
現実に些か落ち込む。

それに加えこつちの世界での神力の糸口も掴めていない。

この現状は下手すると俺が考えている以上にまずいかもしれない。
俺はまだほんの少し認められないが現在女なのである。つまり武術
の心得は必要は無い（それでも今後に備え近いうちに習う予定だが）
。

しかし魔法はどうだろうか？これは男女の差が少なく、世間一般的
に評価される内容なのだ。

勉強、マナーは現状ギリセーフとして、今のままであれば落ちこぼ
れの烙印が押されるのも時間の問題かもしれない。

公爵家の顔に泥を塗る訳にはいかない。少なくともこの家族はそん
な事を微塵も気にはしないだろうけど、きっと俺にはその心遣いが
酷く痛い。

ここでふと思った。

…もしかしたら十年も一緒に生活してきて俺はまだどこかこの家族
と壁を作っているのかもしれないという事に気付いた。

…寝よう。

自分の非才（とは言っても周囲が異常なのだが）と家族との自らが作り出した壁を意識した日だった。

14 1天界での遭遇とここ最近

『GO TO HEAVEN』

今日は定期的に天界行くようにしている日に当たっている。

天界での神力の使用は一度コツを掴んでしまえばもう朝飯前といった感じだ。そのためこの頃は地上での神力使用のアドバイス（コーチがああ天使なので当てにはならない）と『生きとし生ける者の大^{ライ}図書館』の使用程度なので月に一度程度しか行っていない。

「よっ！久しぶり。」

いつもいの一番に出会う（といっても他に人を見かけたことも無いが）天使に声を掛ける。

「あ、どうも浮影さん。えーと…、そんな久しぶりでしたっけ…？」
割と真面目に返されると困る。

「挨拶だよ、挨拶。それと人間の一ヶ月は結構長いんだよ。」

微妙に食い違うこの感性にも何となく慣れてきた気がする。

「それで今日はどのようなご用事で？」

「んー、いつもみたいに習慣として来たただけだよ？強いて言うなら地上での神力使用のコツを話半分に聞きたいかな？」

「話半分って…。私、嘘とかはついてないですよ？」

「あー、ゴメン。頼りにならないだけだった。」

「たまに浮影さんって、とてつもなく失礼ですよね？」
自覚はしている。

「いつもいつも擬音だらけの分かりにくい説明をしてるのはどののどいつでしょーねー？」

天使がプイツと目を逸らす。

「私はあれで分かるから良いんですっ！」

コイツ絶対教師には向かないな…。

ふと視界の端に動く物体が移った。

今まで天界では天使以外には動くモノは見た事が無い。

距離感が掴みにくいこの真っ白い空間では分かりづらいがだいぶ小さく見える事からかなり遠くにいると思われる。

目を凝らすと人型というのはかるうじて確認できた。

「なあ、向こうに誰かいるみたいなんだけど…?」

「え…?この空間に私以外ですか…?」

天使の顔が割と深刻になる。

「もしかして何かヤバイ?」

「いえ、しかし恐らくあまり良い者ではありません。」

心臓が高鳴る。もちろん緊張とか焦りとかという意味で。

「あいつは一体誰なんだ?」

「はい、恐らく『アレ』です。」

一瞬何を言ってるのか分からなかった。

「アレってなん…」

だよまで言いかけて言葉が止まる。

思い出した。いや、忘れようとしていたのかもしれない。

自分の体を見渡す。随分可愛らしい人形のような少女の体。

周りの空間を見渡す。真っ白いどこまでも続くかのような天界という不思議な空間。

前世の最期に見た視界を覆い尽くす光。

男で普通の高校生だった自分がこんな状態でこんな場所にいるのも

元はといえば全て『アレ』のせいなのだ。

その事を思い出すと沸々と怒りが沸き起こってきた。

再び『アレ』の方向に目を向ける。

そして決意を固めた。

14 1天界での遭遇とここ最近（後書き）

えー、かなり久しぶりの『アレ』の登場。お忘れの方は一話辺りを見ればいます。

そして久しぶりに見直した作者はあまりの駄文っぷりにチキン肌立ちまくりでした。

あ、今もか！

14 2天界での遭遇とここ最近

「なあ、ちよつとぐらい『アレ』を殴つて来ても良いよな？」

こつちはずつとやられっぱなしで色々溜まっている。やつと巡つて来たチャンスなのだ。

「ちよ、ちよつと待つてください！」

残念ながら今の俺は待てと言われてはい、そうですかと待てるほど冷静な状態ではない。

今にも飛び掛かりそうなのこの身体を抑えるのに精一杯だ。

「悪い、これは質問じゃなく確認なんだ。ということで行ってくる。」

「『アレ』だつて一応ギリギリ認めたくないですけど神なんですよ！？」

すごいお情けの神だ。

「罰当たりとかつて話？」

それなら俺が『アレ』を神つて認めてないから大丈夫！」

しかし本当に部下に信頼されてないんだな『アレ』…。

「違います。無闇な接近は、反撃を喰らう恐れがあります。ですので修業の一環としてここから神力で攻撃してはどうでしょう？」

あ、なるほど。とりあえず『アレ』への攻撃は問題無しと。

しかし天使よ。神に対してその態度はどうなんだ…？

言えた義理じゃないけど。

「よし、分かった。」

とりあえず『アレ』はこちらには気づいてないようだし、何かイラツと来ることに優雅にティータイムらしきを始めやがった。

『朱電弦 奏！！！』

俺の手に雷電の弓矢が握られ、それを放つ。

技名に関してはイメージが固まっていた方が形として現れやすいと

いう理由から名付けた。

とりあえず厨二乙とか言った奴表に出る。

弓の方は実質飾りだが狙いを定めるイメージとしては一役買っている。

そして雷電の矢は恐らく光と同等の速度を持ってして、『アレ』に当たった。

当たった、のだが『アレ』は全く答えた様子を見せない。

あ、こっちに気づいた。

…！？

突如として目の前に『アレ』が現れる。

瞬間移動！？

「お前か？我が至福の時間を邪魔したのは？」

うわっちゃー、だいぶお怒りのご様子。

多分最大出力で打ち出した筈なんだけどな…。

静電気程にも堪えてない。

「閃・光・斬っ！！！」

否定、肯定、有無も言わせずにもう11、2年前にもなる全ての始まりとなったあの技を繰り返した。

気がつくとも毎朝の光景。

繊細な彫刻が彫り込まれた天蓋。

「お姉様！良かった…。」

「あれ？ルナ…？」

何故か俺の部屋にルナがいる。

「分かりませんか？お姉様？もうお昼ですよ？」

なん…だと…？

「起きない事は度々ありましたが、今日は更にうなされていて…。」

本当に心配だったんですからね！」

半ベソのルナ。うん、可愛いな。…じゃなかった。

『アレ』のおかげで昼まで寝過ぎし、ルナにまで心配をかけてしまった。

しかし何なんだ？あのチート性能？瞬間移動してきたぞ？

仮にも神という事をあまりにもナメて掛かっていたのかもしれない。

「そつえばお姉様。今日から武術の鍛練だ、って張り切っているんでしたか？」

一気に青ざめていくのが自分でも分かる。

さて、言い訳はどうしようか…。

14 3天界での遭遇とここ最近

属性判定の日よりだいたい半年の月日が流れていた。

アルマ先生も割と苦勞して、片方が無闇に属性魔法を使うと危なく、片方は無属性魔法すら使えないというめんどくさい姉妹を実習抜きで教えてきた訳だから感心する。しかし先週程に流石に限界が来てしまった。

ルナの属性は相変わらず判断不明だし、俺も魔法を使える兆しは無い。

そんな訳で授業が無期限休止となってしまう、どうするかと考えた結果、俺は良い機会だと考え、ディラン先生より武術を教えて貰おうという結論に至った。

しかし現実には非情である。

有ろう事が初日に寝坊した。しかも自分以外の者による原因で。

極論俺が『アレ』に手出ししなければ万事解決だった気もしなくもないが、少なくともあのタイミングでその判断は有り得なかった。

だって何より他ならぬ自分自身の仇なんだよ!?

あの時ばかりはどうにも堪えが効かなかった。

反省はしている、後悔はしていない。

そんなこんながあり、俺は屋敷内を走り抜け、中庭にもうすぐ到着といったところだ。

あと、直線100…メートル!

因みに自室から中庭までまともに歩くと10分近く掛かる。

窓から直接行けば、1分掛からないのだが、勿論許されないのだから、目と鼻の先の目的地に泣く泣く、遠回りして、全力疾走してきた。

「ゴースルツ!!」

割と息は切れていない。

「すみません!遅れました。」

「大丈夫ですか?お嬢様…。何かうなされていたと聞きましたから、心配してたんですよ?」

「はい、もう大丈夫ですっ!」

「無茶だと判断したら、すぐに中止ですからね?」

身体的にはこのうえ無く健康なので、その点は安心だ。

「では改めて、ディラン・ドミーネ・スロングです。お嬢様といえども容赦無くビシビシといきますので、そのお積りで。」

望むところだ。強くなれないのであれば意味が無い。

健康とかならそこら辺を走ったりや良いのだ。

「ではまず基礎となる…」

さて、授業一発目どんな事をやるんだろうか?

「体を作るための走り込みです。」

え…。

「そこ!嫌そうな顔をしない!嫌ならこれ以上教える事はありません!」

それは困る。だいぶ無理を言っ始めた事なのだ。

最終的には泣き落としにまで持っていった結果がこれだ。こんなところで折れる訳にはいかない。

「…分かりました。」

「では屋敷の周りを走って来て下さい。」

「…何周ですか?」

「さっさと行く!」

「は、はいっ!」

いつぞやの裏庭でウジウジとしていた先生は何だったのだろうか?

何と言うスパルタ…。
それでもやるしか無いのが悲しい所だ。

14 - 4 天界での遭遇とここ最近

ゼエッ…ハアッ…。

いつまで…走りつづけければ良いんだ…？

この身体になつてより限界まで走りつづけた事は無いが、そろそろ限界が近い事は分かる。

ついでにこの身体のハイスペック振りを目の当たりにした。

屋敷周り一周およそ300m。それをペースこそ落ちつつあるものの休憩無しに120周程も走っているとえば如何に凄いか分かるだろう。

少なからずとも十歳の訓練も無い少女の走れる距離ではない。

もう、ゴールしても…良いよね…？

先程も述べた様に限界が迫っていた。

そして今がその時なのだろう。

自分の意識が遠のくのを感じた。

足が纏れる。そしてそのまま。

バタンッ！

ついに俺は倒れてしまった。

次に目が覚めたのは真夜中だった。自室のベッド。

眠る（倒れる？）までの記憶はハッキリとしている。限界まで走り

つづけ、ぶつ倒れたのだ。

正直授業初日からここまできつい内容だとは思わなかった。ノルマを提示された訳でも無いが、目標に達する前に勝手に倒れてしまったのだ。あまり好ましくない事であろう。

それにしても想像を絶する。まさか最初っから倒れるまで走らされるとは…。

アレス兄もこの道を通ったのだろうか？デイラン先生の穏やかそうなイメージに反する授業だが、実際にこの授業を受けたアレス兄の實力は本物だ。

つまりこの授業には裏付けされた実績があるのだ。だったら尚更こんな所で音を上げる訳にはいかない。むしろ女だからって手加減された方がよっぽど腹が立つし、意味が無い。

俺が求めているのは實力。

実践的に使える力なのだから。

という事で、明日も頑張る為に寝ることとする。

腹が減っているが睡眠でごまかせるだろう。

……………眠れねえ。

腹は空腹でグギルルと怪獣の様な音を鳴らしている。

あら、やだわ。恥ずかしい…。なんて気持ちにはさらさらならないが、性質の悪い事にこの空腹は睡眠を妨げる。

こんな真夜中に食料を漁りに行く訳にもいかないしな…。

さっきまでぐっすりだった事も手伝って目はギンギンに開いている。やっぱり昼寝なんてするものじゃない。

正確には貧血とか疲労とかによる昏倒だと思われるがどっちにしようと思わない事には変わりはない。

ここで頭の中に閃いた。

そうだ。天界に行こう。

二日立て続けだが、無理矢理意識を向こうに持って行く訳だから、眠れる眠れないも関係無い。

加えて向こうで空腹は感じ無いし、時が進むのも速い。正に持って来いではないか！

俺すごいナイス！！

そうと決まれば早速

『GO TO HEAVEN』

向かってから気付いた。

また『アレ』が居たりしないよな…？

現状少なくともあんなチート野郎には勝てない。

実際昨日勢いに任せて特攻しちゃった訳だし…。

十分攻撃される理由にはなる。

心に一抹の不安を抱え、天界へと向かうのだった。

14 - 5 天界での遭遇とここ最近

「浮影さん！？ご無事でしたか！！」

天界に入るや否や天使が駆け寄って来た。

「ああ、とりあえず大丈夫。何か朝うなされてたらしいけど、特に異常無し。」

「良かったです…。」

力が抜け、ヘタツとなる天使。

「そんな心配だったの？」

「当然ですよ。まさか『アレ』がいくらなんでも手加減抜きで攻撃するとは思いませんでしたし、浮影さんの姿が無くなったんですから。」

「そりゃ、悪い事したな…。」

「そしてふと思いついた。」

「なあ…？もしかしてまた俺の神力って増えちゃってたりすんの？もしかしてまた吸収しちゃった？」

「…もしかしたら。ちよつと待つて下さいね。」

「そういうと天使は中空で何かを操作し始めた。」

「そっぴいばいつか言つてたな。」

「天使からは俺が想像して出した物は見えないって。つまりはその逆なのだろう。」

「そして天使が俺には見えない何かの操作を終えた。」

「残念ながら増えちゃってますね…。一割増し程ですけど。」

「ホントになんて事してくれたんだ。『アレ』は…。」

「しかし、不思議な体質ですね…。本当なら魂というか存在が丸々消え去っちゃっても不思議じゃない筈なのに…。」

「じゃあ何で俺にそんなのを襲わせたんだよ…。」

「いや、その。そこまで『アレ』がキレるとも浮影さんが止まると

も思えませんでしたし…。」

それは尤もであり、言い返せない。

「とにかく無事で良かったです。あ、あと出来れば『アレ』を責めないであげてくれませんか？」

「いや、割と今回はこっちにも非があるから責めないけどさ、どうして？」

「浮影さん、天界で『アレ』を見たのって初めてですよね？」

「確かそうだな。」

「『アレ』も『アレ』なりに色んな世界で頑張っているんです。ですからこの度のうちの上司のご無礼には何卒目をつぶって頂けないでしょうか？」

それは『アレ』の部下としての天使の言葉だった。正面から謝られて、許さないなんて言える程俺は人で無しでは無い。

「『アレ』の成果と被害が実はどっこいどっこいだったりするんですけどね。」

そこも含めて目をつぶっておくでしょう…。」

「そういえば今更ですが今日はどのようなご用事で？」

「あー、ゴメン…。特に用事は無いわ…。強いて言うなら眠れなかったから暇潰しに来た。」

「あ、じゃあ私の愚痴聞いてくれませんか？」

何でわざわざ天界来て愚痴を聞かなきゃなんのだとか思いかけたが、いつも世話になってるし、今日くらいは良いかなと考え、承諾した。

その結果天使の愚痴は一晩中を通り越し、寝坊ギリギリまで続いた。というが無理矢理切り上げた。そうしなければいつまでも続いた事だろう。

『アレ』にしても天使にしても苦勞してんだな、という事がヒシヒシと伝わってきた日だった。

14 - 6 天界での遭遇とここ最近

今朝は頭痛に悩まされての起床となった。

原因は明確。天使の愚痴だ。無理矢理断ち切ったのがほんの十数秒前の話。

面白おかしくもあつたのだがそればかり聞かされているとやはり飽きるし、疲れる。

実際は小一時間聞いたくらいなのだが後半は時間との戦いになったのも疲労の原因だ。

五倍速の時間経過は想像以上にプレッシャーとなる。
とりあえず…、腹減った…。

今日はいつともは重く感じる朝食もすんなり腹に収まる。

「朝食は残さず食べたようだけど大丈夫かしら？アティ。」

「はい、もう一晩寝たら大丈夫です。お母様。」

「それなら良いんだけど。はあ、若いつていいわね…。」

とは言え実年齢明かさなければ二十代前半にだって見える母の台詞じゃあ無いと思う。

エルフの不老長寿とかホントずるい…。

「最近お姉様は心配かけすぎです。倒れたなんて聞いた時には気が気じゃなかったんですよ？」

「うん…、ゴメン…。」

「どうだ？アティ？武術を学ぶというのは大変だって分かったらろう？」

「はい…。」

何故かこの言葉に微妙に嬉しそうな父。何だかんだ言って最後まで

武術に反対していたのも父だった。

「ですけど、やめませんからね?」

何でそこで残念そうな顔をする、父よ。

「あまり無茶をするなよ? やめたくなくなったらいつでも良いからね? 決してお前を責めたりなんかしないよ?」

今でも心の中では反対しているんだろう。頻りにやめることを推奨してくる。

絶対やめてたまるか。心配してくれるのは嬉しい事だがこの程度の苦勞乗り越えられなきゃこっちは死亡フラグ乱立なんだっつーの!

中庭に待機していたがいつまで待ってもディラン先生は来ない。

当然か。倒れて寝て起きてだしな。

とりあえずディラン先生の元へと行くこととした。

ディラン先生居るかな?

ノックをするといくらか間を置いて扉が開かれる。

俺の姿を見て、少し驚いた様子だった。

とゆうーか寝てないのか? 酷い顔だ。

「昨日はご迷惑をおかけしました。」

まず謝罪。コレ大事。

「私は大丈夫ですから、今日の授業を始めましょう?」

倒れた次の日だったのに性急過ぎるだろうか?

そんな事を考えていたら、何とディラン先生が泣き出してしまった。

流石にこれは想定外である。

「え? ええっ!? お願いですから泣かないで下さい!」

訳が分からない。いや分からなくも無いが何故このタイミング?

「すみません…。でも本当に自分不甲斐なくて…。」

「いえ、本当にこの通り私は元気ですから! 大丈夫ですから! ねっ

!?!」

何で俺はこの人を慰めてんだろ…。

「私は貴女に謝らなければなりません。本当にすみませんでした！」
「えっと、はい…。」

そして何で謝られているんだろうか？

だんだん自分でも今何をすればいいのか分からなくなってきた。

とゆーか今のは何に謝られたんだ？管理責任…？

結局この場はうやむやとなり、一応その後授業はやったけどディラ
ン先生も俺も微妙に上の空だった。

14 - 6 天界での遭遇とここ最近（後書き）

ただ今修学旅行中。

明日には帰るんですけどね。

番外編 スパルタ授業の実態（前書き）

ディラン先生目線の番外編です。

番外編 スパルタ授業の実態

クロノス様よりアテイお嬢様に武術の稽古をつけるように言われた。そして同時に武術に関して諦めさせる様にも。

最初は意味が分からなかった。しかし事情を聞く処によるとアテイお嬢様に泣き落とされたそうだ。

しかしアテイお嬢様が万が一にも危ない目に合う事が不安で仕方ないのだそうだ。

それなら最初からきっぱりと断れば良いのにも思ったが、これはクロノス様の頼み。無下にするわけにもいかない。

全く…、お嬢様たちの前では武王も形無しだ。

そんな事を頼まれ、どうしたら武術を諦めてくれるかを考えた結果、到底続けられないような授業を行う事とした。

授業開始時刻を少し回り、お嬢様がかなりのスピードで走って来た。さて、お嬢様には悪いですが諦めて貰いましょうか…。

お嬢様には実際、リアンの事で恩があったりするのだが、クロノス様の命という事で自分を正当化する。

改まったの自己紹介を行い、厳しく行く旨を伝える。

この程度で諦めてくれるならこっちとしても助かるのだが、お嬢様の芯が強いのは周知の事実。この程度では折れてくれない。

「ではまず基礎となる体を作る為の走り込みです。」
とりあえず自分がやらされて嫌だった物をやらせる。

お嬢様に嫌そうな顔が浮かぶ。

「そこ！嫌そうな顔をしない！嫌ならこれ以上教える事はありません！」

お嬢様に嫌な思いをさせるのは本意じゃない。だからもうここらで折れて欲しかった。

「：分かりました。」

「では屋敷の周りを走って来て下さい。」

「何周ですか？」

困ったな。具体的にはお嬢様が諦めるまでなのだが、そんな事を言える筈もなく。

「さっさと行く！」

無理矢理話を断ち切る事とした。

「は、はいっ！」

少し酷かもしれないが引いてはお嬢様の為。

本当に、本当にごめんなさいアテイお嬢様…！

そしてお嬢様は、走りつづけた。

何周も何周も。ペースは落ちつつあるものの100を超えた辺りから、止めようか止めまいか葛藤が続いた。

130に差し掛かった辺りでお嬢様の姿が見えなくなった。

良かった。きつと諦めて何処かで休憩なさっているのだろう。

屋敷の裏手に周り、その光景に啞然とする。

「お嬢様っ!？」

ゼツゼツと浅い呼吸を繰り返して横たわっていた。

これはまずい。

急いで屋敷の中へと運び込む。

そして屋敷は一時騒然となった。

「申し訳ありません！クロノス様！私の管理不足です！」
「気にするな。お前が気に病む事ではない。命に別状は無いそうだ。あの娘には悪いが、これで諦めてくれるだろう。お前は私の命令を聞いただけなのだ。責任は私にある。」
「そうは言われても自分の気持ちは浮かない。」
「…はい、失礼しました。」
「本当にこれで良かったのだろうか…？」

次の日、憂鬱とした気持ちで部屋に居たところにノックが響く。
俺は目を見張った。

扉を開けるとそこにはアテイお嬢様がいた。

「昨日はご迷惑をおかけしました。私は大丈夫ですから、今日の授業を始めましょう？」

不意に熱い物が目の奥より込み上げてくる。

「お嬢様！昨日は本当にすみませんでした！！」

大の大人がみつともないところを見せてる自覚はある。しかし抑えが効かない。

「え？ええっ！？お願いですから泣かないで下さい！」

その後結局お嬢様に慰められた。

そしてその夜。

「クロノス様。アテイお嬢様の件でお話があります。」

「…何だ？」

「お嬢様に武術を続けさせて下さいませんか？いえ、私に武術を教えさせて下さい！」

流石にこの発言は予想外だったのだろうか？驚いた様子だ。

しかしすぐに厳しい表情になる。

「責任は取れるのか？」

重くのしかかるその言葉。

「万が一の時には私の首を差し出しましょう！ですからお嬢様の意志を汲んであげて下さい！」

それは俺の決意の言葉。

一瞬時が止まった様にも思えた、凍りつく空気。そして…。

「クククツ！ハハハツ！面白い！まさかお前の方が説得されるとはな！面白い！流石我が娘だ！よし、良いだろう！ただしやるからには徹底的にやれよ？」

それはお嬢様にそして俺に向けられた期待の言葉。

「はいっ！お任せ下さい！」

クロノス様の期待、お嬢様の心意気。これらを決して無駄にはしない、そんな決意をその日固めた。

15 - 1 招かれざる客人

月日が経つのは早い物だ。

今俺は十一歳だ。体つきもいくらか女性らしくなってきた。

ただいくら俺が元男と言ったって自分の体にその様な感情は芽生えない。

仮にも自分の体だし、俺にはナルシズムも無い。一応姉妹揃って十人並み以上の美少女だとは思っけど。

そして学院入学まで残された時間は半年となった。

あれよあれよという間に時は過ぎ去っていく。

今までだってそうだったし、これからもそうだろう。

そして結局何が言いたいのかというところ、

未だ何一つ事を成していない！

魔法はてんで駄目、武術は基本は何とか、しかし自信は無い。神力に至っては最早論外だ。

残された時間があまりにも少ないのだ。

そして唐突な話だが、今日はメル兄とアレス兄が帰って来る日となっていたりする。

アレス兄辺りに、武術を教えて貰おう。だいぶ強いらしいし。

別段ディラン先生に不満があるわけではない、単に多方面から教えて貰えば今まで見えなかった部分が見えるかなという気持ちからだ。

午後に差し掛かり、少し深窓の令嬢気取りで自室の窓より外を見ていると、遠くより公爵家の家紋の刻まれた馬車が向かってくるのが見えた。

来た！

出来る事なら窓から直接飛び降りて駆けて行きたいが、生憎ここは二階。

ケガとか云々は気にしないけど礼儀というかむしる常識的な範囲でやっちゃいけない訳で。

とにかく飛び出したい気持ちを抑え、玄関へと向かう。

こんな時にドレスなんて物は非常に鬱陶しい。

走る事はおるか早歩きにさえもちよつかいをかけてくる。慣れない者は思い切り踏み付けて顔面強打も有り得る。これは服というより一種の拘束具といった方がしっくりくる。

俺が玄関に着くのとほぼ同時に馬車も屋敷の前に到着した。

「お帰りなさいませ、アレス兄様。」

「ただいま、アティ。背伸びたんじゃないか？」

笑顔で馬車より降りて来る。

「メル兄様もお帰りなさいませ。」

アレス兄に続き、メル兄が降りて来る。

しかし…。

「メル兄様？どうかなされましたか？」

いつもなら騒々しい例えるから台風の様な人というイメージがあるが何故かムスツとした様な感じでとにかく不機嫌だ。

「ああ、それはだなアティ…。」

その言葉を遮る様に。

「久しぶりだな。」

自分でも顔が引き攣っていくのが分かる。

「こ、この度はどのような御用で？殿下？」

降り立ったのはアラン王子。何か色々間違った人。

「会つのに理由などいるのか？」

「いえ、しかし一国の王子とあるうお方がこのような辺境の地にお越しくださることありませんのに。」

まあ、要約するところち来んな。王都で大人しくしてるとなるのだが、そこは婉曲的にやんわりと。

仮にも国のトップだし。

「今日はアテイ、お前に会いに来たのみじゃないぞ？」

呼び捨てで呼ばれると鳥肌がゾワツと立つ。

しかしこの発言はつまり…。

「ついにルナに気が向いたんですね！元々私には王妃という立場は重過ぎたんですよ。」

「いや、そういう訳ではない。少しディラン殿にな。」

チツと心のうちで舌打ちをし、首を傾げる。

何故ディラン先生？

「殿下、このような場所で立ち話も難です。中に入りましょう？」

アレス兄がここで話を断ち切る。

「うむ、それもそうだな。」

以前もだったがとりあえずメル兄がすごい嫌そうな顔をしていた。

15-1 招かれざる客人（後書き）

はい、お久しぶりです。

ちよくちよく復帰していききたいと思います。

15 - 2 招かれざる客人

兄達（＋）が帰って来た日の午後。

そんな日でも俺は欠かさずに武術の授業を受ける。

むしろアレス兄から教えて貰いたい事だっただけであるので滞在中の二週間にはチャンスなのだ。

だというのに……！どうして、どうしてコイツがいるんだっ！？

そう、何故か隣ではバカ王子と一緒に剣の素振りをしている。

ちよつとそちらを向くとニコツと無駄に爽やかに微笑みかけてくるのが非常にイラツとくる。

無駄にイケメンだから何故か尚更イラツとくる。

遡ること数時間前。

いつだったかの如く突然押しかけてきたアイツは、今度は何をするかと思つたらデイラン先生に武術の師事をしてもらいたいだとか勿論困惑しているのは当のデイラン先生であり、そんな事も露知らず、下心見え見えのアラン王子であった。

しかしそこは仮にも王子クオリティーだ。我を通せば大抵の事は通つてしまう。

だから尚更質が悪い。

色んな意味で周りを見てもらいたい。

王都から出るとなると常に王子の近辺警護にあたっているらしい（というのも常に目に付かない様な所に隠れているとか）護衛も冷や冷やとしている事だろう。

後は俺なんかよりよっぽどマシなルナに目を向けて欲しい。というかささどくつつけお前ら。本人達には知る由も無かるうが、こっちは横取りしちゃった様な罪悪感と運命改変のイレギュラーに数年

間思い悩まされているというのに。

とりあえず俺は馬に蹴られて死ぬのは御免だ。

…やっぱり元々はいなかった存在として家出なりして本人達の前より立ち去るのが手っ取り早いのか？

そんな事を考えていると稽古の手が緩む。

「お嬢様！手が休んでますよ！」

ハツとなり、気を引き締め直す。

「やっぱり本当は殿下の事がすk…。」

言い終わる前にラリアットで押し倒し、それ以上の言葉が続かない様に抑え込む。

「ん…？何かおっしやいましたか？」

力の籠った笑顔で抑えながらに問い掛ける。

問い掛けるとは言っても正確には、ただの確認であり、もっと正確には脅しと言っ。

「い、いえ何でもございません！」

首を全力で横に振り、俺の言いたい事を分かってくれたようなので解放する。

今のはほとんどただのじゃれ合いなので抑え込めたが、実際の所どこまで通用する物なのかは、分からない。

しかしとにかく粗削りではあるものの素手での戦い方の基礎一通りと一部応用、そして現在は剣の扱いを教えてもらっているので護身程度には十分な筈である、うん…多分…。

この半年と少しという期間の成果としては十分な物だとは思っ。

まあ、俺の才能というよりはこの身体の類い稀なるセンスであろう事は重々承知だ。

とりあえずアホ王子が調子に乗りそうなので、絶対にあの後に続きそんな言葉を聞かせる訳にはいかない。

「では、殿下、お嬢様。模擬戦を試してみましようか。」

デイルン先生が突然にそしてサラッと重大な事を述べた。
「…え!?!」
俺とアラン王子の間に緊張が走った。

15 - 3 招かれざる客人

「え、えーと？それは私と殿下とでと言う事でしょうか…？」
「はい、勿論です。」

模擬戦。

武器が木製の物である事を除き、全てが実戦に限りなく近い戦闘訓練。

勿論、木製だからといって武器の形状をとった物なので怪我などざらである。

ディラン先生ともやった事はあるが、ディラン先生の方が格上なので双方怪我をしない様に上手く加減をして貰っていた。

しかし今は、俺とアラン王子。未熟と未熟である。
つまりどちらも怪我をしかねない。

王子が怪我をするのは流石にまずい。飛ぶ。主に俺とディラン先生の首が。スプラッターな意味で。

というか下手すると俺よりディラン先生が危ない。

うん、手を抜こう。そうしないと死ぬんなら仕方ないよね！

「アテイ、まさか手を抜こうなんて思ってた無いやな？そんな女々しいことをしようものなら、すぐにでも娶るぞ？」

色々ツッコミ所が多過ぎる。

まず、今更だが愛称で呼ぶな。後これでも身体は女なんだから女々しくたって良いじゃないか！そして何で娶るって脅しは何！？そしてお前エスパー！？

「…い、いえ、ま、まさかそんな事しませんよ。オホホホ…。」
駄目だ。何かテンパリ過ぎて口調がおかしくなってる。

「そうか、今は身分も婚約者という関係も忘れて掛かって来い。」

「婚約者なんて関係性は最初からありません！」

そのまま永遠に忘れろ。

「でしたら、殿下も私を女性だと見て、手加減なさらないで下さいね？」
となると手を抜かず、悟られない様に俺がわざと軽傷を負えば良いのだ。

自己犠牲的なやり方ではあるが、下手な作戦よりよっぽど被害が小さい。

そうしようと心に決めかけた、その時である。

「ディラン先生」。授業が早く終わったのでアティの授業を見学して行って良いですか？」

「これはメルキウス様、はい、どうぞ。ちょうど今から模擬戦を行おうかと思っていた所でございます。」

……………最悪だ。

「へ、模擬戦ね？」

メル兄がアラン王子に近づき、

「アティが怪我なんてしたら、真昼の真正面からでも気をつけて歩いた方が良いでしょう？」

アラン王子は涼しい顔。

俺は冷や汗がダラダラと出ている。

メル兄、顔が表面しか笑って無いし、それは脅しじゃなく、ただの犯罪予告。

メル兄の乱入により、俺の選択肢は絞られた。

アラン王子に怪我をさせずに勝つ（降参させる）。ついでに俺も無傷で。

そうしないと誰かの首が飛ぶ。もしくは結婚させられる可能性がある。

「お嬢様、そんな硬くならなくても大丈夫です。危ないようならすぐに止めますから。」

だったら既に危険なので止めて下さい。

と言いたくても言えず……。

どうしよう、こんな事なら真剣勝負だった方がまだ良かった気がする。

退路は断られた。

こうして俺は負けられない闘いに臨む事となった。

15 - 4 招かれざる客人

俺は緊張した面持ちで木剣を構える。

対してアラン王子は割とリラックスしている。

失う物が無いんだから当然か。こちらの気持ちも知らないで…。

「では…、始めっ！」

とは言われても双方動かない。

俺の双肩に懸かっている物を考えると安易には動けない。

相手を良く見て、隙をついて一発で決める。

これがベストであろう。

ダッ！！

向こうから先に動いた。

ガンッ！！

右より横薙ぎに木剣が迫り、互いの獲物が交差する。

別段俺は腕が太い訳ではない。しかし獣人の筋力は男女差を埋め、拮抗した鏝ぜり合いを展開する。

このままでは、埒が開かないので俺が後ろに飛びのき、距離を取る。

「ふむ、やはり魔法剣でないとあまり良い動きが出来ないな。」

そつえばいつだったかメル兄と対立した時に炎の剣を見せていたな。

「それを理由に負けたなんて言わないで下さい…ねっ！」

地を強く接近する。スピードは悪くない。

しかし直後俺はこの接近を後悔した。

ガッ！

俺の手より獲物は離れ、宙を舞い、そして首筋には木剣が突き出されていた。

瞬時には何が起きたか把握できなかった。

「私の…負けです…。」

居合い。この世界には無いであろうと思っていた。加えて初めの相手からの接近で完全に念頭より消えていた。

「やっぱり普通の剣じゃやりづらいな…。」

何故木剣で良い動きが出来ないなんて言ったのかが分かった。

木剣は両刃の剣をモチーフとして作られた物であり、居合い斬りをするのには適していない形だ。

「…それは何処で学んだんですか？」

日本人としてどこかロマンを感じる日本刀と居合い斬り。是非学びたいと興味が湧いたので聞いてみる。

「この技か？三年前だったか。王城に一人の黒いドレスの女性が来てな。一週間くらい滞在していたのだがその時にその女性より教えてもらってな。」

加えて後は独学だそうだ。

「その黒いドレスの女性というのは？」

「俺も詳しくは分からないんだ。スマンな。」

少し落ち込んだ。王城の騎士とかならまだ教えて貰えたかもしれないのに…。

「…アティはこの技を変に思わないんだな。」

「…？どこが変なんですか？」

「ほら、あれだ。自ら立ち向かわず、相手を待つ。何か変じゃないか？」

立ち向かっていけないのは男らしく無いみたいなルールでもあるんだろうか？

「そんなの人の勝手じゃないですか。個性ですよ、個性。」

「個性…か。そういつてくれたのはアティが初めてかもな。ありがとう。」

「ミスった…。」

また地味に好感度を上げちゃった気がする…。」

「どちらも良い勝負でしたよ。お疲れ様でした。」

「ディラン先生より労いの言葉がかけられる。」

「とりあえず双方無事に終わったが、今考えるとホントに色々危なかつた気がする。」

「お疲れ様、アティ…。もう本当にあと少しで勝てそうだったのにね…。レディに対して手加減も知らない様な王子にあるまじき振るまいをする奴に負けちゃったのはホント悔しいよね…。」

「そろそろ王子権限が発動しないかメル兄の事が心配になってきた。」

「安心しろ、アティ。次にこの剣を見せる時はお前を守る時だ。」

「ニヤツと微笑み掛けてくる。」

「少しのイラツキと不覚にも少し格好良いと思ってしまった。」

15 - 5 招かれざる客人 (前書き)

最後の方で作者が少し暴走入ったので読む際は注意して下さい。

15 - 5 招かれざる客人

「ふうー…。」

元の世界の銭湯と大差の無い物に浸かり、一日の汗を流す。

この屋敷には、三年程前に湯舟が取り付けられた。それまではただお湯（ただのとは言ってもこの世界での手間を考えると割と贅沢）で体を流すだけだった。

そこまで関心を持っていた訳ではない為あまり詳しく無いが、三年前よりこの世界の技術発展は目覚ましい物であった。

通信玉という携帯というよりはトランシーバー？に近い物が開発され、近年は小型化と量産化が進み、庶民にも手を出せる様になった。湯舟もその時期に王城に取り付けられたと聞き、少しだけ我が儘を言つて屋敷にも取り入れてもらった。

半年前には、ここウイルディアにも公共浴場が作られ、皆がお風呂を満喫出来る様になった。

判定玉もその頃に開発された技術らしく、それまでは片っ端から呪文を唱えねばならず、自らの属性を見つけるといふのは割と大変だったらしい。

人々の生活の質の向上は勿論良い事だと思う。

しかし俺は違和感を覚える、あまりにも急、というより纏まり過ぎではないか？

これに加え、アラン王子が居合い斬りを習つたというのも三年前。勘ぐり過ぎなだけかもしれないが、俺の見通せない所で何かが捻れ、本来の運命とはズレている様な嫌な予感がした。

とは言え考えても答に辿り着ける訳でも無い。

「ふうー…。」

再び大きく息を吐き出す。

「さっきからそればかりですね。」

「うーん…？ちょっと今日は疲れたかもしれませぬね。」
声の主はルナ。

うん、一緒にお風呂に入ってる。

美少女と一緒に風呂、前世なら即座に110番を押され、爆発するやらもげるやら言われそうなシチュエーションではあるが、別に初めてでも無いし、あくまで女の子同士、きつとセーフだ。

あと正直な所例えは悪いが去勢された雄猫の如く、性格的にも丸くなった…かは微妙だが、女性への興味というのは薄れてきた。そこから男へと興味が移る訳では無いが。

ルナの視線が一箇所に集まる。

「……………」
ルナがじつと俺の身体の一箇所を見つめる。

「……………？何…？」

「……………ずるい。」

「ずるい？」

「ずるいつ！何で双子なのにお姉様だけ胸が大きいのっ！？」

「ぶっ！？」

思わず吹き出してしまった。

「私は真剣ですよ！？双子なのに不公平です！」

これは割と本気の時のルナだ。

「…じゃあどうして、その…胸が大きい方が良いの？」

「どうしてって、やはりそちらの方が魅力的？ですし…。」

「なら大丈夫よ、今のままでルナは十分魅力的なもの。」

のぼせたのか照れからなのかルナの顔が少し赤い。

「うう…、持つ者の余裕ですか？」

「べ、別にそんな訳じゃ…。」

「ずるいつ！ずるいずるいずるいつ！持たざる者の気持ちも理解して下さい！」

そんな事を訴えかけ、

ムニユツ！

「ひゃあっ!?!」

突然ルナが胸を揉んできた。

「は、離してよー!」

「嫌ですー。お姉様はもっと人の気持ちを理解して下さい!」

などというキヤツキヤツウフフな展開を繰り広げていたら、風呂上がりが、脱衣所でメル兄が鼻血で倒れているというコメディな惨状が繰り広げられていた。しかし無視して足蹴で退かした。

残念ながら俺は変態に掛ける情は持ち合わせていなかった。

16 1 運命の更新(前書き)

また長く期間が空いてしまいました…。

作者はリア充爆発しろと言う側なので聖夜も書き続けますよw

アラン王子が屋敷にやって来たので少しでも運命が変わっていないか、そんな淡い希望をのせて俺は天界へと向かった。

変わり様の無い白く、どこまでも続く空間。

この空間の、俺の望むたった一箇所が変わっていてくれれば良いのだ。

しかしそれは俺が数年間尽力（人生の九割九分を屋敷で過ごしてきた俺の力など高が知っているが）しても成し得なかったことだ。今更些細な事で変わるとも思えないが、願わずにはいられなかった。

「よっ、久しぶり。元気か？」

「天界の人達は体調を崩さないのだからわかりませんが、浮影さんの感覚で言えば多分元気です。」

毎度お馴染みの天使のお迎え。

本人曰くただいるだけらしいが。

確かに『アレ』は一度しか見た事が無いが、天使は逆に見なかった事が無い。俺がいると構ってくれるが、いつもは何をしているんだろっか？

「今日はどのようなご用事で？」

「まあ、ほとんどいつも通り。日常にちょっと変化があったから何か変わっていないか確かめたくてさ。」

「そうですね。でも浮影さんの関わっていない変化だと何も変わっていませんよ？」

「瞬間のこつちやと思った。」

「……………あつ、そっか…。」

「瞬考えて理解した。」

運命を変えるのは俺しかないのだから、俺が呼んだならまだしも、アラン王子の考えで屋敷に来たとしても何も変わらないのだ。

期待を裏切られ少し肩を落とす。

一応ルナの本を呼び出す。

(…あれ？本が…うすくなってる…?)

手に取った本は以前よりも薄く感じた。

嫌な予感がした。急いで本を開く。

そこにあっただのはルナがアラン王子と結婚するか否かなんて生易しい運命などでは無く、現段階からの想像なんて全くつかない様な未来だった。

虐げられ、蔑まれ、辱められているような未来。

その有り様は奴隷の様な、否、そのものかもしれない。

頭の中に嫌悪を催す物がとめどなく流れ込んで来るイメージ。

目の前が歪む様な感覚。

「うあああーっ！！？」

パニックに陥る。

頭が痛い、耳鳴りがする、吐き気を催す。

「！？何があっただんですか！？浮影さん！浮影さんっ！！浮影さんっ！！？」

俺の意識はそこで途切れた。

あまりにも衝撃的な内容に脳がついていけなかったようだ。

夢を見た。半分夢の様な世界で夢なんてのもおかしな話だが、夢を見た。

ルナが助けを求め、手を伸ばす。こちらも手を伸ばすが、届かない。触れてもすぐに引き離される。

もどかしくて仕方の無い夢。

夢、夢なのにこのままだときっとそれは現実となる。そんな確信めいた予感がする。

そんな運命はいらない。

リアン先生の時だつて何とかなつたんだ。ならきつと、きつと今回だつて…！

「…ん！浮影さん！！」

「ん？おお…。」

「おお、じゃないです！

何があつたんですか！？」

少しクラクラとする頭で見た物を少し思い出す。

「ひどい運命を見たよ。認めたくない、あつちやならない様な運命。

」

少し天使の顔が険しくなる。

「…それをどうするつもりですか？」

「絶対に変えてやる。止めるならあんたでも容赦しない。」

ふう、と一息つく天使。

「そうやって嫌な事を全て捻曲げるつもりですか？」

天使から発せられる予想もしていなかつた厳しい言葉。

「…！！」

言葉に詰まる。

「だけど…！！」

「だけど、何です？」

「変えたい。変えたいんだよ！その運命を…！！」

「全てを擲つてでも？」

「…！！」

「何を驚くんです？一人の運命を変えるとは、その周り全てを変え
る事。当然の事じゃないですか。」

クスクスと冷たく微笑む天使。

「良いよ…。何でも差し出してやるよ…！だから…ルナは、ルナだ

けは絶対傷つけさせない！！」

これは嘘偽りの無い心よりの言葉だと思う。

その瞬間天使がフツと明るく微笑み。

「合かーく！」

天使がどこよりか取り出した鐘がカランカランと鳴る。緊迫した空
気も何処に行つたのか。

「…へ？」

「いや最初から止める気はありませんよ？え？まさか今更止まりま
せんよね？」

「…ああ、勿論…。」

俺は何と言つか呆然としている。

「ふふつ、なら思う存分やっちゃって下さい！長年『アレ』の後始
末をしてきたんです！浮影さんが全力で暴れたってちょちょいのち
よいですから！」

先程の冷たい雰囲気はまるで見せず、いつもの天使だ。

「…さつきは何で止めたの？」

「ああ…、運命変えるつてのはホントに結構大変なので、あの程度
の脅しで留まる様ならとちよつとした試験なのですよ。今回は本気
の様なので、気兼ね無くやって構いませんよ。」

かなり私情が挟まつてた！？
でも…

「…サンキュ。」

ポソツと呟く。

今回は失敗が許されない。

言われなくても遠慮なんかしないが、天使の心遣いはありがたかつ
た。

16 2 運命の更新

まずは情報収集だ。

実際俺は非力だと言える。ならば俺にとっての情報とは唯一にして最大の武器である。

「問題は、この運命の発端はいつなのか、という話だな…。」

「えーと、ルナシアさんはこの世界での貴方の妹さんでしたか。」

「ああ、一度意図せずとは言え、運命を変えちゃってるからこれ以上ルナの運命を悪い方向には持って行きたくない。」

「はいはい、フルネームはルナシア・ラグラン・トピアーズですね。」

「うん、そう。」

「はい、見つかりました。」

「んじゃ、どうしてこんな運命になったかを俺は最後の方から辿る。今現在は無事だから11歳頃の時期から探してくれないか？」

「了解しました。」

正直、今となつてはこの本に触れるのさえ恐ろしい。

ただどルナの為だ。

覚悟を決め、読みに掛かろうとする。

と同時に

「あ、見つかりました。」

早っ！？俺の覚悟を返せ！

「何歳頃！？」

「はい、11歳七ヶ月の頃です。」

その言葉に啞然とし、思考が止まりそうになる。

「ハッ、ハハッ…、ハハハハハハ…。」

七ヶ月…？今月じゃん…？

真っ白になる、何も考えたくない。

どうして…？ルナが、俺が、何をしたんだよ？

ワケガワカラナイ。なぜ？ドウシテ？

頭の中で疑問が答えも得られずに飛び回っている。

「落ち着いて下さい。浮影さん。」

「落ち着け？落ち着いてられるか！？ルナに危険が迫ってんだぞ！

？」

「ならば尚更です。唯一の解決手段が取り乱してどうするんですか！？」

解決手段。その言葉で少しだけ落ち着いた。

「ルナの身に何が起こるんだ？」

事柄によつては、止められる。無理でも足掻いてやる。

「はい、ルナシアさんは誘拐事件に巻き込まれるようです。」

…誘拐？

「良いですか？現在あの世界に滞在中の天界の者はいません。貴方以外にこの運命を変えられる者はいないんです。」

最初から期待していないがルナシア誘拐事件を止められるのは結局

俺のみという事か…。

そしてそこに一つの疑問が生まれた。

「…じゃあ、じゃあ何でこの運命が発生したんだ？」

一部の者の干渉が無ければ運命は変わらない。

そしてその運命を変えられるのはあの世界で俺一人。

つまりこれは、

俺の行動により引き寄せられたのか…？

「運命とは繊細です。始めはほんの少しのズレでも時の経過と共に本来の軸からのズレはより大きな物となります。」

「俺が数年前に仕出かした事が今になって影響が出て来たかもしれないって事か？」

「可能性の話ですけどね。あるいはもつと別な…。」

歯切れの悪い回答だが、重要なのはそこではない。

「なあ、どうしたらこの事件を止められる？」

「貴方の身の周りかどのようなのかは知りませんが、ルナシアさんから離れないのが重要では？」

解決手段でも何でも無い様なやつぱり大雑把な回答だった。

「…ありがとな。」

一言お礼を言う。目処も立たない今、助言にもなっていないけど天使の言葉はありがたく感じた。

「しばらくはこっち来れないかもな。」

「無茶はしないで下さいね？」

「…善処するよ。」

正直これは約束出来ない。今無茶しないときつと後悔するから。後ろ向きに手を振り、俺は天界を去った。

16 3 運命の更新

天界より意識が戻り、身体が目覚める。

どうでもいいがこれって幽体離脱の一種みたいなものだろうか？
そして開眼一番に目に入った（というか覗き込んでいる）のが、ア
ラン王子というのもきつとどうでもいい事なのだろう。

「目覚めたか？アテイ？」

「目覚めたか？じゃありません。何故私の寝室に居るのですか？」
流石にキモい。何で人の寝顔ジツと見てるんだよ。

「何故？婚約者を心配するのは当然だろう。」

「とりあえず着替えるので出ていって下さい。」

「む、スマンな。」

ここで一つの言葉が引っ掛かった。

心配…？

「待って下さい！私は、私はどのくらい眠っていたんですか！？」

「取り乱すな。一日と少しだ。クロノス公より話は聞いた。持病だ
そうだな。全く、まるでおとぎ話だな。」

一日と少し？何でそんなに？

…あ、ルナの運命を見て気絶したんだっけ。

「…全く心配ばかり掛けて。まあ、またそのような所がまた良いの
だな。」

何か喋っているようだが聞き流しているので、ほとんど独り言だ。

「…ルナは？ルナシアは何処に行ったのですか！？」

ハツとなり、ルナの行方を訪ねる。

「ルナシア嬢か？ルナシア嬢は確かアレスト殿と町に行くと言って
いたな。」

町！？まずい。絶対にまずい！

「まだ屋敷にいますか！？」

「どうしたんだ？そんなに慌てて？とりあえず落ち着け。」

「答えて下さい！屋敷に居るんですね！？」

「あ、ああ…。まだ居るはずだ。」

まだ、まだ間に合う。

急げ…、急げ！

「っ！？アテイ！？」

着替えを手伝って貰う時間すら惜しい。

急ぐあまりに生着替えを晒している事に俺は気付いていなかった。

一秒が惜しいので窓から直接飛び出す。

スタツと華麗に着地をきめる。

後には呆然としたアラン王子が残っていた。

部屋履きのまま飛び出してきたので少々走りづらいが、気にしている余裕は無い。

日が高い。昼頃か？

最短ルートで正面口に向かう。

いた！！

まさに正門を出ようとしていたところだった。

「待って下さい！お兄様！ルナ！」

「アテイ！？起きたのか！」

「お姉様！？」

ハアハアと息を整え、訴え掛ける。

「行かないで下さい！今日町に出てはいけません！」

「急にどうしたんだ？アテイ？それに体の方は大丈夫なのか？」

ある意味当然のように不思議がられる。

「大丈夫です。とにかく町に行かないで下さい！」

「それは何故ですか？お姉様。」

何故って…。ルナが誘拐されるから、と言いたくてもそれはあまり

にも非現実的過ぎる。

「それは…、その…。」

そのまま機転の効いた事も言えず、
「もしかして寝ている間に置いてかれそうになった事を拗ねているのか？その事は謝るが…。ただ今日は屋敷の中でしっかり休んでいてくれ、ほら、何かお土産も買って来てあげるから。」
そんな話じゃない。

「だから…！その…。」

「本当に心配してくれてるんだな…。大丈夫、何も起こらないよ。」
違う。何も大丈夫なんかじゃない。

…止められない。このままだと…。

「…それなら、それなら私も連れて行って下さい！！」

「本当に体の方は大丈夫なのか？まだ休んでいた方が…。」

「大丈夫です。十分寝ました。」

止められないなら、こちらから出向いて変えてやる。

「まあ、大丈夫ならそれで良いんだが…。一応お父様とお母様に挨拶してこいよ？」

「絶対に！絶対に先に行かないで下さいね？」

振りじゃないかというくらいに念を押しておく。

「分かった分かった。行ってこい。」

急いで父と母に会いに行く。

くそっ…、この場で止められなかった。

しかし正直予想はしていた。ルナが誘拐されるなんて言える訳無いし、信じないだろう。

ならば、こちらが止まらないなら、次善としては犯人側を止める。もっと以前からならまだしも現段階から可能な策ではその程度しか思いつかなかった。

もし、それが可能であるならこれが根本的解決となり、ある意味最善だ。

ローリスクローリターンに対し、ハイリスクハイリターン。
出来る限りリスクは冒したくない。だが何もしなければあの運命が
現実となるだけだ。
俺は今、これまでの人生で最も過酷な所にいるだろう。

メイドさんの一人より、両親が食堂に居ることを聞き、真っ直ぐそちらに向かう。

そこでは夫婦仲良く紅茶を啜っていた。

「あら、アテイ。起きていたの？」

「はい、つい先程。」

「今に始まった事ではないが、身体の調子は大丈夫か？」

「大丈夫です。どこも悪い所はありません。」

そう言つて、飛び跳ねたりして調子の悪くない事をアピールする。

「それで、その…、相談があるのですが…。」

「何だい？アテイ？」

そうしてルナ達に同行したい旨を伝えた。

「一応の為にもう一度聞くが身体は大丈夫なんだな？」

「はいっ！」

「なら、行って来なさい。」

「ありがとうございますっ！」

「くれぐれも無茶はするなよ？」

「…分かりました。」

その質問には素直に「はい」と言い切れなかった。

心の中でごめんなさいと呟き、食堂を後とする。

一度部屋に戻る。部屋履きのまま飛び出して来てしまったし、初めてのルナとの秘密の外出時に買った外套を取る為だ。

その道中アラン王子に出くわす。

「アテイ！その…、先程はすまなかった。」

一瞬何の事かと首を傾げる。記憶を辿った。すぐに原因に突き当たる。

この時になつて、ようやく着替え、ひいては全身を余すところなく見せつけていた事に気付く。

顔が朱に染まつていくのが自分でも良く分かる。

激しく自己嫌悪。

「…忘れて下さい。」

「ああ…、すまなかつた。」

しかし素直に謝りに来るとは思ったより、律儀な奴なのかもしれん。

「ところで何故あんなに急いでいたんだ？」

言うべきか？

…伝えるだけ伝えておこう。

「例えば、殿下が大切な人がいなくなる夢を見たらどうします？」

「それはアテイがいなくなるという事か？」

何でコイツはよく恥ずかしげも無く、本人前にしてこういう事言えるな。

「誰でも良いです。私はルナが誘拐されるなんて夢を見ました。」

「…確かにその者が心配になるな。しかし所詮夢ではないのか？」

そう、ただの夢。他人からしたら天界なんて存在せず、ただの妄想。寝ている間に伝え聞いたなんて子供の話、同じ子供にも信じて貰えないだろう。

「そう、ですね…。所詮夢です。取り留めも無いただの空想。どうぞ戯言とお聞き流し下さい。では、私は急いでいます故。」

頭を下げ、先を急ぐ。

すれ違い様。

「もし、お前が悪い夢を見続けるといふなら、俺は何処にいようとお前を迎えに行つてやる。」

とてもくさい台詞だった。

しかしその言葉が何故かとても嬉しかった。

俺は数年前ならこんな事言わなかっただろうなと自嘲気味に笑い、

「フツツ、待つてますよ。」
と答えた。

さて、思ったより時間を喰ってしまった。

部屋に辿り着き、靴を外出用に履き替え、ルナとの初めての外出で買った外套に手を掛ける。

とても地味な茶色の外套。買った時のサイズだから今は少し小さいがまだまだ現役だ。

今日で最後じゃない。またこれを着てルナと一緒に出掛けたいから。だから俺は運命を変えるんだ。

そんな決意を固め、ルナ達の元へと戻った。

16 5 運命の更新

急いでルナ達の元に戻って来た。
しつかりと玄関を通って。

「お待たせしました。」

「遅いですよ？お姉様。」

ルナが頬を膨らませ怒った振りをする。

「まあ、良いじゃないか。ほら、行くぞ？」

「「ハイ。」」

そんなお気楽な雰囲気の中、俺は一人緊張感を張り巡らせる。
あの運命の予定日は11歳7ヶ月のいつか。

その期間に当てはまりそうなのは現在から二週間程度。

もしかしたら今日かもしれないし、明日かもしれない。

外出の際を狙う可能性は高いだろう。

しかしこれには一つ問題がある。犯人側の行動だ。

何故、犯人はこの外出を知っている？

公爵令嬢誘拐なんて大それた事、突発的に出来る筈が無い。

俺だってこの外出を今日になって知ったのだ。

犯人側が知る手立てなどある筈が無い。

犯人の計画はもつと別の所を狙っている…？

勝手な推測が頭の中でグルグルと回る。

そんな時不意に

「どうしたんだ、アティ？そんな険しい顔をして？まさか具合が悪いのか！？」

「あ、いえ、大丈夫です。ちょっと考え事を。」

「そうか。」

アレス兄がそつと耳打ちをする。

「…ホントに何も無いのか？お前の気の張り方が尋常じゃないぞ…？」

そんな事を言われ、今ならアレス兄が信じてくれる気がした。

「ルナが…その…、誘拐されるかもしれないんです…。」
誘拐、その言葉にアレス兄が真剣な面持ちになる。

「そんな話をどこで聞いたんだい？」

「…寝ている間に。」

言ってから後悔した馬鹿正直に言っただけで信じて貰える筈が無い。

「夢って事か…？」

言葉に詰まる。夢じゃない、しかしそれ以外に説明しようも無い。

「フツ、アハハハツ。大丈夫だ、アテイ！今日は俺もついているんだ。だから安心しろ！」

「笑い事じゃないんですっ！」

大丈夫だ、そう言っただけで俺の頭に手を乗せ、掻き回すアレス兄。

「でも…！」

「いいか？アテイ、それはただの夢だ。どんな怖い夢を見たってそれが現実にかかる訳じゃない。何も怖い事なんて無いんだ。良いね？」

これ以上は無駄だと自分でも悟った。信じて貰えない。

でも確かにそれが今日起こるとは限らない。俺がルナから目を離さなければ良いんだ。

そう自分に言い聞かせた。

何事も無く、町の見物続ける。

ウィルディアは領主（父）の人柄もあり、あらゆる種類の人間が入りする。そのため獣人以外がいても特別奇異の目で見られない。つまりどのような人間が入り込んでいても不自然は無い。

排他的なのは好きではないが、この時ばかりは、この開放的な現状を嘆いた。

「そつえばメル兄様はどうしたんですか？」

外出なんてそれこそメル兄が喜びそうなイベントなのに…。

「あー…、あいつは補習だよ…。」

メル兄の（魔法以外の）成績を考えると納得だ。

「トレイ先生とマンツーマンらしい。」

ハハッと呆れ半分に笑う。

しかし本当に残念だ。

実はこの世界での犯罪件数というのは思ったよりも多くない。

単に治安が良いのではない。女子供でも魔法という武器を持っている可能性があるからだ。

そのうえ魔力媒体は指揮棒のような短杖や指輪に付いた宝石など小物が多く、一見すると丸腰のようで見分けがつかない。

そのため余程の事が無い限り事件は起こらない（もちろんゼロでは無いし、報告されていない物だってあるだろうが）。

つまり魔法のエキスパートであるメル兄がいれば、力強い事この上ない。

のだが、こんな時に限っていない。

とは言え眼前に広がるのは平和そのものの世界。

とても誘拐なんて物騒な話とは無縁に思える風景。

バンッ！！

そしてその日常を打ち壊す爆音。

その時確かに運命の歯車は狂い始めた。

16 5 運命の更新（後書き）

超展開乙とか言われぬ様に頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9549t/>

運命の眠り姫

2011年12月24日07時22分発行